神の母聖マリア（ルカ 2:16-21）

打ち明けたいものは母マリアに

皆さん明けましておめでとうございます。新しい年も、よろしくお願いいたします。皆さんといっしょに、今年も信仰の道を歩んでいきたいと思います。

新年のあいさつ、この場を借りてごあいさつに代えさせていただきます。今日神の母聖マリアの祭日は守るべき大祝日であり、あいさつの必要な方は必ずここに集まってくださっているはずです。あらかじめ、念を押しておきたいと思います。

さて、教会は年の初めを神の母聖マリアに託しましょうと呼びかけます。マリアは、今日の朗読にありますように、「出来事をすべて心に納めて、思い巡らしてくださる方」（19 節参照）です。私たち一人ひとりのことも含めて、母として心に留めてくださるのですから、この一年を実りあるものとするために、初日に自分を託すというのは大変賢いことです。マリアはこれからの一年を見守ってくださり、必要があれば神に取りなしをしてくださることでしょう。

この心に留めてくださる母の姿を、さらに掘り下げてみたいと思います。神の母となってくださった聖マリアは、洗礼によって神の子とされた私たちすべての母となってくださいますが、子供と母親の関係は、父親との関係とはまた違った面を持っているのではないでしょうか。

スポーツを例に考えてみたいと思います。子供はしばしば、親の期待に応えようと努力するわけですが、一般に子供は、親には良いところを見せたい、また心配をかけたくないという考えが働くのではないでしょうか。

たとえば、何かの代表選手に選ばれると、親の期待を感じているその子は結果を出そうと努力するものです。たとえ練習中に怪我をしても、試合の当日に体調を崩していても、何とか結果を出して喜ばせようと、抱えている不安を隠そうとするのではないでしょうか。

問題はここからなのですが、そうは言ってもやはり、体の不調や怪我、試合を前にしての不安などは必ずついて回るものです。そんな不安を、子供はどちらに打ち明けるのでしょうか。父親に、不安を打ち明けるのでしょうか。母親にでしょうか。

私は、ほぼ間違いなく母親に打ち明けるのだと思います。私の経験で言えば、父親に心の不安や、怪我してしまったことを打ち明けたとしても、自分で乗り越えなさいと言われるだけで、心配も同情もしてもらえないと思います。少なくとも、父親は表面上は心配してくれるそぶりを見せないと思うのです。

ところが母親は、子供たちの弱さを自分のことのように心にかけてくれます。怪我を抱えている、内心は不安だらけでおびえている。そんな弱さに、母親はしばしば寄り添ってくれるものなのです。

この、母親に特に見られる心配りに、私たちは目を向けたいと思い

ます。父親には「元気で頑張っている、何も問題はない」と言ってはいても、母親にさらに尋ねられると、「実はこんなことで困っている」とか、「こんな病気になっている」とか、弱さを打ち明けたくなるのではないでしょうか。

もしかしたら、父親はこうしたことを理解しないかも知れません。「そんな弱い子供に育てた覚えはない」と、突き放されるかも知れない。そう思うとますます、子供は心配をかけてはいけないと思って、父親の前では無理をしたり頑張りすぎたりするわけですが、それでも母親には、弱い面を打ち明けて聞いてもらいたいと思うものなのです。

私たちのこうした経験は、実はマリアにも期待してよい部分ではないでしょうか。社会生活であれ、信仰の歩みにおいてであれ、人間は失敗もせず弱りもせず、何も問題ない、すべてはうまくいっていると言えるような道のりを辿れるものではありません。しばしば道を外れ、弱り果て、歩くことに疲れて座り込むのです。そんなとき、親に心配かけてはいけないという思いと、自分のありのままを聞いて欲しい知って欲しいという両方の思いに、板挟みになるのではないでしょうか。

社会生活の中では、実際の母親か、配偶者、あるいは信頼できる誰かが、あなたの弱さを聞いてくれることでしょう。ですが、信仰の面では、なかなかそういった頼れる人を持つことができないかも知れません。

マリアはそんな弱さを抱える私たちの母です。信仰の面でも何も問題ない、いつも順調だと言い張るあなたは、心のどこかで罪を抱えているかも知れません。人に言えず、弱さを見せることもできず、強がっているかも知れません。ですが、人間はそんなに強くはないのです。信仰生活を、「私に問題はない」と言って一生を終われるほど立派ではないのです。

そんなとき、自分の弱さ、足りなさを素直に打ち明けるのは、母である聖マリアではないかと思うのです。父なる神の前に立たされると、「私は信仰上の問題は何もありません」と言い張っていますが、マリアがどんな弱さでも打ち明けてみなさいと言ってくれるなら、実際はいろんな弱さを打ち明けたいのではないでしょうか。

教会に何年も足を運んでいないのに、「私はまだ弱っていません」と言い張っています。人間関係で神様に心配かけていても、心配かけたくないあまり「自分のことは自分でします」とつい言ってしまう。マリアは、神の母として、神の子供である私たちの母として、強がっている私たちに手を差し伸べてくださるのだと思います。

いろんな事情で、信仰面に問題があるのを、ありませんと言い続けているのであれば、心の中をマリアに打ち明けましょう。マリアは母として、弱さも含めてわたしたちを受け入れてくださいます。誰にも言えない弱さも、母はそのまま受け止めてくださいます。母の思いやりを今日あらためて認め、この一年をマリアに託して始めることにいたしましょう。

私たちはマリアを通って、この一年を始めます。幼子イエスの成長とともに、母の暖かいまなざしの中で私たちも信仰を成長させていくことができるように、続けてミサの中で願うことにいたしましょう。

主の公現(マタイ 2:1-12)

主の公現(マタイ 2:1-12)

学者たちとともに幼子の前に跪こう

主の公現の祝日を迎えました。占星術の学者たちは幼子イエスを礼拝し、「ヘロデのもとへ帰るな」と夢でお告げを受け、別の道を通って自分たちの国へ帰りました。占星術の学者たちのように、私たちも「ヘロデのもとへ帰るな」この意味についても考えることにしましょう。

今年は元日が仕事始めになりました。正月一日の夜 6 時、平戸ザビエル教会の神父様から、「今すぐ北松中央病院に行って欲しいんだけど、行けるか？」と電話がかかりました。先輩は神の母聖マリアのミサをささげてすぐ休暇を取り、実家の飽ノ浦に帰っていたそうです。所属する信者さんが危篤で連絡が入ったがあいにくすぐに行けない。お前行けるか？ということでした。

私はすぐ「はい。大丈夫です」と返事しました。でも下心もありました。「これで恩を売ったなぁ」ということです。まぁそれはたいしたことではありませんが、初日から司祭の務めを果たせる、初日からかけがえのない奉仕に関わることができる。何と素晴らしい生き方だろう。小中高校生、青年の皆さんいかがですかとその時思いました。

年が明けてから寒くて、トレーニングは外を走らずルームランナーで適当に済ませています。三日まではたしかに寒かったですが、週末になると日焼けしそうなぽかぽか陽気で外に出てトレーニングできたはずです。でも怠けて、ここ数日ルームランナーばっかりです。時速５キロ、６キロ、７キロと三段階速度が上がって、それを３セット繰り返すパターンを利用しています。まぁ、全くやらないよりはましか、と自分を慰めています。

福音朗読に移りましょう。今年 2019 年の説教は、「瀬戸山の風」に書いた通り、「あと一歩前に出る神の民となれますように」この年間テーマを踏まえて話そうと思っています。また、説教を聞く皆さんも、そのつもりで必要なことを聞いて持ち帰ってください。

いよいよ占星術の学者たちが、幼子イエスを礼拝しに来ました。彼らは一般常識に倣って、ヘロデ王の支配する国に入るのだから、まずはヘロデ王に挨拶してから「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」を拝みに行こうとします。21 世紀であってでも、国によってはどんな活動をするのか届け出ておかないと、スパイ活動をしていると決めつけられてひどい目に遭わされることもあるので、ひとまずヘロデ王に挨拶に行くことは賢明な判断でした。

ところがヘロデは占星術の学者たちが入国した理由を聞いて、良くない考えを巡らせました。対立する王が現れた。力を蓄える前に葬ってしまおう。これももしかしたら、一般常識かも知れません。挨拶を終え、再び星の導きで新しく生まれた王を訪ねる学者たちを見送りながら、すでにヘロデは部下に尾行させた可能性もあります。

たとえ背後に危険が迫っていても、占星術の学者たちは星の導きを

信じて幼子のもとに急ぎました。彼らが見たものは、家と呼べるか分からないような場所に母マリアと共におられた幼子でした。「彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」（2・11）

占星術の学者たちは全く疑うことなく幼子に礼拝を献げ、贈り物を献げたのでしょうか。ヘロデ王が邪心を持ってもなお「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と挨拶で述べたのですから、全く疑いを持っていなかったのでしょう。

彼ら占星術の学者たちが礼拝し、贈り物を献げた幼子イエスは、学者たちがひれ伏すような圧倒的なものを持っていたのでしょうか。幼子イエスを見る前から、彼らにとって幼子は「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」だったのですが、そのお方が家畜小屋で飼い葉桶に寝かされていること、これはすでに学者たちを圧倒する出来事だったかも知れません。

彼らが想像していたのは、一般常識で考えられる王子の誕生の場面だったでしょう。彼らは想像を完全に覆されました。予想を覆された時、人間ができることは、目を背けることか、自分の予想をあっさり横に置くことか、いずれかです。これから自分たちの国に帰って、目で見たことを告げ知らせる彼らは、予想を完全に覆す圧倒的なお方を心に納めて帰ったのです。

私たちはどうでしょうか。占星術の学者たちと同じように、家畜小屋で飼い葉桶に寝かされている幼子の前に、膝をかがめることができるでしょうか。無力に見えて、全能であるお方を、思い込みを捨てて礼拝することができるでしょうか。

幼子イエスに跪くことができる人は、聖金曜日に十字架上のイエスに跪くこともできます。「こんな方が人類を救えるはずがない」と言うなら、十字架上で命を終え、命を父なる神にお返しになるイエスにも「こんな方が人類を救えるはずがない」と言うのでしょう。

今日、主の公現に学者たちとともに跪く人は、イエスを信じる信仰を土台に生きる人です。半信半疑の人は、あなたが作り上げた信仰を信じる人です。私たちも占星術の学者とともに、自分が正しいと思っている殻を破り、一歩前に出て、幼子イエスに跪きましょう。「ここが座り心地が良い」と考えている場所を越えて飼い葉桶に眠る幼子の前に行かなければ、イエス・キリストを信じる本物のキリスト者にはなれないのです。

主の洗礼(ルカ 3:15-16,21-22)

主日の福音 19/01/13 (No.983)

主の洗礼（ルカ 3:15-16,21-22）

イエスに倣い、人々の架け橋となる

主の洗礼の祝日を迎えました。主の降誕に続く降誕節は今日までです。イスラエル巡礼をした時、私が訪問した御公現後も、ベツレヘムとかあちこちで馬小屋が飾られていました。私もかつて、馬小屋のセットを残して、そこに洗礼者ヨハネとイエスの御像を置いて、イエスの洗礼はこんな雰囲気だったかなぁと当時の教会の皆さんと思い巡らしたことがあります。

子供達はお年玉はいっぱいもらったのでしょうか。私も評議会から過分なお年玉をもらいました。また個人的にもいただきました。子供達はお年玉はどんなふうに使いますか？私はメガネを買うことにしました。５年以上このメガネを掛けていますが、疲れている時に文字がダブったりして、お説教を考える時に気になるようになりました。

もちろん一個人の中田輝次が一月に何を買おうが、一月に何をしようが、知ったことではないと思うでしょう。ただ主任司祭の中田輝次神父がメガネを買い直すとなると、「よりよい仕事ができるようにつなげてくれるのかな」と考えてくれるのかなと思って、日常のことをちょっと挟んで話しております。

さて与えられた福音朗読の、イエスが洗礼を受ける場面は、イエス一人を注目させていると言うよりも、イエス以前の群衆とのつながりに目を向けさせているように思います。「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。」（3・21-22）イエスの洗礼だけを描くのではなく、イエス以前に洗礼を受けた人も同時に描いているからです。

洗礼者ヨハネが授けていた洗礼は、「悔い改めの洗礼」でした。後にイエスが授ける「聖霊による洗礼」の前触れと言ってもよいでしょう。すると、前触れの意味合いがあるヨハネの洗礼は、いよいよ始まる聖霊による洗礼によって、過去のものとされてしまうわけです。ではヨハネの洗礼を受けた人々も、イエスによって過去の人とされてしまうのでしょうか。

ある意味、そうなるかも知れません。けれどもイエスは、ヨハネの洗礼を受けることで、イエス以前のすべての民を受け入れたのです。私たち今の時代の人々は、父と子と聖霊による洗礼を受けて神の子とされますが、イエス以前の人々はそうではありません。そのため、イエスが彼以前のすべての民を受け入れるしるしとして、ヨハネの洗礼をお受けになったのではないでしょうか。

それはたとえて言うなら、川を隔てて分かれていた場所をつなぐ橋のようなものです。それまでつながりを持っていなかった両岸の人々が、橋のおかげでつながります。人と人とを結ぶ絆もそうです。イエスは彼以前のすべての民と、イエス以後のすべての民を、人としてつないでく

ださったのです。

イエスが受けた洗礼を、これまでの人々とこれからの人との架け橋、絆と考えるなら、イエスを模範とする私たちが今週学ぶべきことも見えてきます。私たち一人一人が、「これまで通りでずっと行こう」という姿勢に留まるなら、これからの人々との架け橋になることはできません。イエスは「私が架け橋となった。私が模範を残した。あなたがたも同じようにしなさい」と呼びかけておられます。

大人になって洗礼を受ける人は、幼い頃から洗礼を受けた人が体に染みついて覚えていることがどうしても難しいと思います。幼い頃からロザリオの祈りを唱えてきたこととか、大人になって洗礼を受けた人にはなかなか入っていけないと思うのです。

その際「見よう見まねで覚えなさい。私たちもそうだったのだから」という態度は、架け橋になる人の態度ではないと思うのです。どこがなじめないのか、どうしたらなじめるのか、あと一歩踏み込んで手伝ってください。その努力が、イエスに倣って架け橋になろうとする姿だと思います。

信仰生活の架け橋になってお役に立てる人は、もしかしたらそれ以前にもう一つ心がけている人かも知れません。日常生活です。日常生活で「どこがなじめないのか、どうしたらなじめるのか」あと一歩踏み込んで手伝ってくださったおかけで信頼を得て、「信仰の面でも教えていただこう」という気持ちになり、日常生活と信仰生活の両面で架け橋になれるのだと思います。日常生活と信仰生活は、切っても切り離せないのです。

「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。」人口減少や少子化、都市と地方の格差、さまざま聞こえてくることは私たちの心を塞ぎ、ため息の元となることばかりです。けれどもイエスの模範に倣い、架け橋となるわざを根気強く続けましょう。

天が開ける。聖霊が降る。これは現代でも起こります。イエスがすべての人の架け橋となってくださったのですから、私たちの教会にもしるしを与えてくださることを信じて、私はどの場所で架け橋となれるのか、探し求めることにしましょう。

年間第 2 主日(ヨハネ 2:1-11)

年間第 2 主日（ヨハネ 2:1-11）

世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした

降誕節が終わり、年間の季節が始まって一週間が過ぎました。今週は年間第 2 主日です。与えられた福音朗読は「カナでの婚礼」で、イエスが水をぶどう酒に変える驚くべきしるしが取り上げられました。

イエスが出来事に関わってくださると、危機的状況が予想もできない豊かさを生み出す場に変わります。最終的にカナの婚礼は、十字架上のイエスという悲劇的状況から全人類を豊かに満たすぶどう酒が湧き出ることの象徴でした。

先週は先輩橋口朝光神父様を神様のもとに送ることになり、本当に悲しい思いをしました。大先輩たちであれば、「全うしたなぁ」と納得できたかも知れません。けれども 64 歳、佐世保地区の地区長としてまだまだ教区の大切な働き手を失ったことが、残念でなりませんでした。

私は、橋口神父様に謝っても謝りきれないことをしたので、それも悔やんでいます。一度橋口神父様の額をバットで殴ったことがあるのです。私がまだ新米司祭の頃、司祭団ソフトボール大会でのことでした。

当時長崎教区の若手・中堅司祭はゴロゴロいたので、ソフトボールも出番あればベストを尽くす、それだけでした。その年は打席で活躍し、ちょい役ではなくレギュラーで使ってもらっていたのです。試合が続く中で、「よっしゃ、次もヒットを打ってやるか」そんな気持ちで自分で持ち込んだバットで素振りをしながら試合会場を移動していたのです。

自分の後方で「ゴキッ！」という鈍い音がしました。そして後ろにいる司祭たちが「大丈夫か？」と言っているのです。振り向くと、移動しながら素振りをしていた私のバットで、どうやら橋口神父様の額を思いっきり殴ったみたいなのです。大変なことをしてしまったと思い、謝っていると橋口神父様から「周りを見たのか？お前だけがここにいるわけではないことを考えなかったのか？」と、大目玉を食らったのでした。

私は先輩に怪我をさせてしまった申し訳なさであとの試合は打って変わって結果を出せなくなり、あえなく控えに回されました。あの試合以来、怪我をさせてしまった橋口神父様のことが頭から離れなくなりました。13 日にお亡くなりになった、という一報を聞いた時、すぐに「バット事件」を思い出したのでした。

話は前後しますが、橋口神父様からは長崎の小神学院時代、鯛ノ浦教会助任として赴任してきた私の大神学院時代、浜串教会時代と、事あるごとにご指導いただいたのでした。今、お亡くなりになって思うことは、一人の司祭がどれほど貴重であるか、ということです。

橋口神父様は 10 人兄弟の第一子長男であったと聞いています。兄弟姉妹全員を代表する人を、橋口神父様のご両親は司祭職にささげてくださいました。ご両親が、10 人のお子さんを立派に育て、社会に送り出すのももちろん並大抵のことではありませんが、社会人の一人となるはずの人を司祭職におささげするのはもっと大変なことだと思ったのです。

司祭職は資格や条件で与えられるものではありません。十分な資格があっても、選ばれないこともあります。社会の物差しでは測れない部分があるわけです。水をぶどう酒に変えて、その場にいるすべての人に悲嘆や絶望の中から喜びを与えるイエスにしか為し得ない、秘跡の恵みがそこにはあります。条件や資格で言えば、同級生皆と何ら変わらない一人を、水がぶどう酒に変えられていったように、イエスは叙階の恵みで司祭に変えてくださるのです。

橋口神父様も、水がぶどう酒に変えられる体験をした一人でした。そして、受けた恵みが自分のためでなく人のためにあることを十分理解していました。ぶどう酒がぶどう酒であるのは自分のためではないように、橋口神父様も自分を人のために差し出して人生を終えたのでした。

ある時は、神学院で学生を育てる仕事です。期待に胸を膨らませて司祭になった、まずは教会に配属されることを望むはずです。それを、大司教様の望みに答えて自分の思いではなく神様のために自らを差し出しました。神学院での奉仕は 6 年にわたりました。これだけ長かったのですから、小教区の主任に任命されてもおかしくありませんでした。

それなのに、次の辞令は助任司祭でした。本心は分かりませんが、思いとは違ったかも知れません。それでも橋口神父様は、自分の中の水が、ぶどう酒に変わって人々のお役に立てるように、自分の思いではなく神の望みに忠実であろうとしたのです。

最後は佐世保相浦教会の主任と、地区長の重責を背負いつつ、志半ばで旅立つことになりました。神様に不平の一つや二つ言いたかったはずです。けれども自分の思いが水をぶどう酒に変えるイエスのわざの妨げとなるなら手放すのだ。そうしてすべてを委ねて旅立ったのです。

人間の力では、どう転んでも水をぶどう酒に変えることはできません。それができるのは神の子イエス・キリストだけです。イエスはそのことをカナの婚礼でしるしとして見せたのですが、最終的には十字架の上で見せてくださったのです。人が十字架の上で死ぬことを、誰が恵みに変えることができるでしょうか？イエス・キリストだけが、十字架上での死を、全人類の救いの恵みに変えることができたのです。

水を、ぶどう酒に変えることのできるお方。十字架上の死を、全人類の救いに変えることのできるお方。そのイエス・キリストに生涯尽くした橋口神父様に、今週の福音朗読を重ねて考えてみました。

小学生中学生の男の子たちは、ぜひ考えてみてください。どんな一流大学を出ても結局は社会人にしかなれませんが、イエスに従うなら、あっと驚くぶどう酒に変えてもらえるのです。そして、イエス様からぶどう酒に変えてもらった司祭たちは、パンとぶどう酒をイエス様の御体と御血に変えるわざを、今も祭壇の上で繰り返し続けているのです。

年間第 3 主日(ルカ 1:1-4;4:14-21)

年間第 3 主日 (ルカ 1:1-4;4:14-21)

私たちもイエスのことばの証言者になれる

年間第 3 主日Ｃ年です。イエスが会堂で係の者から渡された聖書の巻物はイザヤ書でした。預言者が預言した出来事が、今目の前にある。これが今週のメッセージだと思います。

教皇フランシスコがはっきりと 11 月下旬の訪日を言葉にしました。10 ヶ月くらいの期間しかありませんが、いよいよ待望の教皇様来日が実現します。38 年前に直接お目にかかった人も、事情があってお目にかかれなかった人も、今回はその機会を逃さないようにしましょう。

私たちは教皇様をどのように意識するでしょうか。ほとんど意識しないかも知れません。もちろん、ミサの中では毎日名前を呼んでいますので、賢い方々はそこで意識するでしょう。そのほかには、教皇様を身近に感じるのはいつでしょうか。

そうなると答えるのが難しいかも知れません。いくつか様子をうかがえるものを紹介します。教皇様は毎週何かしらのメッセージをバチカンの広場で発しておられます。それが伝わってくるのは「カトリック新聞」という全国紙です。カトリック新聞は毎週発行されていて、よく教皇様の声を取り上げています。いつでも申込は受け付けます。声をかけてください。

また、教皇様は全世界に重要な指針を示すために、さまざまな文書を発表します。なかでも使徒的勧告や回勅は、その一言が世界全体に考えさせたり行動を促したりするので重要です。これまでに「福音の喜び」とか「ラウダート・シ（ともに暮らす家を大切に）」さらに「愛の喜び」新しいのでは「喜びに喜べ」などです。どれも温かみあふれる、今の時代に必要とされるメッセージです。日本語訳は案内所にも置いてありますから、手に取ってみたら良いと思います。

前任者で名誉教皇となられたベネディクト 16 世に、皆さんあまり親近感がないかも知れません。けれども教皇文書は光るものがありました。今もその輝きは失っていません。「毎日のミサ」という書物を注文している人はよくご存じでしょう。

このように現代において、教皇様が身近に感じられる場所は、まずは使徒的勧告や回勅からです。なぜなら、教皇様にはまずお目にかかれることがないためです。文書ですら、圧倒的な存在感を示す方が、目の前においでになったらどうでしょう。私たちは運良くその瞬間を目にするのです。

与えられた福音朗読は同じことを述べています。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」

これが当時会堂に集まった民衆にとってどんなに恵み深い言葉であったか、推して知ることができるでしょう。巻物に記された神のことばだけでも喜びの知らせですが、この喜びの知らせが実現したと目の前で語るイエスを見ているのです。

イエスはこの日の出来事を皮切りに、有言実行します。捕らわれている人に解放を告げます。法に背き、見える牢屋に入れられている人だけではありません。見えない牢屋に捕らわれている人にも、イエスは解放を告げるのです。目の見えない人もそうです。「見える」と言っている人も、この世の価値観で目が曇り、神の前に価値あるものが見えなくなっている人もいるのです。イエスだけが、これらの人に視力の回復を与えることができます。

現代社会で圧迫されている人は、さらに複雑、巧妙に圧迫を受けていることでしょう。見えない方法で、隠れた仕方で圧迫されている人にも、巻物の文字だけではなく、イエスの存在が、「あなたはわたしを信じてくれた。だからあなたは今、この時から自由になった」と理解するのです。聖書の文字、読み上げられた言葉だけでなく、今ここにおられるイエスが、恵みの保証となってくださるのです。

私たちも、証言者となる必要があります。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」イエスが私たちのうちにおられて、このように語ってくださった。私たちはイエスの約束を土台にして生きています。このように、証言する人になって欲しいのです。

罪に縛られ、捕らわれている人が、赦しの秘跡を受けて解放されます。自分の命を自分で救えない私たちに、洗礼の秘跡は永遠の命を、神の子の身分を保障してくださり、見えない未来を見えるようにしてくださいます。

聖体の秘跡という神の子羊の食卓に招かれ、どんな圧迫の中でも一人ひとりが大切にされることを体験します。私たちが秘跡に養われて生きていることを土台にしているなら、だれもがイエスのことばの証言者になれるのです。

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」私たちにその気があれば、イエスは現代においても私たちという巻物を人々の前で開いて、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と証明することができるのです。

年間第 4 主日（ルカ 4:21-30）

敵意の中を悠然と立ち去るイエス

「しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。」（4・30）先週のイエスの恵み深い言葉は会堂内にいる人々に期待を持たせましたが、人々が期待していたのは社会一般に行われている地元への利益誘導とか身内にもたらされる特権とかでした。イエスは政治家でもなく、権力を用いて身内に恩恵をもたらす人でもありません。人々が勝手に思い描いていた期待は崩れ去り、イエスは人々の憎しみに取り囲まれます。絶体絶命の危機に、イエスは何を思ったのでしょうか。

司祭団マラソン大会は、まずまずの成績でした。去年のタイムを更新したからです。「悔いはないか？」と言われたら、もう少し走れたかも知れないなぁという悔いはあります。９キロのマラソンを走りきった翌日には、浜串の海に出てイトヨリ釣りを満喫していたからです。筋肉痛で一歩も動けないほど走っていれば、翌日ウキウキしてボート釣りなどできないはずですから。

教会敷地の道路向かいに、黒毛和牛の像が設置されましたね～。私は賄いさんにこう言いました。「これから牛肉は買いに行かずに、こっそり包丁で削ってくるだけでいいよね。」さらにこう付け加えました。「あんまり頻繁に行くと牛に怒られるからね。」「どんなふうにですか？」と言うので、「『もう～』って怒られるさ」と言いました。

「これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。」（4・28-29）かわいさ余って憎さ百倍と言いますが、まさにそういう状況でしょう。けれども人々はイエスに怪我一つ加えることができませんでした。利益誘導を期待していたのも事実でしょうし、身内が恩恵にあずかれるかも知れないと思っていたのも事実でしょう。だから対抗も反論もできなかったのだと思います。

敵意と憎しみの中を通り抜けて、イエスは悠然と立ち去っていきます。今週の聖書朗読の中でいちばん最後、もしかしたら中心部分ではないのかも知れませんが、私はイエスの姿を見送るようにしてじっと眺めてみました。どんな思いだったのでしょうか。

一つ考えられるとしたら、イエスがエルサレムに入られる場面です。イエスは子ロバを用意してもらい、それに乗ってエルサレムに入られます。マタイ福音書を引用すると、「そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。『ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。』」（マタイ 21・9）ここでイエスは歓喜の声に迎えられていますが、彼らがまもなく「十字架につけよ」と叫ぶこともご存じでしたから、歓喜の声を気に留めることもなく、悠然と通り抜けたのだと思います。

両方に共通するのは何でしょうか。それはイエスを取り囲んでいる人が歓喜の声を上げても憎しみを燃え上がらせても、イエスはその声に

振り回されなかったということです。敵意の中でも歓呼の中でも悠然とその中を通り抜けることができたのは、イエスが王の中の王であったからです。父である神が王であるキリストの保証であり、民衆が一喜一憂しても、全く振り回されることはなかったのです。

自分自身に当てはめて考えてみました。ミサが始まる時、入祭の歌に合わせて入堂します。特に大祝日のミサでは聖堂中央の通路を通って入堂します。参列者の様子が気になります。聖歌に力がなければそれも気になります。今日のミサは何人か。いろいろ気にして通路を歩いているのです。

もっとイエスのように、悠然と入堂できるはずです。私がささげる礼拝は、父なる神へ、会衆とともにイエスによってささげる礼拝です。今日のミサに何人出席していようが、それが何だというのでしょう。揺るぎない心で、入堂し、ミサをささげる。イエスが人々の間を通り抜けて立ち去られたあの場面を思い巡らしながら、自分自身の取り組む姿勢を考えさせられたのです。

皆さんも、イエスが敵意の中を通り抜けて立ち去られた場面から、ふだんの生活を思い起こしてみましょう。皆さんの中には、家庭で祈りをしている方もおられるでしょう。一方で内心は「ほとんどのカトリック信徒は、朝晩の祈りをしていないかも知れない」という疑いも持っているかも知れません。

それが何だというのでしょう。私は朝晩の祈りを全うする。祈りを受け取るのは父と子と聖霊の神です。周りを気にして何になるでしょう。神様と私だけが、ささげている朝晩の祈りを知っています。それだけで十分ではありませんか。祈りを受け取ってくださる神だけが、私を今日生かしてくださるのです。

ある日、五島から長崎に向かうフェリーの甲板で、一人の先輩司祭が私にこう言いました。「俺は最後まで司祭職を全うする。たとえ長崎教区のすべての司祭が職務を全うできなかったとしても、私は全うする。そういう覚悟だ。」

ひょっとしたら私が、先輩をうさんくさい目で見ていたのかも知れません。私の目が「お前はチャラ男だ」と訴えていたのかも知れません。あのフェリーで交わした会話が、その先輩と交わした数少ない会話です。言葉で言ったことはないですが、この先輩すごいなぁと思いました。

イエスは敵意に取り囲まれている中を、悠然と通り抜け、立ち去って行かれます。私たちカトリック信者も、熱心に信仰してどうなるのだと、静かな敵意の中に取り囲まれています。イエスのように、悠然と通り抜けましょう。

堅信式、初聖体式を控えている子供達も、強い気持ちでいて欲しいと思います。カトリックの信仰を守り抜くということは、いつの時代でも火の中・水の中を通るよりも難しい道なのです。それでも悠然と、堅信式、初聖体式を通り抜けることにしましょう。私たちが見るべき相手は、わたしたちを生かし、救ってくださる全能の神なのです。

年間第 5 主日（ルカ 5:1-11）

イエスのことばに信頼し、一歩踏み出す

年間第 5 主日Ｃ年、「漁師を弟子にする」場面が選ばれました。「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」（5・5）ペトロの勇気ある答えに、私たちも耳を傾けましょう。

先週マラソン大会の報告を少しだけしましたが、お恥ずかしい話がくっついていまして、ついでに話したいと思います。53 分 42 秒で走り終えて、完走した人から順に、司祭館と信徒会館のお風呂を開放してひとまず着替えることになります。希望者は「コンカナ王国」というホテルの大浴場に連れて行ってもらえるのですが、私は福江でのマラソンを終えてすぐ上五島に船で移動し、実家に帰ることを優先したので、教会信徒会館のシャワーだけ浴びさせてもらったのです。

疲れていたのでしょうか。またもやここで着替えを持たずにシャワーに入ってしまいまして、信徒会館から司祭館に戻って着替えるまで、グチョグチョに濡れた服をまた着て戻りました。司祭館で慌てて着替え、上五島行きのフェリーに乗るために若い司祭にターミナルに送ってもらったのですが、フェリーの中で荷物を確認したら、なんとマラソンで着ていた服がリュックに入ってないのです。

レジ袋に放り込んで、司祭館の応接室に置いたまま、司祭館を出るという失態をしでかしました。福江教会の助任の山内啓輔神父様に、「すまんけど、これこれの忘れ物をしたので送ってくれ」とお願いする羽目になりました。きれいに洗濯を終えて戻ってきましたが、私のパンツ、山内神父様が選択してくれたのでしょうか？

マラソン大会のコースは堂崎天主堂から福江教会まで約 9 キロあるのですが、楽々走り終える人は別として、私のように最後は気力もなくなるようなレベルの人は、振り返るとよくまぁ最後まで走り終えたなと我ながら感心するのです。残り 3 キロあたりで気力体力をすべて奪い取るような坂道が待っていまして、去年もそうでしたが、今年もこの坂道をどのように登り切ったのか、全く思い出せないくらい疲れ果てました。

何も考えられないくらい疲れていましたが、それでも何かしら、希望はあったのです。なぜならその坂を登り切ると、あとはゴールまで 2 キロとなり、確実に終わりが近づくからです。自分で勝手に「地獄の上り坂」と名付けていますが、この坂を登り切る力はどこから来たのかと考え直しました。

もはや気力も体力もなくなった頃にこの「地獄の上り坂」がやって来るわけです。体力とか、気力を超える何かが、背中を押してくれた。そうとしか考えられません。私はその「何か」を、ペトロの言葉から考えてみたのです。「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」（5・5）

ペトロもまた、夜通し働き、体力も気力も残っていませんでした。何をどうやっても、結果を出せるはずがない所まで追い詰められていました。それなのに、「お言葉ですから」そう言って、網を降ろしたのです。釣りをする人はよく「最後の一投」とか言って仕掛けを降ろしますが、ペトロは最後の一投はすでに降ろして引き返してきていたわけで、さらにもう一回網を降ろすのは自分のためではなくイエスのためだったのです。

すると状況が一変しました。「おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった」（5・6）のです。

もはやペトロの気力体力の延長線上には何も期待できませんでした。全く違うものに信頼を寄せて、一歩踏み出したのです。ペトロの延長線上ではなく、これから始まる「イエスのことば」に信頼を寄せて、歩き出した。そこで状況は一変しました。

私も、それに近い感覚をマラソンで味わいました。もはや自分の気力体力は「この地獄の上り坂は登れない。生まれて初めて、歩いてこの場をしのごう。」そういう誘惑に駆られていたわけです。自分の気力体力の延長線上では、もはや乗り切ることは無理だったのです。

しかし、何かが背中を押してくれました。全く違う何か。言い過ぎかも知れませんがそれが、「イエスのことば」なのだと思います。「ここで歩いたら、田平教会の今年一年の司牧活動も、肝心な時に歩くことになるぞ。それでもいいのか。」言葉に表せば、そういうことでしょうか。

状況は一変しました。坂を登り切って、急に元気が出てきました。どこにこれだけの元気が残っていたのかと思うくらいです。それは、坂を歩いてからでは決して得られない劇的な変化でした。あのときの体験があるから、戻ってからの司牧も頑張れますし、ここだけの話ですが、ルームランナーも今も続けて 30 分 40 分のトレーニングを積み上げています。

ペトロが体験したことは、「イエスの言葉に信頼を置いて一歩踏み出すと、状況はすっかり変わる」ということです。ペトロが持っている気力体力の延長線上にはもはや希望は何も見えなかったのですが、そんな中でイエスのことばは人に希望を与え続けるのです。

私たちがどんなにこの先続けても希望が持てないと考えるのは、自分の気力体力、知力の延長線上で物事を考えているからだと思います。全く違う道があります。イエスのことばに信頼を置いて一歩を踏み出すということです。

イエスは今も、私たちにことばを掛けて、「わたしを信じる者は決して乾くことがない」（ヨハネ 6・35）「わたしを信じる者は、死んでも生きる」（同 11・25）「わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる」（同 14・12）と招き続けているのです。イエスのことばに信頼を置くかどうかはあなたに委ねられています。

年間第 6 主日（ルカ 6:17,20-26）

神の国はあなたがたのものである

今日一列目に座っている二人は、洗礼を受ける兄妹です。来週には初聖体を受けます。きっと楽しみにしていると思います。二人は、お母さんと一緒に神父様のところに初聖体を受けたいですとお願いに来ました。神父様はすぐに「もちろんいいですよ。お安いご用です」と言いたかったのですが、少し考えさせるために厳しいことを言いました。

二つ、厳しい質問をしました。覚えているでしょうか。一つ目の質問は、「初聖体を楽しみにしていると思うけれども、『楽しみにしていた初聖体が終わったから、教会に行くのはやーめた。』こんな気持ちだったら、洗礼も初聖体も受けられません。どうしますか？」この質問に妹さんは立派に答えてくれました。『初聖体のあとも、続けて教会に行きます。』」

もう一つの質問はこうでした。「これからもしかしたら、小学生中学生になって、習い事や部活に行くかも知れません。『部活で忙しくなったから、教会に行くのはやーめた。』こんなふうになるなら、洗礼も初聖体を認めることはできません。どうしますか？」この質問にも、立派に答えてくれました。『小学校に入っても中学生になっても、続けて教会に来ます。』」中田神父様はこの返事を聞いて、約束を守ってくれることを信じて、洗礼と初聖体を授けることにしました。必ず約束は守ってください。お願いします。

神父様には小学生の時の忘れられない出来事がいくつかあります。その中の一つを、今日の洗礼式と、中学生がお昼二時から受ける堅信式に役に立てて欲しくて話したいと思います。ご飯としょう油の話です。

神父様のお家は、初めのうちお父さんが船の仕事で頂く給料で生活していました。お父さんは 1 ヶ月のうち 27 日働いて 3 日帰ってきていました。お給料を受け取って、それですべてをしなければいけません。お母さんは働きに出ず、子供達と過ごしていました。

昼ご飯の時です。ご飯としょう油だけでした。「お母さんおかずは？」と聞いたら「ない。ごめんね」と言われました。他にもお金が出ていくので、とうとうおかずが買えなくなったのです。そんな時に、教会の班の班長さんがやってきて、教会費をお願いしますと言っています。

お母さんは用意していた封筒を班長さんに預けました。その時子供の私は、「おかずがなくても、教会費は必ず払うんだな」と思ったのです。お母さんは私たちにこう言いました。「神様が生かしてくださるのだから、神様のためのお金は減らすことはできない。」神父様はその時に、私たち子供はご飯としょう油で生かされているのではなくて、神様に生かされているんだなと覚えたのです。

神父様は時々、お母さんが学校の担任の先生から「子供さんがいつも同じ服を着ています」と言われているのを聞いていました。服を持ってなかったからです。だから神父様は友達から「着たきり雀」と言われ

ていましたが、私を生かしてくださっているのは神様だと知っていたので、何を言われても平気でした。

忘れないでください。今日洗礼の恵みをくださった神様が、二人を生かしてくれるお方です。来週初聖体のお恵みを与えてくださり、中学生になった時に堅信のお恵みを与えてくださる神様が、あなたたちを生かしてくださるお方です。ですから、これからも続けて教会に来てください。神様の恵みを受けて、神様に頂いた永遠の命を大切にしてください。二人が約束してくれることを信じて、洗礼を授けたいと思います。

（日曜９時以外のミサの説教のために）今週の９時のミサで、二人のお子さん、兄と妹が洗礼を受けます。９時のミサではその二人に向けて話をする予定です。そのままの話をするわけにはいかないので、内容をかいつまんで話したいと思います。

お話しした二人は、お母さんと一緒に初聖体を受けたいですと私のところにお願いに来ました。すぐに「もちろんいいですよ」と言いたかったのですが、少し考えさせるために厳しいことを言いました。一つ目の質問は、「楽しみにしていた初聖体が終わったから、教会に行くのはやーめた」では困るとはっきり言いました。妹さんは「初聖体のあとも、続けて教会に行きます」と立派に答えてくれました。

もう一つ、「これからもしかしたら、部活で忙しくなったから、教会に行くのはやーめた」となるかも知れない。大丈夫かと。この質問にも、立派に答えてくれました。中田神父は子供達の立派な返事を聞いて、洗礼と初聖体を授けることにしました。

私は続けて、小学生の時の忘れられない体験を話しました。ご飯としょう油の話です。実家は、初めのうち父が船で稼いだ給料が全てでした。遠洋漁業で１ヶ月のうち 27 日働いて３日帰ってきていました。給料を受け取って、それですべてを賄わなければなりません。

ある日の昼、ご飯としょう油だけ並んでいました。「お金が底をついたのだ」と分かりました。そんな時に、教会の班長さんがやってきて、「教会費をお願いします」と言われました。

お母さんは用意していた封筒を班長さんに預けました。子供ながらに、「おかずがなくても、教会費は必ず払うんだな」と思ったのを覚えています。母は信念を曲げない人でした。「神様が生かしてくださるのだから、神様のためのお金は減らすことはできない。」

私は時々、母が学校の担任の先生から「子供さんがいつも同じ服を着ています」と言われているのを聞いていました。友達からも「着たきり雀」と言われていました。何を言われても平気でした。私を生かしてくださっているのは神様だと知っていたからです。

洗礼を受ける二人にこれだけは伝えたい。今日洗礼の恵みをくださった神様が、二人を生かしてくれるお方です。次週初聖体のお恵みを与え、中学生になった時に堅信のお恵みを与えてくださる神様が、あなたたちを生かしてくださるお方です。二人が続けて教会に来て、神様に頂いた永遠の命を大切にしてくれると信じ、洗礼を授けたいと思います。

年間第 7 主日 (ルカ 6:27-38)

神様の恵みは、いつもすぐに働く

今日、期待に胸を膨らませて、三人のお子さんが初聖体を受けます。この中には、先週洗礼を受けたお子さんが二人います。初聖体を受ける最後の準備のために、お話をよく聞いていてください。

御聖体は、見た目は小さなパンですが、このパンの中にイエス様がおられます。イエス様は洗礼を受けた皆さんの心の奥深くに入るために、小さなパンの中におられるのです。お化粧道具もそうですが、粒が大きなものは奥深くに入っていきませんが、小さなものは奥深くまで入っていくのです。イエス様は、皆さんの心の奥深くまで入っていくために、小さなパンの形に留まっておられるのです。

小さな姿になったイエス様は、私たちのどの場所まで来てくださるのでしょうか。御聖体を、皆さんが「アーメン」と言っていただくと、あっという間に溶けてしまいます。他の食べ物だったら、よく噛んで食べてもしばらく形が残っているでしょう。けれども御聖体は、きっとすぐに、形が無くなってしまいます。見えなくなって、私たちの隅々にまで届いていきます。

隅々と言いましたが、どこまで届くのでしょうか。中田神父様はこう思います。御聖体のイエス様は、すぐに形が見えなくなるけれども、それは、すぐにみんなのそば近くにいるために、形をなくしてしまうのです。普通の食べ物は、エネルギーになるまで時間がかかります。イエス様はわたしたちを恵みでいっぱいにするために、すぐに形がなくなり、見えなくなって私たちの力になってくださるのです。御聖体をいただいた時からすぐに、イエス様は私たちの中で働き始めるのです。

私たちは健康な時だけではなく、病気の時もあります。病気の人は薬をもらいますが、薬が効き始めるのにも時間がかかります。飲んですぐ効く薬はないのです。けれども御聖体は、「アーメン」といただいてすぐに、あなたの中で働き始めるのです。病気の時も健康の時も、罪を犯している時でも、イエス様の恵みは、受けたらすぐに、働き始めるのです。

毎日、すぐに働くお恵みが必要です。一日が始まって、家族みんな、守ってもらう必要があります。朝、ほんの少しでいいからお祈りする家族に、神様の恵みはすぐに働いてくれます。朝のお祈りでいただく恵みが昼頃届くのでしたら、間に合いません。神様のくださるお恵み、特に教会でいただく御聖体やゆるしのお恵みは、すぐに働き始めるのです。

すぐに働いて、わたしたちを守ってくださる。御聖体の恵みは、そのようなお恵みです。毎週お恵みにあずかってください。そして、恵みを忘れない人になってください。家族の中で、「神様の恵みはすぐに働き始めるんだよ」と自信を持って言える人になってください。これから、初聖体の決意表明をしましょう。

（日曜 9 時以外のミサの説教のために）今週も、先週と同じように、

初聖体の子供達に話す内容をかいつまんで話したいと思います。９時のミサで、三人のお子さんが、期待に胸を膨らませて初聖体を受けます。その中の二人は、先週洗礼を受けたお子さんです。緊張すると思いますが、きっと話をよく聞いてくれると期待しています。

聖体は、見た目は小さなパンですが、このパンの中にイエス様がおられます。洗礼を受けた人の心の奥深くに入るために、小さなパンの中に留まってくださった。これが話の基本です。お化粧道具もそうですが、粒が大きなものは奥深くに入っていかず、小さくなるほど奥深くまで入っていくのです。

小さな姿になったイエス様は、私たちのどの場所まで来てくださるのでしょうか。御聖体を、「アーメン」と言って拝領すると、あっという間に溶けてしまいます。他の食べ物だったら、よく噛んで食べてもしばらく形が残っているでしょう。けれども御聖体は、すぐに形が無くなってしまいます。見えなくなって、私たちの隅々にまで届いていきます。

隅々と言いましたが、どこまで届くのでしょうか。中田神父様はこう思います。御聖体のイエス様は、すぐに形が見えなくなるけれども、それは、すぐに人間のそば近くにいるために、形をなくしてしまうのです。普通の食べ物は、エネルギーになるまで時間がかかります。イエス様はわたしたちを恵みでいっぱいにするために、すぐに形がなくなり、見えなくなって私たちの力になってくださるのです。御聖体をいただいた時からすぐに、イエス様は私たちの中で働き始めるのです。

人は健康な時だけではなく、病気の時もあります。病気の人は薬をもらいますが、薬が効き始めるのにも時間がかかります。飲んですぐ効く薬はないのです。けれども御聖体は、拝領してすぐに、あなたの中で働き始めるのです。病気の時も健康の時も、罪を犯している時でも、イエス様の恵みは、受けたらすぐに、働き始めるのです。

毎日、すぐに働くお恵みが必要です。一日が始まって、家族みんな、守ってもらう必要があります。朝、ほんの少しでいいからお祈りする家族に、神様の恵みはすぐに働いてくれます。朝のお祈りでいただく恵みが昼頃届くのでしたら、間に合いません。神様のくださるお恵み、特に教会でいただく御聖体やゆるしのお恵みは、すぐに働き始めるのです。

すぐに働いて、わたしたちを守ってくださる。御聖体の恵みは、そのようなお恵みです。毎週お恵みにあずかってください。そして、恵みを忘れない人になってください。初聖体を受けたなら、家族の中で、「神様の恵みはすぐに働き始めるんだよ」と自信を持って言える人になってほしいのです。

年間第８主日(ルカ 6:39-45)

主日の福音 19/03/03 (No.990)

年間第８主日（ルカ 6:39-45）

心からあふれ出ることを語るために

「人の口は、心からあふれ出ることを語るのである。」（6・45）神を見る目が開かれるなら、本来の良さが顔を出し、私たちの口からあふれ出ることばは「良い実」となって現れます。四旬節を前にして、神を見る目が開かれるために、私たちにとって何が視界を遮る「丸太」となっているか、考えてみましょう。

堅信式を終えた中学生と一緒に、けいこの時間二週にわたってイスラエル巡礼をしたときの写真を見ました。今けいこを受けている中学生には聖地巡礼の写真を見せていなかったのだなとあらためて思いました。

中学生はとても興味深くイエスが活動したガリラヤ、最後に命をささげるエルサレムなどを見つめていました。私はかいつまんで説明をするわけですが、実際には「この場所でイエス様のこのような出来事があったと思われる」という説明しかできないはずなのに、「この場所でイエス様はこのようなことをなさった」と、あたかもイエスの働きをこの目で見たかのように説明していたのには我ながら驚きました。

本来はイスラエル巡礼を体験した人でさえ、イエスがここでこんなことをなさった、ここでこのように語られたと断言することは不可能なのですが、聖地巡礼は私たちを「心からあふれ出ることを語る」そういう人に変える力があると思います。

イエスが四人の漁師に声をかけて弟子にする。その情景はガリラヤ湖だからこそ思い浮かんでくるのです。美しい湖、豊かな湖は日本にいくらでもあるでしょう。けれども、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（マタイ 4・19）この言葉が浮かぶのはガリラヤ湖だからこそなのです。

そういう意味で、聖地巡礼は私たちの目を開かせてくれる体験だと思います。中学生にも、イエスのことば、イエスがなさったわざをより深く味わうために、ぜひイスラエルに行ってごらんと言いました。実際には、イエスが会堂で読んだイザヤ書も、イエスが乗り込んだ船も何も見つかりませんが、イエスが歩いた土地、イエスの救いのわざが繰り広げられた地は、何かを教えてくれると思います。

振り返って、このイスラエル巡礼を今週の福音の言葉で置き換えるなら、「自分の目から丸太を取り除く」旅だと思いました。今まではっきり見えてなかったことが見えるようになって、キリスト者として生きる、キリスト者でない人に道案内ができる。そのような経験をさせてくれる機会でした。私たちはどこかの時点で、「自分の目から丸太を取り除く」体験が必要なのです。

ある人は聖書朗読をするために、「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みます。朗読する聖書で繰り広げられている何分の一でもよいから自分の目と耳で体験していれば、朗読している内容に深みを与えることができます。聖書朗読を依頼される人全員が聖地巡礼を体験すれば

素晴らしいですが、せめて巡礼した人の話に耳を傾けるなら、朗読の中身が「心からあふれ出ることを語る」ものに変わります。

ある人は心を込めて聖歌が歌えるように、「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みます。「ガリラヤの風かおる丘で」と歌っている人が、ガリラヤの風に吹かれたことがない、ガリラヤの風が吹く丘に立った自分を想像できないのでは、一体どれだけ説得力があるでしょうか。ガリラヤ湖の写真を見せてもらうだけでも、私たちの目から丸太を取り除くことができて、「心からあふれ出ることを」歌う聖歌に変わるわけです。

「ミサに行く」ことだけでも、いつか私たちは「自分の目から丸太を取り除く」体験が必要になります。二年前にイスラエル巡礼に参加した時期はクリスマス後の「降誕節」でした。「主の公現」のミサをガリラヤ湖畔の「ペトロの首位権の教会」そばにある野外祭壇でささげました。繰り上げミサでした。

翌日の日曜日は、ヨルダン川のベタニアという場所を訪ねました。ヨルダン川河畔は木が生えていましたがほかは見渡す限り砂漠です。そこに教会がぽつんと建っていて、どこから集まるのか、司祭・修道者・信徒がわんさか集まって、「主の公現の祝日のミサ」をおこなおうとしていたのです。一日かけて集まり、ミサに参加します。

その様子を見て、私は「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みました。ただ一つのことのために、人々が集まっていたのです。この人たちは暇だから集まることができたのではなく、このミサに自分が生かされていると知っているから、集まることができるのです。今でしたら、「心からあふれ出ることを語る」それができると感じます。

聖書を朗読し、聖歌を歌い、共同祈願を唱え、ミサの受け答えをする。毎日の生活で祈りをささげ、神のことばに土台を置いて日々生きる。どれも「心からあふれ出ることを」実行するのでなければなりません。そのためにも、何が視界を遮る「丸太」となっているか考え、「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みましょう。

黙想会であったり、クルシリヨであったり、聖地巡礼であったり、赦しの秘跡であったり、いろいろあると思います。だれもが「自分の目から丸太を取り除く」必要のある人間なのです。

四旬節第１主日(ルカ 4:1-13)

四旬節第１主日（ルカ 4:1-13）

悪魔はイエスに傷一つ付けることができない

「荒れ野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。」（4・1-2）四旬節第一主日はイエスが荒れ野で誘惑を受ける場面です。今まで私は、「悪魔は一切の誘惑が成功しなかった」と決めつけて考えてきたのですが、もしかしたら、悪魔はイエス様を誘惑することに成功したのかも知れない、と考えてみたのです。

先週おおっぴらに話していたように、長崎県営野球場にカープとライオンズのオープン戦を見に行きました。大変見応えのある試合でした。ドラフト一位の選手がホームラン打ってくれて、最高の試合でした。戻ってからサンデースポーツ 2020 を見てびっくり。私がテレビに映っていました。あとで先輩後輩司祭に冷やかされそうです。

国語辞典を買いました。３千円でした。ただの国語辞典ではありません。「あか」という項目に、「広島カープのチームカラー」という説明が付いています。「てつじん」の項目に「衣笠祥雄のこと」、「ミスター」の項目の説明に「ミスター赤ヘル山本浩二のこと」と書いてありました。最高の国語辞典です。

さて福音朗読の荒れ野での誘惑ですが、悪魔の働きかけがまったく効果がなければ、誘惑のことばにさえ反応する必要がなかったはずです。この世の中の一般的な取り調べでは、一切話さない人より、質問に答える人のほうが取り調べは進むと言いますから、悪魔が何を言おうと完全に無視すればいいのに、ひょっとしたら悪魔の誘惑はすべて成功しているのではないでしょうか。

しかし悪魔はそう思っていないようです。「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。」（4・13）さんざんあの手この手で策を弄したのでしょう。けれどもイエスの対応はすべて、悪魔の誘惑を打ち砕くものだったのです。悪魔は誘惑できても、かすり傷一つ付けることができないと思い知らされてイエスを離れます。

イエスはなぜ、このような体験を積まれたのでしょうか。ルカ福音記者がこの物語を福音書に採用した意図は何でしょうか。イエスご自身が、悪魔の誘惑でまったく害を受けないことを証明するのは意味のないことです。イエスにまったく害が及ばないのは当然だからです。

むしろこの物語は、私たちのために福音書に採用されたのです。悪魔は誘惑しようと私たちに触れることがあるかも知れない。けれども本来は、悪魔は人間に何の害も及ぼせない。そのことを教えたいのではないでしょうか。

しかし現実には、人間は悪魔の誘惑にそそのかされ、罪を重ねるのです。誘惑するものに簡単にそそのかされ、取って食べるなと命じられた木の実から取って食べた。創世記の出来事は私たちの弱さを象徴的に描いています。

そこでイエスは、人間は本来、悪魔の誘惑からいかなる害も受ける

ことはないのだと教えるために、四十日の試練に立ち向かわれたのです。人間の努力では四十日の試練を耐え抜くことは不可能ですが、父なる神に信頼して過ごす姿を見せて、悪魔の誘惑があっても害を受けないためには、唯一このような生き方しかありませんと、教えてくださっているのです。

最近「どうして道を踏み外したのか？」と思うことがありまして、今週の福音朗読は深く考えさせられています。悪魔の誘惑は、人間のあらゆる努力をあざ笑うほど狡猾です。あらゆる努力とは、祈りをするとか、清い生活を心がけるとか、日々聖書を読む生活とか、そうした優れた努力ですら、悪魔は灰燼に帰してしまうほど恐ろしく狡猾なのです。

それでも、イエスが示した四十日は悪魔の誘惑に勝ることを証明します。ただ父なる神に信頼を寄せて過ごす。これこそが、私たちが誘惑するものに打ち勝ち、前に進み続ける力なのです。

道を踏み外して気づく人、道を踏み外しかけて気づく人、道を踏み外す前に気づく人。いろいろいますが、だれもが父なる神に信頼を寄せるイエスの姿に倣う以外に身を守ることはできない。今週の福音朗読で私はそう確信しました。

四旬節第 2 主日(ルカ 9:28b-36)

四旬節第２主日（ルカ 9:28b-36）

「受難」が「変容」して「復活」となる

四旬節第２主日、「イエスの姿が変わる」場面が福音朗読に選ばれました。「イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。」（9・29）この描写から皆さんは、復活の栄光を垣間見せてくれた、そのように理解していると思います。今年はそこに、もう一つ付け加えたいです。

誕生日が巡ってきて、53 歳になりました。あちこちで誕生会を開いてもらいました。特に長崎で視覚障害者のために音訳ボランティア活動をしている「声の奉仕会マリア文庫」では、あいさつを次のようにまとめました。「53 歳になりました。上等なカステラに『五三焼き』というのがあります。私も今年は五三焼き、つまり上質で上等な仕事を積み重ねたいと思います」。

きっと皆さんにも 53 歳だったときがあったと思います。経験もあるし、人の助けも得られるようになる時期だと思います。私もその時期を田平教会で迎えました。ぜひこの一年、量よりも質を求めて仕事をしていきたいと思います。

さて福音朗読です。イエスの復活は輝かしい今日の場面にふさわしいですが、復活の栄光のその前にあるものを見ないで語ることはできません。イエスの復活の栄光は、イエスの死によってもたらされるものです。この視点を、今年は皆さんに一つ付け加えたいと思います。

イエスの死は、どのようにして復活につながっていくのでしょうか。言われるまでもなく、イエスご自身が「死と復活」を予告し、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」（9・22）と言われたのです。

しかし人間の頭でイエスの予言を理解することは不可能です。イエスのことばを人間の力で理解できるのであれば、誰がイエスを死に追いやるでしょうか。イエスご自身が死んで復活し、ご自分のことばを証明してくれたので、ようやく力不足の人間も理解が及んだのです。

それでも、理解しようという努力は絶えず必要です。そこで一つのたとえを考えてみました。自然の状態では存在しないけれども、私たちがその恩恵を大いに受けているものです。それは製鉄所から生み出される「鉄」です。

誰でも想像は付くことですが、「鉄」は「鉄鉱石」を掘り出してきて精製し、最終的に「鉄」になります。鉄鉱石を溶かし、真っ赤になったものを形を整えて冷やし、私たちはそれを鉄製品として利用しているわけです。

初めは石の中に混じった鉄の塊が、真っ赤に燃やされ、混じり物を取り除かれ、丈夫な鉄になります。最初と最後だけ考えてみてください。誰が「鉄鉱石」を見て、「鉄」を想像できるでしょうか。けれども先祖たちは、「鉄鉱石」を「鉄」に変えたのです。

もしかしたら司祭職も同じようなものかも知れません。今年は桐教会出身の宮原助祭が、21 日に司祭に叙階されます。鉄鉱石が叙階の秘跡によって溶かされて、司祭という鉄になるわけです。今年の宮原助祭は宮原司教様の甥っ子だそうですから、「栴檀は双葉より芳し」の諺の通りなのかも知れませんが、私などは誰も司祭になることを想像できなかったわけです。「鉄鉱石」どころか、「家造りの捨てた石」だったのです。想像できるはずがありません。

ただ、「変容」という段階を経たならば、すべてのことは変わり得ます。「石」が溶かされて液体になり、完全に形を失ったあとに「鉄」になります。神学生・助祭も、「自分を捨て、自分の十字架を背負って」イエスに従うなら、叙階の恵みによって溶かされ、完全に形を失って司祭という「鉄」に変えられるわけです。

もちろん「鉄」も、できあがったときから完全ではありません。「鉄は熱いうちに打て」と言います。叙階したばかりの司祭を「新司祭」と言います。新司祭のうちに鍛えて、粘りのある鉄に仕上げるなら、25 年、30 年と、良い仕事をしてくれることでしょう。

いずれにしても、「変容」することで過去と未来はつながるのです。イエスはご自分で死という「過去」を変容させ、復活という「未来」に結びつけてくださった、こんなふうに考えてよいのではないでしょうか。

イエスのお姿が変わる場面は、イエスの死を変容させ、復活に結びつけてくださいました。私たちもイエスを信じ、復活の希望を持つキリスト者です。人間の力で人の死を復活に結びつけるのは困難ですが、イエスは私たちの死を変容させ、復活の希望へと結びつけてくださいます。

もしかしたら、溶鉱炉に溶ける鉄のように、火で試されるかも知れません。罪もすべて燃やし尽くされ、どんな悪も触れることのできない灼熱の火で試され、ようやく復活するのかも知れません。

けれども、私たちが復活を信じることには十分意味があります。イエスが私たちに復活への希望を与えてくれたからです。ペトロは地上に仮小屋を建てましょうと提案しましたが、私はこう思います。復活への希望に留まる仮小屋を、私の心に建てましょう。すべてが火で精錬され、燃え尽きてもとどまることのできる復活の希望を待ち望む仮小屋さえ残るなら、何も必要ありません。

信仰にとどまるための仮小屋だけ保つなら、私たちは人生の試練を通ってすっかり変容され、復活への希望に生きる者に生まれ変わることができます。

四旬節第 3 主日(ルカ 13:1-9)

四旬節第３主日（ルカ 13:1-9）

園丁の取り組みに力を合わせる

今週の福音朗読の中で、後半の６節から９節に目を向けたいと思います。「実のならないいちじくの木のたとえ」と呼ばれている箇所です。「実のならないいちじくの木」が私たちであれば、「園丁」はイエス・キリストかも知れません。

ぶどう園の所有者を父なる神と考えるなら、いちじくの木は結果を出す時期が来ていて、いつ切り倒されてもおかしくない。それを、イエスがあわれみを注いで、父なる神の忍耐を引き出そうとしています。

ひょっとすると、「斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」とルカ３章６節にあるように、私たちはすぐにでも結果を求められているのかも知れません。

実のならないいちじくの木は、園丁の必死の努力に応えなければなりません。園丁の取り組みに、人間で言えば向き直って、力を合わせなければ、実を結ぶのは無理なのです。これが人間とイエス・キリストに当てはめられているとするなら、人間はイエス・キリストの必死の努力に向き直り、力を合わせる。これしか方法がないということになります。

日々の出来事がどのように前に進むのか、信仰心を持っている人には三つの考えが可能です。一つは、どのようなことも神が決めた通りになるのだから、人間が何をどうしようと変わらないという考え、一つは、神はただ黙って眺めているだけだから、何事も人間が決めて動かさなければなら名という考え、そして最後に何事も神と人間が共に働くことで進んでいくから、神の呼びかけに寛大に応じる必要があるという考えです。

この三つのうち、イエス・キリストは私たちにどれを選んで欲しいのでしょうか。きっと、最後の答え、神と人間が共に働いて物事は進むから、呼びかけに誠実に協力して欲しいと願っているのだと思います。

この数年で、私たちは大きな経験を積みました。一つは献堂百周年です。もしこの計画が、「神が決めた通りになるのだから、人間が何をどうしようと変わらない」と考えていたなら、無事に百周年を迎えることはできなかったでしょう。神と人間が共に働いて、大きな働きを教会の歴史に残したのです。

もしこの百周年が、「神は黙って眺めているだけだ」と考えて人間の思いだけで前に進めようとしていたなら、ああでもないこうでもないと話は前に進まなかったでしょう。「神が喜んでくださる方向を探しながら、進んでいきましょう。」この「共に働く心」があってこそ、立派に事を成し遂げたのです。

今年の 11 月には、いよいよ２度目の教皇来日が実現します。人間の思惑ばかりが見え隠れする来日ではなく、私たちと、神が共に働いて成し遂げる訪問となるように、心から願っています。その時初めて、木は実を実らせ、多くの人がその実りを味わうことができるのです。

四旬節、回心の季節に、私たちはどのように物事を進めようとしているのか、それぞれ考えたいと思います。たとえば黙想会に参加することで、主任司祭は、今年一年田平教会でどのような実りをもたらしたいのか考えます。そのために、神と人とが共に働く形をどのように整えたら良いのか、考える必要があります。

修道会は、修道会が抱えている事業や教会奉仕の中で、どのような実りをもたらしたいのか考えます。そのために、神と人とが共に働く形をどのように整えたら良いのか、考える必要があります。

家庭にあって、それぞれの家族が、どのような実りをもたらしたいのか考えます。そのために、神と人とが共に働く形をどのように整えたら良いのか、考える必要があります。

こうしてそれぞれの場で、私たちは神と共に働く方法を探し求めるのです。決して、道をそれたり、怠惰になったりしてはいけない。「私が計画を進める。私の考える通りに動いてもらう。」あまりに思いが強すぎれば、それは神と共に働く姿から逸れてしまいます。

「私たちがどうしようと、神が決めた通りにしかならないから、何を協力しても同じ。」そんな考えで怠惰に時を過ごすことも注意しなければなりません。必要なことは、神と共に働くこと、力を合わせることです。

神と力を合わせて働くことは、誰も例外ではありません。立ち直りや、回復の途上にある人も、神と力を合わせて努力するとき、実を結びます。どんなに困難な状況からでも、どんなに時間がかかろうとも、私たちと働いてくださるイエス・キリストは共に働いてくださり、父なる神に実りを報告させようとするのです。イエス・キリストの深い憐れみに信頼して、神の国の実りのために共に力を尽くしましょう。

四旬節第 4 主日(ルカ 15:1-3,11-32)

四旬節第４主日（ルカ 15:1-3,11-32）

書かれていない兄の「その後」

四旬節第４主日はよく知られている「放蕩息子のたとえ」です。弟には本来あるべき状態から離れたときに、本来の状態に戻ってくるようにと呼びかけられています。兄には、本来の場所にいる有り難さを今まで以上に自覚するようにと呼びかけられています。今年は、兄に呼びかけられていることに重点を置いて考えてみたいと思います。

いよいよ月曜日から小教区の黙想会が始まります。説教師は大阪大司教区の酒井補佐司教様です。「司教様をどうやって呼ぶことができたのですか？」と聞く人がいましたが、司教様の方から声がかかったのです。私の力ではありません。

酒井司教様が長崎でオプス・デイの経営する学校の先生をしていたときは、よく硬式テニスで火花を散らしていました。たくさんのテニスの思い出があったので、黙想会期間中も昼休みに田平公園でいかがですか？とお誘いしましたら、「残念！私はテニスから離れて、ラケットもシューズも手放しているのです」との返事でした。もちろん黙想会が第一の目的ですが、懐かしい記憶をよみがえらせる楽しみが一つ減りました。

さて、「放蕩息子のたとえ」については、細かい説明は必要ないでしょう。もちろん細かい部分に目を向けることで、より鮮明になる効果はあります。

たとえば、兄は父に「あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」（15・30）と不満をぶつけると、父は兄に「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」（15・32）と兄の心の目を開かせようとしています。このやりとりを気づいているのと気づかないでは物語を味わうのに大きな差が出てくるでしょう。

細かな点が与えてくれる気づきを踏まえた上で、大きな視点で私は次の疑問を解決したいと思いました。この物語は「放蕩息子」が登場しますが、物語の最後には登場しなくなります。父親と、息子のうち忠実であり続けた兄とのやりとりに取って代わるのです。

しかも父が兄の方に「祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」と声をかけたあと、兄がどのような態度を取ったのか、書かれていないのです。弟は、心の底から態度をあらため、父の家に迎え入れられました。では兄は、その後いったいどうなったのでしょうか。

私は、兄がどんな行動に出たのか、知りたいのです。私も自分の家庭で第一子長男で生まれました。同じ立場に立たされたとしたら、どのような態度に出るだろうかと考えます。ひょっとしたら今度は兄が、家を飛び出してしまうかも知れません。父親に対する自らの忠実さが理解されなかったと思い込み、本来あるべき状態を逸れてしまう可能性もあ

ります。

ただ私は、物語の兄が、父親の話を聞いてよく考え直し、自分にできることをして父親を喜ばせようとするのではないか。そう考えてみました。兄に呼びかけられているのは、「本来の場所にいる有り難さを今まで以上に自覚する」ということです。この呼びかけに沿って、兄にさらにできることは何でしょうか。

こんなことは可能かも知れません。もともと父の家の息子二人は、雇い人のように働くことは求められていないはずです。我が家で起きた感動的な体験を、多くの人に語り聞かせる。そのために人を招き、会食をして、死んでいた弟が父の思いに気づき、生き返ったのだと語り合うことも可能でしょう。兄が望むなら、外に出て弟の立ち返りと父の偉大さを語る旅に出るということも可能です。

このあたりは物語には書かれていません。私はこの「書かれていない物語」は、ルカ福音書が読まれる国、読まれる時代によって自由に描かれてよい部分として余裕を残してくれたのではないか。そう思ったのです。私たちが生きているこの国のこの時代で、父の偉大さと弟の立ち返りを語って聞かせるために兄が思いきって活動するさまを、大胆に描いてよいのではないでしょうか。

最近、反省することがあります。どこの教会でも司祭たちは「信者が教会に来なくなった」と嘆いています。私はこれは、父親の諭しを聞き入れる前の兄の言葉に聞こえるのです。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。」（15・29）

たしかにそうですが、司祭がミサのために教会に行くのに、いったいどれくらいの労力がいるでしょうか。田平教会であれば司祭館から 15 歩かも知れません。そこからすると、すべての信者さんが「ここをたち、父のところに行って言おう。」（15・18）そんな思いなのではないでしょうか。司祭はまだ遠くにいるうちから駆け寄るべきなのに、その正反対の態度で接しているのではないか。そんな反省を持ったのです。

司祭に、父親の諭しを聞き入れる前の兄の態度が残っているのなら、今の時代にふさわしい「書かずに残してある兄の物語」を実行する必要があると思いました。中田神父ができる「父の偉大さを語り、弟の立ち返りを喜ぶ」態度は何だろうか。よく考えたいと思いました。

黙想会は、立ち帰りの時です。私たちが父の家にこれまで以上に近づき、父の愛に留まって日々を暮らすヒントを黙想会の中で願いましょう。説教師の補佐司教様も大きな犠牲を払っておいでくださいますので、補佐司教様のためにも合わせてお祈りください。

四旬節第 5 主日(ヨハネ 8:1-11)

四旬節第５主日（ヨハネ 8:1-11）

イエスひとりと、真ん中にいた女だけ

四旬節もこの一週間で聖なる一週間「聖週間」へと向かう大切な時期です。与えられた福音朗読を通して、十字架上の死と復活に向かうイエスの思いを知り、イエスに付き従う心の準備を整えることにしましょう。

黙想会が終わりました。皆さんにとってどのような収穫があったでしょうか。私は三日間、司教様の接待をして気疲れをしました。本当は気疲れと言うほどのものではありませんが、司祭館に家主よりも身分のある方をお泊めして、接待したのですから気を遣ったことは確かです。

この疲れは大型連休のときに休みを頂いて、疲れを取りたいと思います。ですから大型連休中、司祭館のチャイムを鳴らしたり電話を掛けたりしないでください。そこに私はいません。居留守なんか使ったりしません。大阪の風に、大阪の風になって、あの甲子園の空を吹き渡っています。大阪では、田平から転出した人に会ってこようと思っています。

福音朗読箇所は、「姦通の女」という物語ですが、一つ私たちが陥っている思い込みのようなものを指摘したいと思います。朗読には次のような部分があります。「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。」（8・9）

この場面で、「イエス一人と、真ん中にいた女が残った」とあり、二人きりのはずです。けれどもいつの間にか、私たちは立ち去らずにその場に留まっていないでしょうか。ここに疑問を持ちました。私もまた同じ過ちに陥って今日の朗読で二人きりの場面のはずなのに、私はそのまま残っているつもりだったのです。

「私たちがその場に残っていたとして、それが何か問題なのでしょうか。」問題があるのです。二人きりなら話せることも、そこに読者が立ち会っていたら、話せなくなるのです。

たとえば赦しの秘跡の場面は、「イエスの身分で執り行う司祭と、罪を告白するその人との、二人だけのはずです。誰か別の人がその場にいたら、告白をする人は告白できません。朗読の場面もまさに、姦通の罪を犯した女性をゆるす言わば初めての「赦しの秘跡」の場面だったかもしれないのです。

もう一度、イエスと姦通の罪で突き出された女性とを、二人きりにさせてあげましょう。その時初めて、イエスの深い憐れみに触れるかも知れません。イエスのことばを、イエスに突き出された女性だけが受け取る。その時やっと、イエスのことばの本当の意味にたどり着きます。

イエスと目の前にいる人、二人きりになったとき、見捨てられた人を見捨てないイエスの愛に私たちも触れるのではないでしょうか。

受難の主日（ルカ 23:1-49△22:14-23:56）

百人隊長さえもイエスに心動かされた

受難の主日、聖なる一週間が始まりました。受難の朗読が読まれました。できれば聖木曜日、聖金曜日、復活徹夜祭聖なる三日間をあずかって再び場面を思い返してください。聖なる三日間を連続して参加できない方々のために、今日の受難の朗読があると考えてほしいと思います。

私はこの聖なる一週間を、百人隊長の目で眺めながら、考えてみたいと思いました。今日の受難の朗読の終わりに百人隊長は登場し、「この出来事を見て、神を賛美して」言います。「本当に、この人は正しい人だった。」

百人隊長の置かれている立場はどんなものでしょうか。彼はまず、百人の兵士を束ねる隊長です。百人の命をあずかる責任者です。さらにローマ軍の兵士ですから、どのような命令であれ、命じられたことが実行されるように動かなければなりません。不当な命令であっても、それを拒むことは許されない立場でした。

また、彼はイエス・キリストに特別な感情を持っていません。彼はユダヤ人ではないからです。イエスに同情するわけでも、イエスに敵対するわけでもないのです。言ってみれば、不正な裁判でイエスが死ぬことになっても、心に何の感情も湧かないはずの人なのです。その百人隊長が、「本当に、この人は正しい人だった」と漏らしました。

この百人隊長の言葉から、私は二つのことを考えました。一つは、イエスの死の出来事は、何の関係もないローマ軍の兵士にも、何が正しくて、何が間違っているのかを理解させる圧倒的な力を持っていたということです。死のうが死ぬまいがどうでもよい他人でさえも、イエスの死に心を動かされた。それは当時も、のちの時代も、今の 21 世紀でも変わらない説得力があるということです。

もう一つは、これだけのことが起こりながら、ユダヤ人は「本当に、この人は正しい人だった」と理解できなかったということです。仮に理解したとしても、人間的にはイエスが亡くなってようやく理解したのでは手遅れなのです。理解するなら、もっと早く気づいて、イエスが死刑の宣告を受けることのないようにしなければならなかったはずです。

この百人隊長の言葉を、今年の聖週間を黙想する鍵にしたいと思っています。イエスの死は、どんなに縁遠い人にも心を動かす力があるのに、なぜ身近な人が、イエスを死に追いやったのでしょうか。私たちも含めて、なぜイエスの死をただ黙って見ているのでしょうか。気づくのが遅くて、もはや手遅れになっているとして、私たちはイエスとどのように向き合うべきでしょうか。

私たちはこれらのことをこの一週間かけて思い巡らしましょう。私たちを救うイエス・キリストと真剣に向き合う一週間としましょう。

聖木曜日・主の晩さん(ヨハネ 13:1-15)

正しい生き様を超えて愛を注がれた

聖木曜日、弟子たちの足を洗う場面が取り上げられました。イエスの行動は、「正しい生き方」を超越した生き方でした。私たちもそれぞれの分に応じて、「正しい生き方」を超える生き方が求められています。「正しさの物差しを超えた生き方」を学ぶことにしましょう。

過越の食事は、ユダヤ人が伝統的に受け継いできた食事の形式でした。かつてイスラエルの先祖たちがエジプトを脱出するとき、指示された通りに準備をして食事をしたことで、エジプト全土で広がった災いを過ぎ越し、無事に約束の地にたどり着いたことを食事と家長の解説を聞きながら子孫に受け継いできた儀式でした。

イエスはこの過越の食事を、神の民が滅びを過ぎ越して救われる、新しい「過越の食事」に当てはめて行いました。この食事で主人が食事の席に招かれた人の足を洗うことはもちろん要求されていませんし、その上さらに、食事を中断してまで行う理由もどこにもありませんでした。

ですから「正しく伝統の食事を執り行う」という意味で考えると、イエスが弟子たちの足を洗うことはまったく必要のないことでした。

けれども、イエスはこのわざを「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」と仰っています。これが以後弟子たちにとっての規範になるわけです。

ここで、食事を途中で中断して足を洗って上げる行為が大事なのでしょうか。今の典礼で言う「洗足式」が大事なのでしょうか。儀式書を見ると、「洗足式」は「任意」と書かれています。つまり、聖木曜日の典礼に欠かせない、義務的な所作というわけではないのです。もっと大切なことがあるのだと思います。洗足式はその「大切なもの」を学ぶためのものなのでしょう。

私はその答えを、「正しい生き方を超えた生き方」としてみました。正しいかどうかに生き方の物差しを置くのでは不十分で、イエスに倣うためには、「正しい生き方を超えて、愛を注ぐ生き方まで成長する」この考え方が必要です。

私たちはどうしても、「ちゃんとやっている」ということを物差しにしてしまいがちです。主任司祭がミサの説教を準備することは「ちゃんとしている」という物差しには叶っているでしょう。けれども愛を注いでいるかというと、足りないかも知れません。

イエスは愛を注ぐ生き方を「模範として示した」のです。「ちゃんとしているか」を気にする生き方はイエスの物差しではありません。ここに至ってもイエスを裏切ろうとしているユダに愛を注いだイエスの生き方を私たちは模範とします。いつからそうしますか？答えは明らかです。

聖金曜日・主の受難（ヨハネ 18:1-19:42）

家族

主は私たちのために命をささげてくださいました。私たちが正しく、善良であったから死んでくださったのでもありません。聖パウロはローマの信徒への手紙の中でこう言っています。「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」（ローマ 5・8）

主イエスは今、十字架の上で命をささげ、亡くなられました。たしかに亡くなられた、死んだのです。けれども聖パウロは、「そのことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」と説明したのです。

こう考えました。神は愛を注がれる方、愛を示してくださる方ですが、イエスの死でさえもわたしたちに対する神の愛だとしたら、神は私たち人間に、愛のほかは示すことができないのではないでしょうか。

神は私たちに、愛のほかは示すことができないとしたら、目にするものすべてを見直すきっかけになります。私たちは神から身体を与えられました。与えられた身体を喜ぶことができず、不平不満を漏らしているかも知れません。心臓や他の臓器に欠陥があったり、知的障害を抱えていたり、もっと違う身体を願って不満に思っているかも知れません。

けれども神が人間に愛のほか示すことができないのだとしたら、私たちが与えられた身体を受け入れる気持ちが芽生えてくるのではないでしょうか。この身体を通して、生まれた状態を通して、神が私たちにご自分の愛を示してくださっている。もしそのように受け止めることができれば、抱えている不平不満は解消するかも知れません。

誠実に生きているのに、これでもかというような困難にぶつかり、投げやりになっている人がいるかも知れません。出会う人、向き合っている出来事、そのどれも自分にとって喜びが感じられない。そんな人がいるかも知れません。

しかし神は、私たちに愛のほか示すことができないのだと思います。御子イエスを十字架に差し出すことは、御父にとってどれほどの痛み悲しみでしょうか。それでも御父はイエスの十字架上の死によって、私たちに愛を示してくださったのです。

人は言うかも知れません。「教会はなぜ、十字架にはりつけにされたイエスを聖堂の中心に据えるのですか？」あなたは答える必要があります。「イエスの十字架上の死によって、神は私たちに愛のほかに示すことができないと仰っているのです。十字架のイエスは、御父が私たち人間に示された最大の愛です。」

揺らぐことなく、私たちは神が愛のほかに示すことができないのだと人々に伝えましょう。神の示された愛が、私たちの人生に起こるさまざまな出来事の意味を良いものに変えてくださいます。

復活徹夜祭(ルカ 24:1-12)

イエスは復活し、助けが必要な人のそばにおられる

主のご復活おめでとうございます。今年の聖週間は、百人隊長の言葉にヒントをもらって福音朗読を黙想してきました。引き続き、百人隊長の視点で復活の出来事を切り取ってみたいと思います。

「本当に、この人は正しい人だった。」（ルカ 23・47）百人隊長はイエスの十字架の場面で、「群衆の目に映っていたイエス」ではなく、「真実のイエス」を見抜いていました。今日の福音朗読では天使が同じように婦人たちの目に映ったイエスではなく、真実のイエスを紹介しています。「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」（24・6）

百人隊長が見抜いたイエスは、「苦しみの中でも人々と共におられるイエス」でした。群衆はイエスを罵り、死へと向かわせました。自分たちから遠ざけたい罪人にしてしまいました。しかしイエスは、死の間際まで、苦しむ人と共に苦しまれる方となられたのです。

「十字架から降りて自分を救うがよい。」望めばそれも可能だったでしょう。しかしあえてイエスは、苦しみと死を受け入れ、かたわらで一緒にはりつけにされた犯罪人など、誰もそばにいてあげられない死の淵にいる人々に寄り添う方となられたのです。百人隊長は、あえて降りることをしなかったイエスに、「本当に、この人は正しい人だった。」（ルカ 23・47）と自分に正直に語ったのです。

今私たちは、婦人たちと同じように空の墓の前に立っています。目の前の事態と、真実の事態とは違います。イエスは常に、そばにいてくださる方でした。今、空の墓の前に立って、どのように「常にそばにいてくださる方」を想像すれば良いのでしょうか。天使がそれを教えてくれました。「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」

イエスは常に、そばにいてくださいました。そうであるなら、死者に結びつけられた姿を探してはなりません。今この時点で、イエスが常に共にいてくださる場所を探さなければなりません。どこにイエスを探しに行けば良いのでしょうか。

そのヒントは、婦人たちがイエスの遺体のお世話をしに来ている同じ時に、飼い主のいない羊のように打ちひしがれているのは誰か考えれば分かります。イエスは常に、共にいてくださる方でした。今この時点でもそうであるなら、イエスは、弱り果て、打ちひしがれている人のそばにいるはずです。そこでイエスと会えるはずです。

この時点で最も弱り果てているのは弟子たちでしょう。打ちひしがれ、家の戸に鍵を閉めて、閉じこもっていたのです。天使の言葉は復活したイエスを捜し当てるヒントとなりました。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」（24・5-6）生きておられるイエスは、常に、共にいてくださる方なのです。

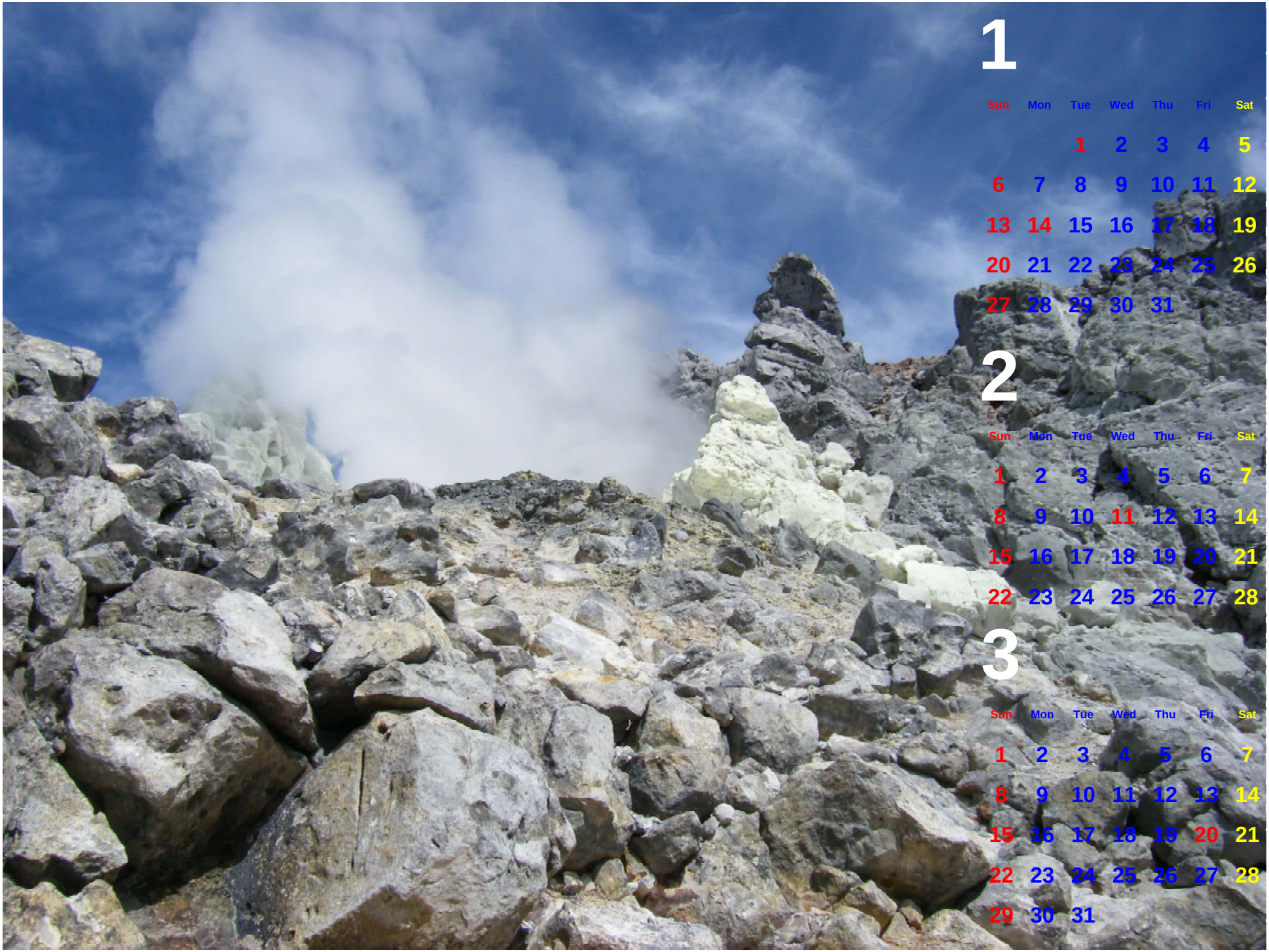
私たちも、今日の復活の喜びを自分の中にとどめるだけではなく、かつて百人隊長がみずからの言葉で信仰表明したように、信仰表明しなければなりません。百人隊長は、「はりつけにされたイエス」という目の前の事態の向こうにある真実を見抜きました。

私たちも、目の前に見えているのは十字架にかけられたイエスです。復活したイエスを見ることはできません。けれども、イエスが常に、そばにいてくださる方であるなら、今いちばんそばにいて助けを必要としている人を訪ねてみてください。私たちはそこで、復活したイエスに出会うでしょう。

そして体験を通して、「イエスは復活し、いつも共にいてくださる」と信仰表明しましょう。私たちの声で届けられる信仰表明を必要としている打ちひしがれた人、弱い立場にある人が、新しい元号が始まろうとするこの日本に、まだまだたくさんいらっしゃるのです。

復活の主日（日中）(ヨハネ 20:1-9)

1
Sun Mon Tue Wed Thu Fri Sat
1 2 3 4 5
6 7 8 9 10 11 12
13 14 15 16 17 18 19
20 21 22 23 24 25 26
27 28 29 30 31
2
Sun Mon Tue Wed Thu Fri Sat
1 2 3 4 5 6 7
8 9 10 11 12 13 14
15 16 17 18 19 20 21
22 23 24 25 26 27 28
3
Sun Mon Tue Wed Thu Fri Sat
1 2 3 4 5 6 7
8 9 10 11 12 13 14
15 16 17 18 19 20 21
22 23 24 25 26 27 28
29 30 31


1
Sun Mon Tue Wed Thu Fri Sat
1 2 3 4 5
6 7 8 9 10 11 12
13 14 15 16 17 18 19
20 21 22 23 24 25 26
27 28 29 30 31
2
Sun Mon Tue Wed Thu Fri Sat
1 2 3 4 5 6 7
8 9 10 11 12 13 14
15 16 17 18 19 20 21
22 23 24 25 26 27 28
3
Sun Mon Tue Wed Thu Fri Sat
1 2 3 4 5 6 7
8 9 10 11 12 13 14
15 16 17 18 19 20 21
22 23 24 25 26 27 28
29 30 31

・・・・・・†・・・・・・・・・・・・・†・・・・・・・・
こうじ神父　聖なる三日間の説教
・・・・・・†・・・・・・・・・・・・・†・・・・・・・・

・・・・・・†・・・・・・・・・・・・・†・・・・・・・・
13/03/28(メルマガ No.641)　聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)
イエスは裂いて与えるほどの愛を示されたる
・・・・・・†・・・・・・・・・・・・・†・・・・・・・・

選ばれた福音朗読は、「弟子の足を洗う」場面でした。「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（13・1）となっています。イエスの深い愛は、弟子の足を洗う場面と、このあとに続く最後の晩さんの場面を貫くテーマです。

弟子たちに注がれた「イエスの深い愛」を、何か違う言葉で言い表すとどうなるでしょうか。わたしは「御自分を裂いて与える愛」と表現したいと思います。

イエスは、「この世から父のもとへ移る御自分の時が来たこと」（13・1）を知った上で、弟子たちの足を洗っています。この世の別れを意識して取った一つひとつの行いは、本当は「胸を引き裂かれる思い」に基づいていたのではないでしょうか。

イエスはご自分の深い愛を、さまざまな形で伝えます。弟子たちの足を洗う行為も、このあとに続く最後の晩さんもそうです。マタイ福音書によれば、最後の晩さんで、「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた」（マタイ 26・26）とあります。

引き裂かれたパンは、いわばイエス御自身です。御自分の体を引き裂いて、弟子たちのいのちを養うと約束してくださったのです。愛情深い親が、子に対してどんな苦労も厭わないことをだれもが体験しています。自分を引き裂いて、子供に良いものを与える経験があれば、イエスが示そうとしておられる深い愛も、よくお分かりなのではないでしょうか。

「引き裂かれる思いの中で弟子の足を洗う」「パンを裂いて渡す」イエスには、御自分の姿を弟子たちに受け継いで欲しいという思いがあったことでしょう。これまで、イエスが群衆の求めに応じる場面は、しばしば困難を伴う場面でした。

解散する様子のない群衆に食べ物を与えたり、叫びながらついて来る女性の願いを叶えてあげたり、近くの町や村を残らず回った上に、飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群衆を見て、深く憐れまれたりといったことです。

もし決められた時間の中で活動しておられたら、「時間になったのでまた明日お世話します」という対応をしたかもしれません。イエスが語ったたとえ話の中にも、「もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません」と答えることもできるでしょう。

けれども、イエスはどんなときにも御自分を引き裂いてお与えになります。それは、とくに弟子たちに模範を示すためです。ゆだねられた羊を深く愛するとは、自分自身を引き裂いて与えることだ。それが、弟子たちに託した遺言

なのです。
　もちろん、それが簡単なことだとは思っていません。わたし自身、仕事を中断したくないと感じているときに何かの用事に応対するのは辛いと感じることがあります。相手の立場に立ってあげられないことがあります。間違い電話が最近立て続けに掛かり、「大谷さんですか」という電話には、とうとう「ここは浜串教会だ」怒鳴ってしまいました。
　そんな、欠点だらけのわたしたちに、イエスは御自分を引き裂いて与えるという模範を示してくださるのです。弟子たちの足を洗うとき、もはやこの世の別れだという引き裂かれるような思いがあり、最後の晩さんでパンとぶどう酒のもとに御自分をお与えになるときも、裂いて弟子たちに与えました。明日記念するイエスのご死去も、裂いて御自分を与えるその頂点だと思います。
　裂いて与える姿は、弟子たちを極みまで愛するイエスによって示されました。イエスが、わたしたちの考え方や振る舞いの物差しです。わたしの物差しは、イエスが示す物差しと同じにできているだろうか。このミサの中で考えることにしましょう。
　足を洗う式、「洗足式」がこの説教に続いて行われます。足を洗って奉仕する司祭も、洗っていただく信徒の皆さんも、イエスの深い愛、「裂いて与える愛」を学び合うことにしましょう。

‥‥‥†‥‥‥‥
ちょっとひとやすみ
‥‥‥†‥‥‥‥
▼ここ数年、聖週間の説教を「聖なる三日間の典礼」が始まるまでに用意し、印刷して信徒に配ったりしている。もちろんこのメルマガを利用している人なら、パソコンから「話の森」ホームページに入ると、PDF 形式での聖週間の説教をひとまとめにして受け取ることができる。
▼始めたきっかけは、わりあい高尚な理由だったと思う。「『聖なる三日間の典礼』に、すべてあずかることのできない人もいるに違いない。そういう人に、せめて説教だけでも届けたい。」最初はその一念だけで続けていたが、最近はそうでもない気がする。
▼それはつまり、「続けてきたからやめられない」「続けてきたのを中止して、みんなに何かを言われたくない」そんな低俗な動機に変わりつつある。本当に、読者の利便性のために続けているとは言えない気がする。
▼たしかに役には立っているだろう。前任地では教会の玄関にある説教プリントを手に取って「こんなことまでしているんですね」とたいへん喜ばれたこともある。だから結果的には意味あることをしているのだが、その何というか、熱意が以前ほど湧かない。
▼けれどもこの取り組みは続けようと思っている。聖週間を自分自身実りあるものにする助けになっているのだから。だれかのために準備して、自分のためにもなっているなんて、こんなにありがたい仕事はそう見つからないはずだ。
▼何年も続けているから、そのうちに数年分まとめて見るのもよいかもしれない。自分がその年の聖週間にどんな過ごし方をしていたのか、そのあたりも見えてくるだろう。この時期がやって来ると、「あー、脇目も振らずに身を投じるのも悪くないなぁ」と思う。

・・・・・・†・・・・・・
今週の１枚
・・・・・・†・・・・・・
第 248 回目。小さい写真だが、新司祭との共同司式ミサ。
http://hanashi-no-mori.news-site.net/130328.jpg
===-===-===-===†神に感謝†===-===-===-===-===

・・・・・・†・・・・・・・・・・・・・†・・・・・・・・
13/03/29(メルマガ No.642)　聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)
血と水が流れ、すべてを与えてくださった
・・・・・・†・・・・・・・・・・・・・†・・・・・・・・

聖木曜日に、イエスが弟子たちに示した愛を、「御自分を裂いて与える愛」と話しましたが、今十字架上でわたしたちのためにいのちをささげてくださったイエスこそ、「御自分を裂いて与える愛」そのものです。

十字架にはりつけにされたイエスは「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た」（19・34）とあるように、引き裂かれ、血と水とが流れ出て、全人類のために与えられたのです。

イエスは別のところでこう言っています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ 3・16）しかもその与えかたは、「御自分を裂いて与える」という痛みを伴うものでした。

人類を救うために、痛みを伴わないで御自分を与え、救いのわざを完成することは可能だったのでしょうか。わたしは、痛みを伴わない愛は考えられなかったのではないかと思います。

今日の福音朗読の中に、イエスを知らないと言うペトロが登場します。不正な裁判を起こした宗教指導者たちがいます。また兵士は平手でイエスを打ち、ピラトはイエスを死刑に引き渡す裁判に加担し、その上イエスを鞭で打たせました。槍で、イエスのわき腹を刺した兵士もいます。

この人々をゆるし、救いに導くためには、痛みを伴わない愛は考えられなかったはずです。イエスはこうして、どんな人をも救うには、御自分を引き裂いて与える愛、痛みを伴う愛が必要だと教えているのです。

わたしたちは、イエスの愛によって救われました。御自分を裂いて与える愛によって、いのちが繋がりました。そうであるなら、わたしたちは「自分を裂いて与える愛」を学ぶ必要があると思います。痛みを伴う愛を避けては通れないと思います。

では実際の生活はどうでしょうか。痛みを伴うのはゴメンだ。自分を裂いて与えるのは勘弁して欲しい。わたしたちは自分を痛めてまでは、愛を分け合えない弱い存在ではないでしょうか。

わたしたちは、自分を裂いて与える愛にたどり着いていません。そうであるなら、せめて御自分を裂いて与えてくださったイエスに、心からの礼拝をささげましょう。ゴルゴタの中央にあるいのちの木から、イエスが御自分を裂いて与えてくださったので、わたしたちは罪がゆるされ、救われたのです。

このあと、十字架の礼拝をいたします。人間の罪をあがなうために、痛みを伴う愛をなかなか実行できないわたしたちの救いのために、イエスは十字架にはりつけにされました。心からの礼拝をささげて、イエスの前にへりくだりましょう。せめて、わたしたちの心を裂いて、イエスにすべてを委ねましょう。

・・・・・・†・・・・・・・・
ちょっとひとやすみ
・・・・・・†・・・・・・・・
▼生と死の境目は、そんなに極端な切り替え作業をする場所ではないのかも知れない。わたしが知っている何人かの人は、集中治療室にわたしがたどり着いて間もなく医者から「〇時〇分、ご永眠です（ご臨終です？）」と宣告を受けた。
▼かつてわたしの中では、生死の境目というのはかなりはっきりしていて、とても大きな変化がそこで見られるものだという思いがあった。言ってみれば、生きている人が突然死体になるような、そんなものだと思っていた。しかし事実はそうではなかった。
▼わたしが父を看取ったときもそうだったが、さっきまで息をしていたのが呼吸が亡くなり、死の宣告を受ける。体はまだ温かい。手を握ろうと思えば握ることもできる。だがその相手はすでに死亡していて、徐々に、死体になっていくのである。
▼本人にとっての、生死の境目はどんなものなのだろうか。もしかしたら、「あれ、今死んだのかな？」くらいの変化しかないのかも知れない。突然の停電のような変化ではなく、痛みが感じられなくなったり、手で触る感覚がなくなったり、そうやってゆっくりと「死んだのだな」と納得するのかもしれない。
▼初めて聞く人はビックリするかもしれないが、病者の塗油は仮に本人が医者から死の宣告を受けても、体が温かいうちは（１時間くらいか？）秘跡を授けることになっている。医学的には死の宣告を受けているが、魂はゆっくりと肉体を離れる、ということなのだろう。
▼時に病者の塗油を授けに行く司祭は、残酷な場面に遭遇することがある。秘跡を授けている間に容態が急変し、医者から宣告を受けたりする。すると、家族は泣いている一方で、秘跡を授けに来た司祭に感謝の言葉を述べなければならなくなる。
▼司祭も、医学的には間に合っていない場面で授けているとき、かける言葉が見つからなかったりする。生死の境目では、神だけがふさわしい言葉を知っている。神だけが知っているふさわしい言葉は何だろうと、たまに思い巡らすことがある。

・・・・・・†・・・・・・
今週の１枚
・・・・・・†・・・・・・
第 249 回目。断食（大斎、小斎）の日。フルーツ・グラノーラで過ごします。
http://hanashi-no-mori.news-site.net/120406.jpg
===-===-===-===†神に感謝†===-===-===-===-===

・・・・・・†・・・・・・・・・・・・・†・・・・・・・・
13/03/30(メルマガ No.643)　復活徹夜祭(ルカ 24:1-12)
復活したイエスに出会えるのは「捜す人」
・・・・・・†・・・・・・・・・・・・・†・・・・・・・・

主の復活、おめでとうございます。聖週間が始まる頃から、まったく声が出なくなり、復活徹夜祭の復活賛歌はどうなることかと思っていました（この原稿は 24 日に作成）。わたしの声も復活してハレルヤです。
さて今年の復活の喜びを、イエスを捜す人に光を当て

て考えたいと思います。まず婦人たちが、週初めの日の明け方早く、墓に出かけました。けれど墓にはイエスの遺体が見あたらなかったとあります。彼女たちは復活したイエスに会いに行ったのではありませんが、イエスを捜しに行ったのはたしかです。

そこへ輝く衣を着た二人の人が現れ、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか」（24・5）と声をかけられました。イエスを捜しているのはよろしいが、生きておられる方を死者の中に捜してはいけないと言うのです。この場面も「イエスを捜す人」に大事な意味が込められていることを感じさせます。

婦人たちは墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせました。婦人たちの話を聞いた弟子たちは意見が分かれます。彼女たちの話をたわ言のように思った仲間と、ペトロのように婦人たちの話に動かされてイエスを捜しに行く人たちです。

わたしはこの「捜しに行く」という態度が、復活したイエスと出会うために大切なことだと考えます。与えられた朗読箇所の中では、婦人たちも、ペトロも、墓にイエスを捜しに行きましたが結局は見つけることができませんでした。

それでも、捜すことは大切なのだと思います。捜す人がいて、復活したイエスに出会うことができるからです。もしだれも捜さなかったら、つまり婦人たちも捜しに行かない、弟子たちもだれも捜しに行かなかったとしたら、イエスが復活したにもかかわらず、誰もイエスと出会わなかったかもしれません。

日本の教会はこの点で歴史の中で大きな体験をしました。250 年近く司祭がいない時代を信徒だけで信仰を守り抜き、プチジャン神父が大浦に派遣されたとき、イザベリナ杉本ゆりほか数名が、司祭を捜しに行ったのです。

捜しに行ったから、プチジャン神父と出会うことができました。捜しに行ったから、潜伏していたキリシタンは復活し、神の民の交わりを取り戻したのです。

一方で、司祭を捜しに行かなかった人々もいました。捜しに行かなかったのか、見つけることができなかったのかは分かりませんが、捜すことをやめたために、復活の喜びを味わうことなく、今もひそかな信仰を守り続けています。これは日本教会の歴史に刻まれた悲しい一頁です。

わたしたちの生活に踏み込んで考えてみましょう。わたしたちも、復活したイエスに出会うために、「捜す人」でなければなりません。生活と信仰の結びつきを、自分に備わっている才能と信仰の証しとの接点を、教育や価値観と信者としての生き方を。こうした現実社会と信仰の接点で、イエスを捜し求める人でなければ、復活したイエスに出会うことはないのです。

今の生活があるのはだれのおかげだろうか。今の生活を、だれに一番感謝すべきだろうか。そういうときに、捜し求めていって復活したイエスのおかげだ、イエスにいちばん感謝すべきだとの答えにたどり着くでしょうか。

わたしの才能や特徴は、聖書の登場人物ではあの人に似ているかも知れない。聖書の中でその人はこんな働きをしたのだから、わたしも教会の中で同じようにイエスのお役に立てるのではないだろうか。才能や特徴からイエスを捜し求めることもできます。

日常生活のまっただ中で、わたしたちはイエスを捜し求める人になることができます。こうして、頭の中だけでなく、生活の中でイエスを捜し求めるなら、わたしたちは復活したイエスと出会うでしょう。復活したイエスと出会い、喜びに満たされる生活に入っていく。そのための恵みを、今日のミサの中で求めましょう。

・・・・・・†・・・・・・・・
ちょっとひとやすみ
・・・・・・†・・・・・・・・
▼御復活おめでとうございます。これからもたくさんのメルマガの読者とtwitterやfacebookの方々とのふれあいがあって、充実した日々を過ごしていきたいと思っています。もう十分暖かいので、マラソンも復活しなければならないのですが、まだ冬眠しています。
▼ボートのほうは、4月にもなることだし、陸揚げしている「さざなみ号」を戻して、ボート釣りに行こうと思っている。釣りは例外はあるとしても、たいてい「見えない相手との駆け引き」をする楽しみがある。
▼魚が口を開けるのを見ながらする釣りもあるかも知れないが、ほとんどは竿先の動き、手に伝わる釣り糸の微妙な変化で相手を捕獲するのだから、繊細な感覚が要求される。ぴくりと竿先が動いたのを、揺れる船上で捉えなければならない。あるいは、ほんのわずかウキが上下したのを見逃さないようにしなければならない。
▼「魚の動きが読み取れるのに、なぜ教会の動きが読み取れないのか。」聖書の言葉をもじってみた。教会の動きは、「信徒発見150周年」である。250年近く司祭がいなかったのに、信仰を守り伝え、司祭がやっと戻って、その司祭に自分たちが受け継いできた教えが間違っていないか確認に行った。
▼信徒が250年の歴史を繋いだ。司祭ではない。150年経って、やはり信徒が信仰を受け継いでいくために、現代に何が必要かをもう一度考えるときが来ていると思う。これから長く司祭が与えられない教会もやって来るだろう。そんな厳しい時代を乗り切って、教会が復活するために、このタイミングで何か手を打つべき時が来ていると思う。

・・・・・・†・・・・・・
今週の1枚
・・・・・・†・・・・・・
第250回目。司祭の日。金祝・銀祝・新司祭おめでとうございます。
http://hanashi-no-mori.news-site.net/120407.jpg
===-===-===-===†神に感謝†===-===-===-===-===

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

イエスは必ず死者の中から復活する

あらためてご復活おめでとうございます。ご降誕とご復活のお祝いは説教を別々に用意しています。朗読される聖書の箇所が違うからです。それで、皆さんご苦労ですが、ご降誕とご復活はそれぞれミサにあずかる意義があると理解して、どちらか片方に参加して良しとするのではなく、夜のミサも翌朝のミサも、両方あずかるようにしてください。苦労して別々の説教を作っていることにも共感してもらえたらと思います。

ところでイエス様は復活して喜ばしいですが、広島カープは復活しますかねぇ。復活すると思う人、手を挙げてください。復活すると思っている人はどうも少ないようですね。4 月 10 日のヤクルト戦は参りました。9 回終わった時点で 3 対 3 だったのに、10 回表に 12 点入れられて、15 対 3 で負けてしまいました。それ以前にも大差で負けたりして、復活の季節に復活をいまだ信じ切れない司祭であります。

与えられた福音朗読は、マグダラのマリアがイエスの納められた墓の様子を、ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子に報告に行くところから始まって、二人の弟子がイエスの死者の中からの復活を信じるに至ったという物語です。

物語をよく読むと、もう一人の弟子が先に墓に着いたのですが、墓の中に先に入ったのはペトロでした。それなのに、中の様子を見て、イエスの復活を信じたのは、そのあとに墓に入ったもう一人の弟子のほうでした。この違いはどこにあるのでしょうか。

ここにはっきりとは書かれていませんが、イエスの復活を信じることができたのは、もう一人の弟子が「イエスが愛しておられた弟子」とあえて書かれているので、イエスの愛が先にあって、人はようやくイエスの復活を理解し、信じることができるのだと思います。

今年は百人隊長の目線からという切り口でした。百人隊長がイエスの愛に触れ、愛に満たされたかどうか分かりません。「神を賛美して言った。『本当に、この人は正しい人だった』」この描写はありますが、イエスの愛に触れ、愛に満たされたとしたら、もう少し踏み込んだ声を上げたかも知れません。

私たちは空の墓の向こうにある真実を知り、理解し、信じています。イエスは死の枷を打ち砕き、栄光に入られました。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」（20・9）私たちの信仰です。

エマオの弟子たちのように私たちが希望を失いかけたとき、復活した主はそばにいて力づけてくださいます。ユダヤ人を恐れて家に閉じこもっていた弟子たちのように、素晴らしいカトリックの信仰を固い殻の中に閉じ込めている私のそばに、復活の主はともにいてくださいます。勇気を出して、イエス・キリストを告げ知らせる宣教者となりましょう。

主日の福音 2019/4/28(No.1001)

神のいつくしみの主日（ヨハネ 20:19-31）

だれもが神のいつくしみの中で生きるように

復活節第２主日は聖ヨハネ・パウロ二世教皇の時に「神のいつくしみの主日」と呼ばれるようになりました。朗読ではイエスが弟子たちに現れ、その場にいなかったトマスにも、さらに現れます。この物語をよく読むと、私たちに対する神のいつくしみも読み取ることができるように思います。

今日、ミサのあとに女性部の総会があります。それが終わると、私は休暇を取らせていただきます。大阪に行きます。栄実さんを訪ねてきます。甲子園球場も訪ねてきます。どちらも懐かしいです。楽しい訪問になればいいなぁと思っています。ということで、田平教会では平日は土曜日の朝だけ、ミサがあります。それまではお休みです。ミサは休みますが、呼吸は止めないでください。私を大阪から呼び戻さないように。

連休後半は、３日に教区評議会総会です。最終的に参加を決断しました。４日午後は平戸地区の転勤する神父様のお見送りとお迎えです。５日はクルシリヨ参加者との感謝のミサと参加者をねぎらう食事会です。戻ってきてからもいろいろ忙しくなりそうです。５日は長崎に留まりますので、６日(月)もミサをお休みさせてください。

一つだけ心配事があります。すでに危篤の状態にある人がいると報告を受けています。もちろん連休を越してくれることを願っています。それでももしも、連休にかかった場合は、お隣の先輩にお願いをしております。念のためお願いはしておりますが、連休を越してくれることを願っています。

さて復活したイエスは、ユダヤ人を恐れて自分たちのいる家の戸に鍵をかけてじっとしていました。家に鍵をかけるとは、もはやイエスが戻ってくることもないと考えていた証拠です。弟子たちは、そこまで恐れに支配されていたのですが、イエスの復活は彼らにも届きました。

この復活したイエスとの出会いに、立ち会えなかった弟子がいました。トマスは、「大事な場面に立ち会えなかった人」を象徴的に表しています。卒業式に風邪を引いて参加できなかった卒業生とか、受験の日にインフルエンザにかかって一年を棒に振った受験生とか、そうした人々を象徴的に表しているでしょう。

イエスの配慮は、どこまで届いたのでしょうか。少なくとも、トマスまでは届きました。つまり、その場にいるはずだったのに何かの事情で立ち会えなかった人たちまで、イエスの復活は及んでいくのです。その神のいつくしみがどのようにして、私たちにまで及んでくるのでしょうか。

今日の福音朗読は、結びにこのように書かれています。

「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、

信じてイエスの名により命を受けるためである。」（20・30-31）

弟子たちは最初に神のいつくしみにあずかりました。そこに居ようと思えば居ることのできたトマスにも、神のいつくしみは届きました。しかし物理的にその場に立ち会えない人々がはるかに多いのです。結びの言葉はそのはるかに多い人々のためにも、神のいつくしみは届くと言っているのではないでしょうか。

今年の聖週間に備えて、私は聖週間のミサの説教をプリントにした冊子を用意しました。50 部用意したのですが、50 部では足りなかったようです。予想外でした。「余る」と見込んでいたのです。このプリントは、聖週間、特に聖なる三日間にすべてあずかるのは難しい、そういう人の補いのために用意したものでした。ひょっとしたら、すべてあずかった上に、持ち帰った人もいるかも知れません。

今日は、神のいつくしみの主日です。神のいつくしみは、ミサの典礼に行こうと思えば行くことのできた人にも届くわけですが、物理的に、参加がまったく不可能な人にも届くはずです。ですがそのためにはもちろん協力者が必要です。たとえば今回用意した冊子を、私があと 20 部増刷する。ここから神のいつくしみを届けるリレーを始めることができます。

その上で、皆さんの中の誰かが、「あの人は物理的に聖週間のミサの典礼に参加できない人だから、私が届けに行こう」そういう人が現れれば、田平教会でも神のいつくしみに触れる人、復活したイエスとあの弟子たちが集まった家に集えない現代の人々にも、神のいつくしみは届くのだと、証明できるのではないでしょうか。

そうなればいいなぁと思って、案内所に今回の冊子をあらためて 20 部用意しましたので、皆さんは、神のいつくしみがあなたにも届きましたよと証しする証人になっていただければなぁと思います。

私たちが、物理的にどう考えてもイエスの復活の喜びに触れることができない人まで復活の喜びを届けるなら、今日の神のいつくしみの主日は皆さんのおかげでさらに実り豊かな日となります。鍵を握っているのは皆さんです。私はきっかけは作って上げますが、女性部の総会が終わったら消える人ですから当てになりません。そう思って、「神のいつくしみを私が届けることのできるのは誰だろうか？」このように思い巡らす一日といたしましょう。

復活節第 3 主日(ヨハネ 21:1-19△21:1-14)

復活節第３主日（ヨハネ 21:1-19△21:1-14）

イエスの差し出す食べ物を食べる

復活節第３主日、復活したイエスが七人の弟子に現れる場面が朗読されました。続けてイエスがペトロに「わたしを愛しているか」と問いかける場面も選ばれています。この二つの出来事は「弟子たちに示すイエスの愛」でつながりがあります。弟子たちに示すイエスの愛は、同時に私たちに示すイエスの愛でもあります。

連休中に大阪に行ってまいりました。田平から大阪にいる子供達のもとに転出した人を訪ねることができました。教会の人の名前を挙げたら、ふるさとの田平を非常に懐かしがっておりました。

信徒会館裏手の土地を長崎大司教区に寄進していただいた関係で、主任司祭が計画していた事業の進み具合をかなり気にしておりました。「自分の目の黒いうちに、完成した姿を見せて欲しい」とお願いされ、「もう少し元気でいてね」とは答えましたが、明言できなかったのが悔やまれました。

残念ながら野球観戦は地元阪神に返り討ちに遭いまして、ようやく帰りの飛行機の列に並んでテレビを見ていたら三連戦の最後だけ勝ちました。「球場に行ったときに勝たんかい！」と思ったものです。

また、旅行中変化はないか、案内所から報告を受けていたのですが、新しく入れ替えた監視カメラでいろんなことが写っていたようです。以前は監視カメラの映像を確認できるのは祭壇の裏、香部屋でしたが、今何が行われているかを監視するのには不十分でした。現在は映像は案内所でチェックしていまして、その中に、聖水を入れた貝殻に手を入れた人たちが、お互いに水掛をしている様子が映っていたそうです。意味を理解できない人の仕業とは言え、残念です。

また、朝ミサが終わってから案内書が来るまでの静かな時間が狙い目だと思ったか、拝観時間９時からと書かれているのに朝７時８時に扉を開けようとしている人たちも写っていました。新しいカメラは高性能で、鼻毛に白髪が交じっているのまで分かりますから、皆さんもご注意ください。

福音朗読は、弟子たちに示すイエスの愛が、物語を理解する鍵だと思います。イエスの配慮が、徒労に終わった昨晩の漁を大漁に変えます。イエスは弟子たちが空しく漁から帰ってきたことをすでにご存知でした。弟子たちの無力感を変えることができるのは、目に見える成果です。この成果を彼らに与えてくれたのは、イエスの弟子たちに対する愛だったのです。

この場面を、別のたとえで考えてみましょう。家庭の中で、親が子を見守ることは当然ですが、子供が目標になかなか到達できないとき、むやみに親が手を貸したりすれば、子供が味わった苦労を水の泡にしてしまいます。子供が体験する苦労を実りに変えてあげるような見守りこそが、何より親の果たすべきことです。それこそが親の子に対する愛な

のです。

ですから、イエスは弟子たちがもう一度湖に網を入れるのを見守ります。彼らの労苦が、イエスの愛ある配慮によって実を結ぶことを学ぶためです。イエスが望めば、魚を天から降らせることもできたでしょう。そうではなく、弟子たちの苦労、味わった無力感が無駄にはならないことを教えるのです。イエスの愛が、これまでの苦労や無力感を豊かさに変えてくれることを教えるのです。

同じことは、イエスがペトロに「わたしを愛しているか」と尋ねる場面にも当てはまります。イエスがペトロを愛しているから、ペトロのイエスに対する愛が豊かに実るのです。「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」（21・15）ペトロの言葉とは裏腹に、イエスが十字架にはりつけにされたとき、ペトロはその場を離れたのです。それもご存知の上で、イエスの愛がペトロのこの返事を豊かに実らせます。ペトロは最後には、みずからが殉教することで、イエスへの愛を証明しました。

これらをまとめて、「イエスの差し出す食べ物を食べる」としたいと思います。弟子たちは食事をしながら、イエスの愛を理解したからです。イエスの愛からあふれ出た食べ物、イエスの差し出す食べ物が、弟子たちを造り変えていったからです。私たちも、イエスの差し出す食べ物を食べるなら、イエスの真の弟子へと造り変えられていくことでしょう。

余談ですが、「神が差し出す食べ物」に関連して、使徒言行録の次の箇所を思い出しました。ペトロが昼の祈りを終えたとき、幻を見て、示された獣（けもの）を屠って食べなさいと声がしました。もちろんペトロは「主よとんでもないことです」と答えますが、さらに声がして、次のように言われたのです。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない。」（使 10・15）

これは意味深い言葉で、単なる食事のことだけではありませんでした。使徒言行録は宣教活動の最初の頃の物語ですから、異邦人に対する宣教はまだ議論の途中だったわけです。ペトロは幻を見て、異邦人に対する宣教も、神が差し出す食べ物であり、食べるべきだと理解したのです。弟子たちは常に、イエスが差し出す食べ物で満たされ、豊かになっていきました。弟子たちが受け継いだ教会も、イエスが差し出す食べ物で満たされ、豊かになっていったのです。

私たちも、復活の主に満たされて豊かになっていきたいものです。私たちに、イエスが愛をもって与えてくださる食べ物はミサの聖体と、宣教への派遣です。派遣は、直接の食べ物ではありませんが、イエスが愛をもって与えてくださるものです。私たちが受け入れるとき、教会はさらに満たされ、豊かになっていきます。

平戸地区にも新しく司祭が赴任してきました。新しく入られた山田教会の主任司祭と共に、ミサの聖体と宣教への派遣を受けて、さらに教会の民が満たされ、豊かになっていけますように。

主日の福音 2019/5/12(No.1003)

復活節第 4 主日（ヨハネ 10:27-30）

わたしの羊はわたしの声を聞き分ける

「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。」（10・27）福音朗読箇所の冒頭の部分ですが、「誰かの声と誰かの声を聞き分ける」それだけではないようです。少し掘り下げて、今週の糧といたしましょう。

先週中田神父は、代表を務めている「声の奉仕会マリア文庫」の設立 40 周年記念ミサと交流会に出席してきました。このボランティア団体は、目の不自由な方々に、録音などの音訳を用いて情報提供しお支えするという活動をしております。事務所が長崎市橋口町にありますが、すぐ近くには県立の「長崎点字図書館」がありまして、長崎で大会を開くようなときには協力したりしています。

このマリア文庫の設立 40 周年記念ミサの説教で、ちょうど今週の説教につながるかなぁという話をしました。マリア文庫は「声の奉仕」を通して視覚障害者に貢献しております。「声」は単なる「音」とは違うと考えています。単なる「音」は、そこから何かの考えや思いを汲み取ることはできませんが、「声」はすでに考えや思いが込められているわけです。受け取る相手は、「声」に込められた考えや思いを理解します。

こうした、考えや思いの詰まった「声」で視覚障害者に 40 年奉仕してきました。十分評価できる活動だと思いますし、誇りに思ってよいのですと、会員の皆さんをねぎらいました。この話は、たとえとして、今週の福音朗読の学びにお役に立つのではないでしょうか。

「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。」イエスが羊たちにかけるのは、「声」です。羊を呼び、また羊が迷わないように導く「声」です。「声」を聞く羊は、「声」の主（ぬし）であるイエスの考えや思いを理解します。「声」を理解する羊ですから、それはイエスを受け入れた人々です。イエスの声に、安心して自分を委ねることができると理解したとき、イエスの声に従う人に変わります。単に声を聞き分けるのではなく、その声に喜んで従うのです。

イエスの声を聞き分け、イエスに従う一方で、イエスは「わたしは彼らを知っており」と言っています。イエスが、「名前や顔を知っている」というような意味なのでしょうか。そうではありません。聖書、特に旧約聖書で「知る」という言葉は「愛する」という言葉と置き換えられます。創世記では、「アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み・・・」（創世記 4・1）ほかにも「再び、アダムは妻を知った。彼女は男の子を産み、セトと名付けた。」という例があります。

ヨハネは、旧約聖書を深く理解し、念頭に置いて福音書を書きました。ですから「わたしは彼らを知っており」は、「わたしは彼らを愛しており」に置き換えられるわけです。

そうすると、イエスの次の言葉もつながりが良くなります。「わたしは彼らに永遠の命を与える。」（10・28）「知っている」というだけの人に永遠の命を与えるというのはつながりがよくありません。「愛し

ている」という意味であれば、永遠の命を与えるというのはよく分かります。このように、ヨハネ福音書の中で「知る」という言葉が「愛する」という意味合いを持っていることがあるのです。

「声を聞き分ける」「知っている」これらの言葉がもっと踏み込んだ意味を持っていることが分かると、私たちも自分の態度を見つめ直す機会になります。私たちはイエスとどのようなつながりを保っているのでしょうか。

「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。」私たちはイエスの声を、単に聞き分けるだけのつながりでしょうか。それだけではいけないのです。イエスの声に耳を傾け、聞き従う人でなければなりません。

私たちが、イエスの声に聞き従うとき、イエスは単に私たちを知ってくださるだけではなく、私たちを愛して、永遠の命を与えてくださいます。踏み込んで、イエスとのつながりを持ちたいと望む人に、イエスも踏み込んで永遠の命を与えるのです。

私たちはイエスとのつながりをどのように保ちたいでしょうか。年に一回のつながりですか。洗礼を受けてから亡くなるまで、七つの秘跡それぞれで一回だけのつながりですか。イエスとの踏み込んだつながりを、「聞く耳のある者」となって、永遠の命を味わうつながりを保ち続けることにしましょう。

復活節第 5 主日(ヨハネ 13:31-33a,34-35)

復活節第 5 主日（ヨハネ 13:31-33a,34-35）

互いに愛し合う中にイエスがおられる

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（13・34）イエスが示された「新しい掟」を、私たちは実践し、世に示さなければなりません。具体的に、その方法を探っていきましょう。

いよいよ、四連覇が近づいてきました。実際には実現しないかも知れませんが、私の中では四連覇間違いなしだと思っております。現時点では首位ではありませんが、首位の後ろで、あたかも「あおり運転」をしているかのように「オラオラ」と言いながらぴったり追いかけていくほうが面白いことに気づきました。

今日はそんな話題を延々話す予定ではありませんで、こういう声もありがたいなぁという体験談を紹介します。教会をいくつか転勤している中で、新成人を迎える人をお祝いしてあげる機会を何度かいただきます。私のほうからは教会での祝福式と、何か思い出になる記念の品をと思ってプレゼントを用意します。これからの時間に少しでも役に立ってくれたらいいなぁと思いながら記念品は選んでおります。

そういう中で、十年前に成人式を迎えた人から、いただいた品物を今でも持っていて、生きる力をいただいていますという便りが届きました。私はその人には、これからこういう時間を過ごせたらいいですねというカードと記念品を渡したような気がしますが、それが十年経っても力をもらっているということで、お役に立てたのかなぁと思っております。

私も、人からいただいた声かけや品物を、大切にするタイプです。その時どんな気持ちでこの品物をくださったただろうか。どんな思いであの言葉をかけてくださったただろうか。年齢が 50 歳を過ぎて、少し考えが及ぶようになったのです。

私の場合は、成人式の折ではありませんが、助祭のときに頂いて 28 年経った今も大切に使っている祭服があります。結婚式を執り行うときに身にまとう祭服です。ほかにも、聖体の永久礼拝の時に着用しています。この祭服を着て結婚式を執り行うたびに、身の引き締まる思いです。今になって思うと、「取り扱う祭儀の尊さを、いつまでも忘れるな」そういう思いが込められていたのではないかと考えます。

私が新成人を迎えた人に贈ったものも、思いは込められていますが、それがどれくらい伝わるかは別問題です。その人は私の思いを十二分に汲んでくれて、カトリック信者としてより一層励んでくださっているわけです。本当にありがたいなぁと思います。

誰かの思いが込められた言葉や贈り物が、受け取った人をより成長させる。受け取った人がキリスト者としてより高い生き方を目指すようになる。その様子がいつか送り主にも届いてその人の成長を喜ぶ。これは十分、今週の福音朗読でイエスが弟子たちに命じられた「新しい掟」

を生きる姿だと思うのです。

誰かが誰かのことを思う。そして小さな行動を起こす。その小さな行動が相手の心に届いて、相手はよりイエスの望みに答えようとする。受け取った相手がこんな日々を送って、キリスト者としてさらに成長を目指していることがこちらにも伝わってくる。ここにすでに、イエスが弟子たちに命じられた「互いに愛し合いなさい」という生き方が織り込まれているのではないでしょうか。

ひょっとすると皆さんは、「互いに愛し合いなさい」と言われるが、平凡な私たちにはとてもそのようなことはできないと思っているかも知れません。けれども平凡な生き方の中にも、必ず誰かのために小さな行動を起こすことは可能だと思います。

その行動が届いた人の中で心に響き、よい実を結んでイエスの喜ぶ生き方を目指すようになる。これで十分なのです。私がイエスの示す新しい掟から考えたのは、「そこにイエスが生きておられるなら、互いに愛し合っている何よりの証である」そういうことです。

互いが互いのことを思い、小さな行動を起こす。その働きかけを受け取った人の中でイエスが生きておられるなら、イエスの命令にそって互いに愛し合っているのです。難しい生き方をイエスは命じたのではありません。互いに働きかける間柄の中に、イエスが生きておられるなら、新しい掟を実践しているのです。

復活節第 6 主日(ヨハネ 14:23-29)

主日の福音 2019/5/26(No.1005)

復活節第 6 主日（ヨハネ 14:23-29）

聞いている言葉にお遣わしになった父の声が

「あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。」（14・24）主の昇天を来週に控えた復活節第 6 主日に、イエスのこの言葉を考えてみることにしましょう。

聖母月の締めくくりである「聖母行列」を無事に終えることができました。聖母像を先頭に、ロザリオを唱えながら行列したわけですが、行列をしたということだけが聖母行列の意味ではないと思います。聖母と共にこの五月を歩む。聖母の生き方に倣ってこの五月を生きる。そういうことを最終確認するための行列ではないでしょうか。

では聖母の生き方とはどのようなものだったでしょうか。それはイエス・キリストの言葉を生きて力ある言葉として受け止める生き方でした。たとえば婚礼の席でぶどう酒がなくなったとき、イエスの言葉が今にも台無しになろうとしていた婚礼を喜びに変えました。この時イエスの言葉が場面を喜びに変えることを信じて疑わなかったのはマリアお一人だったのです。

ですからわたしたちの聖母行列も、イエスの言葉を生きて力ある言葉として受け止めたマリア様の生涯に、これからも見倣っていきますという気持ちで聖母行列に参加したわけです。イエス・キリストの言葉は今は「聖書」という文字に書かれた言葉ですが、私たちもマリアに倣い、「生きた言葉として私たちに語られている」そう受け止める工夫・努力が必要です。その努力はふだんの教会生活から始まっているかも知れません。

私は田平教会に赴任するに当たって忘れられないことがあります。赴任したその年の夏に、大司教様が駐日バチカン大使を連れて平戸地区を視察で回られた折、田平教会に立ち寄ってくださいました。田平教会の説明を私が引き受け、その内容を大司教様が大使に英語で通訳します。「この教会はおよそ百年前に中田藤吉神父様が先頭に立ち、信徒が力を合わせて建てたものです。」

さらに「中田藤吉神父様から百年後に、師の血筋に当たる中田神父が献堂百周年を祝うことになります。これも大司教様の粋な計らいです」と大司教様に伝えたのです。その時大使に通訳しようとしていた大司教様は驚いたような顔で私を見て、「そうだったのかね？」と言われました。私は心の中で「そこは、『そうなんだよ』と言ってくださってよいのに」と思ったものでした。

私はこの話を単なる思い出話で話したのではなく、説教の冒頭で触れたイエスの言葉を思い出すきっかけにしたかったのです。「あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。」イエス・キリストの言葉は、福音書に刻まれた二千年前の話ではなく、今も生きて、力ある言葉だということです。

大司教様が私を田平教会に任命したとき、本当に百年前の中田藤吉

神父様と私のつながりには気づいてなかったかも知れません。けれども神の摂理は、今も変わらず働いているのです。大司教様を通して、神は不思議な計らいを、実現させてくださったのです。ある意味大司教様がお気づきで無かったということが、神の摂理であることを物語っています。こうして、ふだんから「神の言葉は生きていて力がある」という体験を積むことで、福音書に語られるイエスの言葉により深く耳を傾けることができるようになるでしょう。

もう一つ考えたいことは、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」（14・26）このみことばです。私たちが触れることのできるイエスの言葉も、自分勝手に解釈すべきではありません。聖霊の照らしがあってこそ、その意味が説き明かされるのです。

聖書を読み、学ぶ中で、聖霊の照らしはどのように与えられるのでしょうか。私はそのとっておきの場が「聖書の分かち合い」だと思っています。田平教会ではまだ実践されておりませんが、少人数で聖書の箇所を読み、それについて感じたことを分かち合うという聖書の学びです。

イエスはかつてこう言われました。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（マタイ 18・20）少人数で聖書を読むとき、聖霊が聖書の読み方を導いてくださり、よりよい学びをお与えになるのです。一人で専門書を読み、聖書を学ぶことも可能ですが、集まって分かち合いをするなら、聖霊の照らしによって大きな実りが得られることでしょう。

来週になると、私たちは主の昇天を祝います。主が天に昇られるのは、聖霊をお与えになるからです。私たちに与えられたイエスのみことばが、今も生きて力強く働いてくださる。そのためには聖霊による解き明かしがいつも必要です。聖霊のご降臨を願いながら、イエスのみ心の月へと続いていく一週間を希望のうちに歩むことにしましょう。

主の昇天(ルカ 24:46-53)

主日の福音 2019/6/2(No.1006)

主の昇天（ルカ 24:46-53）

天に昇り、すべての人の主となられた

主の昇天の祭日を迎えました。キリストの聖体まで一連の祝日が日曜日ごとにやって来ます。名前と、順番を、中学生くらいからしっかり覚えて欲しいと思います。もし中学生高校生がしっかり覚えてお父さんお母さんが覚えていないなら、その時だけは子供が親に威張っても構いません。

フランシスコ教皇は、5 月 31 日正午に、三浦町教会の主任司祭であるペトロ中村倫明神父様を長崎大司教区の補佐司教に任命されました。日頃重責を担っておられる髙見大司教様も大きな助け手を与えていただいたのではないかと思っております。2019 年の主の昇天は、中村倫明被選司教様に触れながら考えてみたいと思います。

私事ですが、中村倫明被選司教様は私が中学一年で神学校に入学したときの高校二年生でした。とても真面目で信心深く、神学生のあいだでは聖人と呼ばれていました。ひょっとしたら、今の中村被選司教様を知っている人は、「せいじん」は「せいじん」でも「別の星からやって来た異星人」と思っている人がいるかも知れません。私も実は、どこであの真面目な人があれほど人を楽しませる人に変わったのか不思議でなりませんでした

ですが、私は縁あって中村被選司教様のふるさとである太田尾小教区に初めての主任司祭として赴任したのです。今から 20 年以上前のことです。そこで 6 年過ごし、生まれ育った「塩田地区」の雰囲気に触れて、「あー。ここで幼い頃に育てば、こうなるのは当然だ」と納得したのでした。その地区の人はだれもが芸達者でした。小学生でさえ、小皿をカチカチ鳴らしながら踊りを踊る地区でした。

けれどもこのたびの補佐司教の任命で、すべてのことをいったん手放さなければならなくなったと思います。7 年目に入っていた三浦町小教区の主任司祭、またクルシリヨの指導司祭、ほかにも私の知らない数々の務めを果たしておられたことでしょう。それらを手放し、長崎教区全体のため、日本の教会と世界の教会全体のため、新しい形で神様の道具となる必要があります。よく決断なさったなぁと思いました。

ところでさまざま引き受けておられた務めは、後任を決めなければなりません。すぐに任命しなければならないのは三浦町教会の主任司祭です。どなたか適当な方がおられるのでしょうか。私は最近やっと、7 キロの鯛を釣ったばかりなので、私は行くことはできません。5 月の転勤で同じ任地に 6 年おられた方は異動なさったのですから、そうなると 5 年間同じ任地におられる神父様の中から、選ぶことになるのではないでしょうか。誰とは言えませんが、すぐに人事異動も発表されることだと思います。

さて、中村被選司教様は、このたびの辞令で、小教区の主任神父様という立場から、司教様という立場になられました。実は私は中村被選

司教様のことを、「倫明さん」と親しみを込めて呼んでいました。けれども司教様になられたのですから、「中村司教様」と呼ばなければならないと思います。「倫明さん」と「中村司教様」とでは、天と地の開きがあると思いませんか？雲の上の存在、私たちから遠く離れた存在になってしまうのでしょうか。

被選司教様の立場からまず考えてみましょう。被選司教様はきっと、今まで通りの接し方を希望されると思います。もちろん立場の違いは厳然としていますから、公の場で「倫明さん」と呼ぶことは失礼に当たります。けれども心の中では「倫明さん」「おう。中田」そういう関係を心から望んでいるのではないでしょうか。

私たち一般の司祭の立場から考えてみましょう。誰かが教皇様の指名で司教様になることは当然あり得ます。けれども選ばれた司教様が雲の上に行くのであれば、その司教様は誰のための司教様でしょうか。そんな司教様だったら、神様の良い僕としてお仕えすることはできないと思うのです。

ですから誰かが司教様に選ばれるとき、それは雲の上の存在になるのではなく、もっと心を砕いて、すべての教区民に親しまれる存在になろうとするのではないでしょうか。一つの小教区の主任司祭は、一つの小教区の信徒に慕われ、愛されるならそれで務めを果たすことができるでしょう。けれども司教様になったからには、一つの小教区の司教様よりも、もっと信徒に愛され、身近に感じられる方になろうと努力するはずです。

私はここに、主の昇天に見るべき意味合いがあると思っています。復活したイエスが、御父のもとに、天に昇られました。それは決して雲の上の存在になるためではないはずです。人となられた神の子が公生活で活動された場所は限られています。その場所に限って務めを全うするだけならば、天に昇られる必要など無かったでしょう。そうではなく、復活した主は限られた場所の主から、すべての人の主となられるために、天に昇られたということです。すべての人の救いのために心を砕く主として働き続けるために、天に昇られたのです。

私たちが神学生時代に「倫明さん」と呼んでいた方が、補佐司教様となられます。これからも補佐司教様は「倫明さん」でいてくれると信じたいと思います。そのように、復活した主が天に昇られたのは、地上でその姿を見た人の救い主で終わらず、すべての人の救い主となられるのです。それは雲の上の存在になることではないと思います。あえて言うなら、もっと素晴らしい、もっと高い意味での「倫明さん」になられたのです。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 14:15-16,23b-26)

主日の福音 2019/6/9(No.1007)

聖霊降臨の主日（ヨハネ 14:15-16,23b-26）

聖霊は欠けている私たちを満たしてくださる

聖霊降臨の主日を迎えました。「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」（14・26）イエスの言葉を思い起こさせ、その意味を理解させてくださる聖霊を、私たちも豊かに受けましょう。

長崎教区司祭の黙想会が火曜日から始まります。黙想会ですからもちろん各自が何かの学びを得てそれを小教区に持ち帰るお恵みの時なのですが、私はそのほかにも、今まで欠けていた何かを埋めていただくひとときでもあると思っています。

もう 20 年以上も前のことですが、黙想会に行くと一人の先輩から同じことを質問され、ほとほと困っておりました。当時私は浦上教会の助任だったのですが、その先輩神父様が食事の席で相席になり、「あんた、今どこか？」と聞いてくるのです。

黙想会はざっと百人が集まる大所帯で、朝昼晩、ふだん顔を合わせることのない先輩方に混じって食事を共にします。大きな食堂で食べる割には案外同じ席を好むもので、窓のある席、壁を背にした席など、先輩方が選ぶ席は結構決まっておりました。

若い司祭たちは通路の混み合う席とか、残り物の席を選んで先輩の席が減らないように気を配って座っておりました。その中で、「おう。あんた、今どこか？」と聞かれたのです。当然私は「浦上の助任です」と答え、その場はそれで終わりました。

次の年も私は浦上の助任でしたが、黙想会での食事中に例の先輩から同じ質問をされたのです。「おう。あんた、今どこか？」私は笑顔で、「はい。浦上の助任をしております」と答えました。その年も、その先輩との会話はそれだけでした。さらに翌年、同じ先輩が三度同じことを聞いてくるのです。「おう。あんた、今どこか？」

「仏の顔も三度まで」と言います。私はつい、言わなくてもいいことをその先輩に言ってしまいました。「別に、誰でもいいでしょ？どうせ興味ないでしょ！」これで話が終われば、名前を覚えてくれない先輩司祭と、生意気な後輩司祭の話で終わりなのですが、これには続きがあるのです。

その次の年、私は浦上教会の助任として五年目でしたが、またあの先輩が食事の時に近寄ってきて声を掛けるではありませんか。「このやろう」と心の中では思っていたのですが、その先輩は私にこう言いました。「おう。浦上も五年目か。そろそろどこかの主任やな。」

私はなぜかもらい泣きしそうになりまして、「ありがとうございます」と答えてあとは何を話したか、頭が真っ白になりました。それからこの先輩は私を見ると、「おう。田平はどうか？」と正確に私の任地と赴任年数を踏まえた声かけをしてくれるようになったのです。

三年同じ質問をされて頭にきて「どうせ興味ないくせに」と言った私には、何かが足りなかったのだと思います。先輩は本当に私に興味がなかったかも知れません。けれども四年目には、「何が足りなかったのか」を見極め、見事に私の期待を良い意味で裏切ってくださったのです。黙想会で、欠けている何かを埋めていただいた先輩は、四年目には私にその姿で私にも欠けていたものを理解させてくださったのだと思います。

今日、聖霊降臨を祝っていますが、聖霊は私たちキリスト者に、人間として欠けているものを満たしてくださるお方ではないか。そう考えました。私たちは福音書を通してイエスの言葉、態度に触れ、それを学び、生活に生かそうとしています。けれども人間的な欠陥があって、イエスの言葉は分かるけれども、実行できないときがあり、理想と現実の隔たりに肩を落とすのです。

「一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」（ルカ 17・4）このイエスの言葉は十分理解できますが、同じことができない。その欠けたところを埋めてくださるのは何でしょうか。

もし、欠けたところを埋めるのが自分自身の努力だとしたら、ある人は努力で埋め合わせて高い目標に到達するでしょうが、ある人はとてもそのようなことはできないかも知れません。そして、たどり着いた人はたどり着けない人を見下すという愚かなことをするかもしれない。

もしこれが、人間の努力ではなく、もっと大きな愛、大きな力が人間の欠けたところを満たしてくれるのだとしたら、私たちは互いに喜び合うことができるでしょう。その大きな愛、大きな力とは、言うまでもなく「弁護者である聖霊」のことです。

あらためて、欠けたところを埋めることができたとすればそれは「弁護者である聖霊」のおかげであり、埋めることのできない人に私たちは「いつくしみ」のまなざしを注ぐ。聖霊が働いてわたしたちの欠けたところを埋めてくださるのであれば、私たちは皆互いに喜び合うことができるのです。

聖霊は、私たちがイエスの言葉に聞き従おうとするとき、欠けているところを埋めて、満たしてくださるお方だと考えました。そうしてイエスの言葉と行いをことごとく理解し、自分のものにできるのです。

イエスの言葉とわざは、すでに完全に示されましたが、これを十分に理解するためには、聖霊の注ぎが私たちに必要なのです。「隣人を自分のように愛しなさい」この言葉がどうして身につかないのか。聖霊の注ぎが必要だからです。

欠けているところを埋め、満たしてくださる聖霊の照らしがなければ、イエスの言葉とわざを生きたものにできないのです。心から、聖霊の照らしを願い、欠けている私を満たしてくださるように祈りましょう。

三位一体の主日(ヨハネ 16:12-15)

三位一体の主日（ヨハネ 16:12-15）

父と子と聖霊を等しくたたえる

三位一体の主日を迎えました。三年かけて、三位一体の主日を学ぼうと取り組んでおります。今年はその三年目です。今年は「聖霊なる神」について考えてみたいと思います。

黙想会に参加してきました。田平教会にも来てくださった大阪の酒井補佐司教様が説教師でした。いつもですとメモをしっかり取るのですが、今年はメモを取るよりも話に聞き入りたいと思うような講話でした。最後まで、メモを取らずにずっと話に耳を傾けておりました。

一応、聞き直しができるような準備はさせてもらいました。長崎への移動の時などに聞いてみようと思っています。とても聞きやすい声で話してくださり、田平の時と同じように資料をスクリーンに映し出しながらの講話は分かりやすかったです。

三位一体の主日を「御父」「御子」「聖霊」と学ぶ三年目です。一点だけに絞ります。聖霊を取り上げるときに聖霊だけを強調することのないようにしたいと思います。たとえば聖霊運動などはそうでしょう。カトリック教会の中で聖霊の働きかけを特別視する集まりです。

私は一度、福岡の大神学校で助祭の時に病人訪問をお願いされて信徒のグループと一緒にある家庭を訪ねました。実習先の教会信徒だったので訪問の許可は主任司祭から得て出かけました。私が聖体を授けた後、「病人に聖霊の特別な癒やしを願いましょう」と誰かが祈り始めました。すると皆が恍惚状態になって、ある人は異言すら語り始めました。私は怖くなって、そのグループとは病人を訪ねなくなりました。

聖霊の特別ないやしの働きを願うことは、悪いことでは無いと思います。けれども、聖霊を特別視するのは問題があります。今日朗読された福音の中で「その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語(る)」（16・13）とありますし、「（その方は）わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである」（16・14）と言われているのです。

つまり、聖霊の働きは御父と御子から出るもので、決して聖霊が一人歩きしてあっと驚く癒やしを施したりはしないのです。癒やしが与えられる時それは、「御父と御子から、聖霊を通して」与えられるのです。私がそれと知らずに聖霊運動のグループと病人を訪問し、直感的に「これは何かがおかしい」と感じたのは、聖霊の働きを熱心に願ってはいても、授けられた御聖体以上に聖霊の働きを特別視していたことでした。

聖霊は必ず、賜物を与えてくださいます。それは同時に、「御父」と「御子」からもたらされる賜物です。それ以外の、聖霊だけが特別視された恵みを願うべきではないと思います。私たちは長く聖霊の賜物をいただける世代です。だからこそなおさら、「父と子と聖霊」を等しくたたえる恵みを願いたいと思います。

主日の福音 2019/6/23(No.1009)

キリストの聖体（ルカ 9:11b-17）

聖体は父なる神から私たちに与えられる

キリストの聖体の祭日を迎えました。私たちに与えられる聖体の恵みはあふれるほど豊かです。どこからこの豊かな恵みが出ているのかを考え、私たちも神様の豊かな恵みにあずかる方法を考えてみることにしましょう。

田平教会出身の山内啓輔神父様がイタリアに留学することになり、私たち田平教会の信徒で元気づけて、送り出しましょうということになりました。留学経験は本人だけのものですが、勉強した内容は将来長崎教区に、また日本の教会に戻ってきますので、収穫がたくさんあるようにお祈りし、気持ちよく送り出したいと思います。

中田神父は残念ながら留学の経験が無いので、山内神父様に偉そうなことは言えません。駅前留学すら、経験がありません。フィリピンに10日間研修に行ったことと、イスラエル巡礼に2度行ったことと、韓国のソウルに2度行ったこと、これが海外経験のすべてです。これから数年にわたって暮らす神父様の苦労は、並大抵ではないと思います。

ただいろんなことを考えたのではないだろうかと想像はします。たとえば、どうして私が留学しなさいと言われたのだろうか。どうしてこれこれの分野を勉強することになったのだろうか。どうして今年から留学することになったのだろうか。いろいろ思ったのではないでしょうか。

実際は、それらに納得がいくような答えは与えられないかも知れません。納得のいくような答えは見つからないかも知れません。それでも私は、留学の機会が与えられたのだから行ってくるべきだと思うし、学んでくるようにと言われた分野に興味を持ってみるべきだと思っています。

最終的に、思い巡らすいろいろな疑問に答えを与えてくれるのは、やはりイエス・キリストだと思います。特に今週のキリストの聖体の祭日に与えられた福音朗読は、疑問に十分答えてくれると思っています。イエスが「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」（9・13）と投げかけたとき、弟子たちはとても自分たちにはその任務は負えないと思ったのです。

彼らの手元には「パン五つと魚二匹」しかありませんでした。弟子たちの持ち合わせが心細かったと言うよりも、彼らが考えるもとにしていた根拠が頼りなかったのです。そこでイエスは、彼らのより頼む根拠から出発して、不思議な体験を積ませてくれました。

イエスは、弟子たちが「根拠になり得ない」と考えたものを道具に用います。「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。」（9・16）ただ五つのパンと二匹の魚は、いったん弟子たちの元を離れ、イエス・キリストの手によって御父に委ねられたのです。そして御父からイエスの手を通して返していただいたとき、五つのパンと二匹

の魚は「根拠になり得ないもの」から、「偉大な道具」に変わっていたのです。

山内啓輔神父様の留学を、私が計り知ることはできません。自分自身に当てはめて考えるとき、私が「なぜだろう」と考えたのは教区の広報委員長をするようにと任命書をもらったときでした。それまで広報委員会で委員に加わっておりましたが、委員長はちと荷が重い、なぜこうなったのだろうかと思い悩んだのです。

けれども答えは広報委員長任期中に巡ってきた188福者の列福式に関わったときに与えられたのです。すでに教区報の編集でアップアップだった私は、もはや自分の能力を超えている、もうこれ以上背負えないと思っていました。

けれども一日一日、自分で背負っていたものを下ろして神様にお委ねして床につき、次の日を迎えるといった繰り返しをしているうちに、「私が抱えてしまっては実を結べなくても、いったん神様に手放して戻ってきたものを引き受けていると、大きな働きにつながるのかな」という実感が持てるようになりました。

今週与えられた福音朗読の中でも、弟子たちがよりどころにしていたものは悲しいくらいに貧弱なものだったのですが、それをイエス様が御父にお渡しすると、あっと驚くものになって返ってきたわけです。ここには御聖体の恵みが暗示されています。イエス・キリストが御自分を十字架の上で御父にお渡ししたことで、御父から私たち人類に返してもらったものは、計り知れない御聖体の恵みになったわけです。

誰しも、自分自身の能力や現状を考えると、「なぜ」と思えることがあるのは確かです。その疑問に答えてくれる鍵となるのは、よりどころにしているものをいったん神様に明け渡すということです。神様に明け渡して、そのあと返ってくるときには、答えも添えられて返ってくるのです。計り知れない恵みとなって、返ってくるのです。

留学する山内神父様は、たくさんの勉強をし、たくさんのものを見て、たくさんの人に巡り会うでしょう。長崎教区の為、日本の教会の為に豊かな実りを持ち帰って欲しいと思います。その鍵となるのは、留学期間のすべてを、いったん神様に明け渡して、それから受け取る。ここにあるのだと思います。

年間第13主日(ルカ 9:51-62)

年間第 13 主日（ルカ 9:51-62）

救いであるイエスに出会ったなら前へ、前へ

通常の年間主日が始まり、今週は年間第 13 主日です。イエスに従う弟子の覚悟が問われています。それぞれ置かれている場所で問われる覚悟も違ってくるでしょう。自分の置かれている場所で忠実にイエスに仕えるための学びを得ることにしましょう。

留学なさる山内啓輔神父様は先週イタリアに旅立ちました。遠く離れて、存在を意識させる。それだけでもたいしたものだと思います。小教区を旅する一介の主任司祭は、次の任地に行けば過去の人になるのだろうなぁと思うと、いないのに意識させるのはすごいことです。山内神父様から、壮行会では大変お世話になりました、皆さんにもくれぐれもよろしくお伝えくださいと頼まれました。確かにお伝えしました。

壮行会で主任司祭からも一芸披露しました。山内神父様が喜んでくれたかは分かりませんが、実は私としては不完全燃焼だったので、完成度を高めて、私の霊名のお祝いの時に自分のためにもう一度やりたいと思っております。

皆さんは「NHK こころの時代」で前田万葉枢機卿様がインタビューを受けられて、それが放送されたのをご覧になったでしょうか。枢機卿様は平戸ザビエル教会から東京汐留のカトリック中央協議会事務局長の辞令を大司教様から受けて東京に行くことになった経緯を話しておられました。

「これは相談ですか、それとも正式な辞令ですか？」前田枢機卿様は当時お母様が司祭館で賄いをしてくださっていて、母を残して東京に行くことに大変迷っておられたのでした。けれども「正式な辞令です」と言われて心を決めて前に進んだ、そのような話をしておられました。

前田枢機卿様のモットーは「お言葉ですから網を下ろしてみましょう」です。それは、人間的な経験や知識を超えた何かを求められるときに、イエスに全面的に信頼して前に進みますという覚悟でしょう。カトリック中央協議会の局長から広島教区司教、さらに大阪大司教区の大司教、そして枢機卿と、一般社会で言えば自動車会社に入社してその会社の執行役員にまで上り詰めたようなものです。そのたびに自分の経験や知識を超える任務を前にして、イエスに信頼することでしか、この重責を担えない。前に進むために、あらゆる物を横に置こう。そういう覚悟を決めていったのだと思います。

この覚悟は、そのまま今週の福音の学びになると思っています。福音朗読の前半は、サマリア人から歓迎されない現実が紹介されています。弟子のヤコブとヨハネは「すぐに裁きを下してもらいましょう」と提案しました。経験と知識に照らして、イエスに対するサマリア人の応対は許しがたいと思ったのでしょう。けれどもイエスは、裁きを御父に任せ、前に進むことを選びました。エルサレムでまもなく迎えるイエスの受難と死が、目の前の出来事よりも優先だと考えたからです。御父が御子イ

エスに示す計画に、人間的な判断を横に置いて従ったのです。前に進む力は、御父への全面的な信頼、それだけでした。

福音朗読の後半は、三人の人がイエスに従おうとして、ただしこれだけは認めてくださいと条件を交渉します。些細な事柄もありますし、人間として当然の事柄もありました。けれどもイエスに従っていく、イエスと前に進むと決めたからには、「ただしこれだけは」という条件は一切横に置くべきなのです。

たとえとしてふさわしいか分かりませんが、ラグビーというスポーツは基本的に「前へ、前へ」陣地を進めていくゲームです。下がりながら前に進む、というものではなく、ひたすら前に進むために全員が一丸となります。「これだけは一歩引いて」という戦略は存在しないわけです。ラグビーボールを持つ選手を少しでも前へ進める。一歩でも前へ進める。そのためにすべての努力を注ぎます。

イエスの弟子になる覚悟というのは、たとえるならこのラグビーのようなものではないでしょうか。救い主イエスを、少しでも前へ進める。一歩でも前へ進める。そのための努力を惜しまないのが弟子です。弟子の覚悟です。この使命には、「一歩引いてからそのあと前に進む」という戦略はないのです。救い主イエスの言葉とわざを伝えるために、今は旗色が悪いから譲歩して、形勢が良くなったら一気に行こうとか、そういう戦略は存在しないのです。すべてを賭けて、すべてを置いて救い主イエスの言葉とわざを前へ進めるのです。

当然、置かれた場所で覚悟も違ってくるでしょう。小学生と堅信を受けた中学生でも違うでしょう。けれども置かれた場所でできることを、英雄的な勇気で行う覚悟は皆同じです。食前の祈りを習慣にしている人が、「この場ではこっそりお祈りして済ませよう」そんな戦略をとるべきではありません。常に「前へ、前へ」です。

「隣人を自分のように愛しなさい。」声を掛ければ助けてあげられる人がいるのに、「今日はやめておこう」そういう戦略は、イエスの弟子としてあり得ないのです。常に「前へ、前へ」。そうして私たちの弟子としての覚悟は果たされるのです。

年間第 14 主日(ルカ 10:1-12,17-20△10:1-9)

主日の福音 2019/7/7(No.1011)

年間第 14 主日（ルカ 10:1-12,17-20△10:1-9）

平和があるように

「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。」（10・5）七十二人を派遣するイエスは、収穫のために働き手を送ってくださるようにと願いなさいと命じ、そのあとにこの「平和があるように」と告げなさいと命じます。弟子たちの願う平和とはどのようなものでしょうか。その平和は、どのようにして与えられるのでしょうか。

聖トマスの霊名の祝いを準備してくださって、本当にありがとうございます。今年はこれまで味わったことのない霊名の祝いを迎えました。長崎で頑張っている志願者から、「霊名お祝いカード」が届いたのです。

皆さんからのお祝いが前もって知らされていたお祝いなら、志願者から届いた「お祝いカード」は予想しなかったお祝いの喜びです。田平教会から志願者が出て、こんな嬉しいことが待っていた。神学生・志願者は、故郷の教会にとても大きな喜びをもたらしてくれるようです。

さて、今週説教の冒頭に取り上げた「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。」この挨拶を、皆さんどこかで聞いたことがないでしょうか？もう思い出した方もおられるでしょう。ミサの中で使われています。

ではミサのどの部分で使われているでしょうか。二箇所あります。ふだん聞き慣れている箇所が一箇所と、めったに聞かない箇所が一箇所です。ふだん聞き慣れている箇所は、「平和のあいさつ」の部分で、「主の平和がいつもみなさんとともに」という招きです。このあいさつは、日頃ミサにあずかっている人はなじみ深いでしょう。

もう一つの箇所はどうでしょうか。ここを掘り下げてみたいと思いますが、これは司教様が来た時だけ使われる招きです。黙想会の時の酒井司教様も使っておりました。もちろん私たちの大司教様もお使いになります。どの部分でしょうか？答えは司教様司式のミサの始めです。「平和がみなさんとともに」と司教様が呼びかけます。思い出したでしょうか？

このあいさつは、司教様が用いるミサの招きのあいさつでして、司祭はこれを使うことはありません。この平和は、単に争いのない状態、穏やかな状態を指すのではなく、「満ち満ちた状態」を指し、「神の救いの到来を示す賜物、神が与える贈り物」なのです。

なぜ司教様がこのあいさつを用いて、通常の司祭は用いないのでしょうか。それは、叙階の恵みの違いにあります。司祭の叙階のあとさらに与えられる司教叙階の恵みは、「叙階の恵みの充満」と言われます。平和が「満ち満ちた状態」であるならば、その平和は真っ先に叙階の恵みが満ち満ちた司教を通して与えられるわけです。

みなさんは、司教様のミサに時々あずかることがあるでしょう。司教様の最初のあいさつ、「平和がみなさんとともに」を、今まで意識し

たことがあるでしょうか。もし意識してなかったとすれば、次回思い出してください。私たちは神が与える賜物である平和を、司教様を通していただいているのです。司教様が「平和がみなさんとともに」とあいさつしているとき、神の救いの到来を見ていることになるのです。

司教様司式のミサにあずかる人は、この並外れた恵みにあずかっています。そしてその恵み深いミサは、これまで髙見大司教様お一人でしたが、ありがたいことに補佐司教様が与えられて、より多くの人が「恵みの満ち満ちた状態」「神の国の到来」「神が与える賜物」にあずかれるようになったのです。補佐司教様の誕生で、「叙階の恵みの充満」により多くの人があずかれるようになるわけです。

堅信式、各種の記念行事ミサなど、大司教様と補佐司教様がそれぞれ分担してミサを司式してくだされば、これまで以上に長崎教区の教区民は恵みをいただけるようになります。少し耳の痛い話を言うと、今まで司教様が言っていた「平和がみなさんとともに」にまったく気づいていなかった人にとっても、もっと恵み深いミサになることでしょう。

この平和は、司教様を通して神様から与えられるものです。そうであるなら、私たちは神様から与えられる恵みを、司教様や司祭たちを通してより身近に感じることができます。司教様がおいでになると、遠くからしか見ようとしない人もいるかも知れません。恐れ多いと感じるかも知れませんが、司教様への親しみや尊敬の気持ちを、恵みを取り次いでくださるという気持ちで意識することができればいいなと思います。

「平和がみなさんとともに。」今年 11 月、私たちは教皇様を通して、神の国の到来を告げ知らせる恵み深い言葉を聞くことができるかもしれません。

年間第 15 主日(ルカ 10:25-37)

年間第 15 主日（ルカ 10:25-37）

いのちへの道に導く隣人が必要

年間第 15 主日の福音朗読に「善いサマリア人」のたとえが選ばれました。私たちが本当に助けを必要としているとき、助けてくださるのはイエス・キリストです。そのことを学んで持ち帰ることにしましょう。

お告げのマリア修道会の志願者の皆さんがミサに参加してくれています。すでに典礼奉仕を手伝ってくれています。奉仕の本来の姿を志願者の皆さんは示してくれています。奉仕は本来人にも自分にも喜びを与えるものです。聖書朗読を手伝ったなら、朗読を聞いた人が喜ぶことになるし、きちんと神様の言葉を届けることができて良かったと、自分にも喜びがあります。奉仕は本来こうあるべきですね。

いよいよ私は、瀕死の状態の広島カープのお見舞いに行こうと思っています。これも奉仕です。チームにとっては、はるばる長崎県からのお見舞いを受けて感謝の気持ちが湧くでしょうし、私にも、全力で勝利のためチーム一丸となって戦う姿を見れば何連敗していても喜びがあります。奉仕の精神で、19 日(金)のナイター観戦に行ってきます。

さて物語に登場する人物を、私たちに分かりやすい形に説明しなければなりません。半殺しにされた人は、助けを必要としているすべての人です。私たちも含まれています。私たちは時々道をそれるからです。罪を犯す人は、正しい道からそれていく人なので、導く人、助ける人が必要です。悪口を時々言うだけでも、うそを時々言うだけでも、注意してもらったり戒めてもらったりしないと、正しい道に戻ることは難しいのです。

特に、半殺しにされた人は、そのままでは死んでしまいます。いのちを救ってもらわないといけません。いのちを救ってくれる人が通りかかるのを必死に待っているのです。「うそは言うけれども、だからといって死にかかってはいないなぁ。」そう思っている人もいるかも知れませんが、人はどんなに小さな傷からでも、死ぬ危険があるのです。

次の登場人物に移りましょう。祭司が道の反対側を通りました。道の反対側を通ったこと自体は問題ではありません。ふだん右側通行をする人々は誰でも向こうから見える人と道の反対側を歩いています。祭司とは、神殿の聖所で礼拝を果たす人です。レビ人は、祭司にお仕えして礼拝に協力する人です。祭司は神殿の聖所にまで入る人ですから、私たちのカトリック教会で言えば司祭のことでしょう。レビ人は、司祭にお仕えして礼拝に協力する人ですから、修道者や志願者、神学生と考えて良いでしょう。

司祭は、半殺しにあった人を避けていきました。司祭は礼拝の時間が厳しく決められています。13 日(土)は、朝 6 時のミサがあって、11 時に葬儀のミサがあって、13 時半にこどもたちの赦しの秘跡があって、19 時に主日の前晩のミサがありました。時間の余裕はありませんでした。もし、外に出かけていて帰り道倒れている人を見つけたら、葬式のミサ

に遅れてはいけない、こどもたちの赦しの秘跡に遅れてはいけない、前晩のミサに遅れてはいけないと考えて、立ち止まらないかも知れません。

司祭にお仕えする人も、司祭の予定を考えたら、立ち止まれないと思います。11 時の葬儀ミサが始まるのにオルガンを弾く私が遅れたら大変な迷惑をかける。前晩のミサで聖書朗読を頼まれている私が遅刻したらミサが止まってしまうかも知れない。イエス様の時代は携帯電話もありません。神殿で礼拝を待っている人に「大変なことが起きたので遅れます。でも必ず戻ります！」そんな連絡もできないのです。ですから、物語に登場した祭司やレビ人は、立ち止まらなかったのでしょう。

人間は、それほど弱く力が足りないのです。身体が二つあれば、同時に自分の務めを果たし、道に倒れている人を助けることもできるでしょう。けれどもそれは不可能です。そしてどちらを選ぶかと言われたら、自分の都合を選んで優先してしまうのです。人間には限界があるわけです。けれどもイエス様は、そんな私たち弱い人間に代わって、助けを必要としているすべての人のそばを通ってくださるのです。そうです。「旅をしていたあるサマリア人」とは、イエス・キリストのことなのです。

このサマリア人はその場で必要な手当てのほかに、完全に健康を取り戻して生活に戻れるまでのお世話をしてくださいます。倒れている人のために救急車を呼んで終わりではありません。救急車に一緒に乗り込んで、退院するまでずっとお世話くださいます。助けを必要としている人、特にいのちの危険にある人にずっと付き添って、健康を取り戻し、ふだんの生活に戻れるまで、手を差し伸べてくださるのです。

イエスの弟子である私たちは、当然このイエス様に倣う必要があります。もちろん弱い人間ですし、限界もありますが、イエス様は九十九匹の羊を残して見失った一匹の羊を探し回り、群れに連れ戻す方です。どれくらい見倣うことができるか分かりませんが、イエス様のやり方に合わせよう。今日からそう決めてください。

主任司祭は、いのちの危険にある人が助けを求めているとき、次の予定が入っていたらその人たちに「何分まで待てますか？」と確認して手を差し伸べることにします。最近も二度、青洲会病院に急に呼ばれました。コーヒー飲みかけていましたがすぐに行きました。ビール飲みたかったけれどもすぐに病院に向かいました。

イエス様のなさり方に、今日舵を切ることにしましょう。イエス様のなさり方に見倣う人が一人でも増えるなら、何人ものいのちの危険にある人、罪に縛られている人が、本当の意味で生きる人になるでしょう。私たちも、イエス様のなさり方に倣うことで、本当の意味でいのちを大切にする人に変わることができます。

年間第 16 主日(ルカ 10:38-42)

主日の福音 2019/7/21(No.1013)

年間第 16 主日（ルカ 10:38-42）

イエスと私との間に何も置かない

年間第 16 主日のＣ年は「マルタとマリア」の物語が選ばれました。マルタとマリアの違いから、イエスが考えている「ただ一つの必要なこと」を理解し、信仰生活の振り返りといたしましょう。

最近ムーンデータとタイドグラフが表示できる時計を５千円で買いました。この種類の時計も高いもの安いもの、またメーカーもいろいろですが、カシオのお安いものを買いました。東経 130 度の月の満ち欠けと潮汐が分かるということで、釣り人の私にはうってつけです。

この時計のおかげなのか、最近鯛をきっちり釣って帰ることが多くなりました。ムーンデータとタイドグラフを参考に、釣れる時間なおかつ私が行ける時を狙い撃ちしていることが大きいと思います。月曜日に漁に出かけており、私は食べないので、釣った鯛は修道院か、引退した神父様に届けております。

まぁここまでは普通なのですが、続きがありまして、引退した豊神父様に魚を届けると、気を遣ってあらためてお礼を言いに来るわけです。「今日はありがとう」で済めば良いですが、まず一時間は覚悟しなければなりません。それでも嬉しいです。私に洗礼を授けてくださった豊神父様が来てくださるのですから。時間がかかろうが、話を聞くわけです。

司祭というのはどちらかというと体育会系で、先輩を大切にします。どんなに忙しくても、豊神父様が来てくださった日は話に耳を傾けるのが最優先です。特に珍しい話があるわけではありません。そういう問題ではなく、黙って話を聞くことに、意味があるのです。

マルタとマリアの物語ですが、マルタはいろいろのもてなしでイエスに喜んでもらおうと懸命に頭を働かせています。接待攻勢です。ひょっとしたら箸を休める暇も無いほどもてなしを準備したのかも知れません。もう一方のマリアは、「主の足もとに座って、その話に聞き入っていた」（10・39）のです。イエスの話を聞き漏らさないように、そばを離れなかったのでしょう。

女性が来客をもてなすのは今でも喜ばれる光景です。２千年前はなおさらのことだったでしょう。ただイエスは、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために」（マルコ 10・45）来たと言っておられます。「イエスはお客様扱いすることを喜んでおられるだろうか？」と考えてみる必要があります。

私は初金曜日に、在宅の人を９人、病院に入院している人を７人、土曜日には老人ホーム入所者を６人現状で計 22 人お見舞いをしています。訪ねる人によっては家の中を歩いて回れる人もいるでしょう。けれども主任司祭が訪ねている当人が、聖体拝領の後にいろいろの世話でせわしく立ち働いていたら、「必要なことはただ一つだけである」と言いたくならないでしょうか。

そうなると、マリアの中に、「ただ一つの必要なこと」が表現され

ていると考えるべきです。マリアが心がけていたことは、「イエスのそばから離れない」「イエスのそばでひたすら耳を傾ける」という姿勢でした。

マルタとマリアの物理的な距離が問題なのではありません。マリアはイエスのそばを片時も離れなかった。その姿勢が大事なのです。

イエスをもてなそうと、「最初にこれを準備して、次はこれを用意して、他にもこうして、最後はこうしよう。」頭はフル回転ですが、頭の中のことが思いの中心になっていて、イエスから片時も離れないという姿勢を失っているかも知れません。イエスへの思いはありますが、イエスと自分との間に私の思いや私の用意した物が置いてあるなら、イエスとの距離ができてしまいます。象徴的にイエスの足下に座っていたマリアは、イエスと自分との間に何も置かず、イエスのそばでじっと耳を傾ける姿でした。

私たちは、しばしば祈ります。お酒を飲む人でさえ、食前の祈りをするでしょう。祈りは神と自分との距離を近づけるすばらしいひとときですが、祈りの間でも神と自分との間に私の思いが入れば、距離を作ることになり得るのです。「このお酒は、何県で造られたのだろうか。辛口だろうか。」とても興味がありますし、気になります。けれどもそれは、せっかく祈っているのに「ただ一つの必要なこと」にたどり着けていない祈りなのです。

私たちは神聖な祭りをささげています。「神聖な祭りを祝う前に、わたしたちの罪を認めましょう。」この祈りが無意味なものとなっていないでしょうか。考え事をすればするほど、神聖な祭りで神とより親しくなる機会を、イエスの祭壇に近づく機会を台無しにしてしまうのです。

せっかく、神と親しくなる機会をいただいたのなら、神にその時間を自由に使ってもらい、私たちはひたすら神のなさり方に耳を傾けましょう。神の語られる言葉、神の招きに心を留め、私が何とかして神様を喜ばせましょうなどという無駄な力を取り除きましょう。私たちは神の前に憩い、仕えるために来られた神の自由にもっと自分を委ねるべきです。

マルタは「主よ、何ともお思いになりませんか。」と言ってイエスに同意すら取り付けようとしましたが、イエスが求めている「ただ一つの必要なこと」には近づくことができませんでした。善意で行っていることでも、一旦手を休めてみるべきです。

本当に、主はその働きを必要としているのでしょうか。むしろ「どうぞお話しください。僕は聞いています」（サムエル記上 3・10）と、心の窓をすべてイエスに開いて、イエスが自由に働ける場を用意したいものです。イエスがご自身をささげ、救いの恵みを届けるために、イエスと私との間に何も足さない、何も引かない。そんな気持ちでイエスとの神聖なひとときを過ごしたいものです。

年間第 17 主日（ルカ 11:1-13）

オールインワンが欲しいのですか？

「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」（11・13）このイエスの答えにどこか満足できない人もいるでしょう。そんな皆さんに満足できる説明を探して、私たちが粘り強く祈り、聖霊を与えていただくことを心から願う人になっていきましょう。

夏休みの朝ミサとラジオ体操、本当に来ることができないのでしょうか。朝ミサに来て、ラジオ体操して帰ったら、１日 100 円あげると言ったら来るでしょうか？１日 10 人増えたとして 1000 円､週５日で 5000 円、５週間で 25000 円ばらまけばやって来るでしょうか。そもそもお小遣いで釣るのは私の仕事でしょうか？現状は地域にいるカトリックでない子供達が６人来て、教会の子供が２人です。どう受け止めたら良いでしょうか？

さて女性の皆さんは朝からすることと言ったら何があるでしょうか。多分､お化粧をするのだと思います｡テレビのコマーシャルを見る限り、女性に重宝されるものは決まっています。値段が手頃で、手入れが簡単なものです。「何とかユリさんが会社を挙げて開発しました」とか、「何にもしてないんです。これ以外は」みたいなコマーシャルを見飽きるほど見ます。

そしてたどり着いた決まり文句があります。それが「オールインワン」という言葉です。「これ一本で」「これだけで」そうですね。きっとこれ一個ですべてが含まれていると言われて値段が手頃であれば、誰でも使ってみたいと思うでしょう。ひょっとすると、コマーシャルにも出てみようかなと思ってしまうかも知れません。

「オールインワン」は、それほど魅力的な言葉だということです。まぁここまで言えば、私が何を言いたいかは分かるでしょう。イエスは私たちに、粘り強く願い求めるなら、「オールインワン」を与えてくれるということです。「このように､あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

この世の「オールインワン」を与えてくれる人たちは、手頃な値段で、そこそこ良い物を与えてくれて、バンバン儲かっています。まして天の父は、無償で、与えることのできるすべてが詰まった「オールインワン」である聖霊を、与えてくださるのです。

最近のお化粧品には、「パーフェクト」という単語さえ使われていますよね。「完全」という意味のはずですが、「完全」なのは神以外に存在しません。ですから天の父が聖霊を与えるのは、聖霊が、人間に与える賜物として完全だからです。「これ一つで､他は何もしてません。」どこかで聞いたような言葉。本当にこれ一つで、他は何も必要ない、そんな完全な答え、それは聖霊ではないでしょうか。

天の父が与えてくださる聖霊が「オールインワン」で、「パーフェ

クト」である例を示しましょう。土曜日に私は青洲会病院に呼ばれました。黒島教会の信徒が命の危険にありました。集中治療室にいて、これ以上打つ手がなく、ただ見守るしかない場面で、いやしの賜物を願い、病者の塗油を授けました。少なくとも、これ以上打つ手がない中で、聖霊の恵みが与えていただけるのです。

本来なら、黒島教会の神父様がお世話すべきところでしょう。けれども聖霊の恵みは、違う司祭からでも届きます。聖霊の力、聖霊の働きは、司祭を選ばないからです。これだけでも、「オールインワン」で、「パーフェクト」と言えるのではないでしょうか。

夏休みはいろんな体験を親子で積むのにまたとない期間です。朝のミサに来て、ラジオ体操に参加すれば、天の父が与えてくださる聖霊の賜物に触れる機会を、ふだんよりも確実に増やせます。そう思いませんか？確かにそうだなと思ったなら、毎日とは言いませんが、何曜日に自分たちは家族でミサに行ってラジオ体操しよう。日曜日だけでなく、平日にも聖霊の賜物をいただく機会を作ろう。家族で相談して欲しいです。

「あなたがたのうちのだれかに友達がいて、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ貸してください。

11:6 旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』」（11・5-6）ここでは真夜中ですが、朝６時に大声で頼み事するのも同じことです。友であるイエスは聞き入れてくれなかったでしょうか？必ず聞き入れてくださいます。

年間第 18 主日(ルカ 12:13-21)

年間第 18 主日（ルカ 12:13-21）

溢れるほどの持ち物の中にはないのだから

「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」（12・15）今週のイエスのたとえに思いを巡らすために、この忠告にまず耳を傾けましょう。

それにしても暑いですね。暑さを気にしないようにと思って過ごそうと考えましたが、あるとき勉強部屋にいて気分が悪くなり、首を冷やしました。その時はおかげで少し持ち直しました。あれが熱中症の予兆だったのかも知れません。この暑さです。室内で熱中症にかかる危険も十分ありますから、私がテレビで野球観戦しているところで病院から呼び出しがかかったりしないように、十分健康には気をつけてください。

「フランシスコ」が、８月６日にも長崎県にやって来そうです。驚きました。まさかの「フランシスコ」直撃で、予定が大幅に変更になるかも知れません。いつも通り月曜日の５日には釣りに行こうかなぁと思っていたのですが、「フランシスコ」が来るとなれば、釣りどころではなくなりそうです。話の内容について行けない人は、どうぞついて行けないまま、説教の続きを聞いてください。話が理解できず、どうしても気になる方は、教会役員か、NHK に問い合わせてください。

「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」（12・15）私たちは日本語訳からイエスの忠告を考えざるを得ません。原点のギリシア語聖書を理解できないからです。現状ではフランシスコ会訳か、新共同訳聖書からです。ひょっとしたら他の言葉の翻訳であれば、少し見え方が違うかも知れません。

たとえば、同じ箇所から英語で直訳したものを日本語に戻すと、「人の命は、その人の持ち物の満ち溢れの中にはないのだから」となります。この英語の直訳のほうが、私はピンとくるものがあるなと思いました。私たちは「あなたの命は私の手の中にある」という表現を理解できます。相手が自分の命を握っているという意味です。同じように、「人の命は、その人の持ち物の満ち溢れの中にはない」となれば、「人の命を握っているのは、溢れるほどの持ち物なのではない」という意味でしょう。

この表現で、イエスは何を言おうとしているのでしょうか。突き詰めるとそれは、「人の命を握っているのは神なのだ」ということでしょう。エアコン付きの部屋を持っていても、緊急の時に救急車を呼ぶ非常ボタンを取り付けていても、人の命を握っているのはエアコンでも非常ボタンでもなく、神なのです。私たちの命は神の手の中にあるからです。

私たちは神の手の中にある者として日々生きるべきです。つい先ほど、「母のためにミサをお願いします」と家族がミサを依頼に来ました。初金曜日に御聖体を授けに病人訪問に行ったときのお母さんの様子を伝えました。「病院で長期入院をしているにもかかわらず、私が訪ねていく時間は必ず眠らずに起きて待っています。私が祈りをしているあいだ目を合わせて祈りにじっと耳を傾けます。」

そういうことを話すと、家族の方から「少し前に病者の塗油を受けてから、危機を脱してすっかり良くなりました。神父様ありがとうございました。当時は、いよいよのことも覚悟しなければと思っただけに、回復ぶりには驚いています」と喜んでおりました。

私はこの方の生き方は、神の手の中にある者の生き方だと思っています。確かに病院で入院生活をしていますから、病院のお世話を受けて生きている人です。薬や、さまざまな医療に助けられているでしょう。ただそれらは、言わば溢れるほどの持ち物を意味しています。人の命は溢れるほどの持ち物の中にはないのです。医者でさえ、「全力を尽くしました。最後は本人の気力次第です」と言ったりします。「私の手の中にあります」などと決して言わないのです。

この病人は、初金曜日の聖体拝領を何より大切にしている人です。御聖体を待ち望むその姿勢は、「自分が神の手の中にある」ということを忘れない姿です。中には訳あって御聖体を拝領できない病人もいるでしょう。けれども司祭がやって来て、祝福を受けて、自分が神の手の中にあることを確認するのです。

自分の命がどこにあると考えているのか、その違いで人の生き方は違ってきます。倉を壊してもっと大きな倉に穀物をため込み、持ち物の満ち溢れの中に命を置くのか、この世の持ち物はこの世にいる仲間と分け合ったり施したり、礼拝のためにおささげしたりして、自分をつねに神の手の中に置くのか、大きく違ってきます。神から「愚かな者よ」と呼ばれることだけは避けたいものです。

年間第 19 主日(ルカ 12:32-48△12:35-40)

年間第 19 主日（ルカ 12:32-48△12:35-40）

主人は全財産を管理させる

「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。」（12・42）私はイエスのたとえを、自分自身に当てはめてみました。主人は教区長の大司教様、管理人は主任司祭です。主任司祭は小教区の管理人として選ばれました。主人は管理人が「忠実で賢い人」であることを期待しています。

この前初めて OK ホーム＆ガーデンに行ってきました。家具の取っ手を買ったのですが、レジで古いものを見せて「この古い取っ手の代わりに今回これを買おうと思っています。大丈夫ですよね？」と何気なく尋ねたのです。

するとレジのお兄さんが、「うーん、どうでしょう？」と返事をします。私は内心「どうでしょうはなかろう」と思ったのですが、すぐに放送で「四番レジにスタッフお願いします」と呼び出しをかけてくれました。

すぐに店員が飛んできました。飛んできた店員が面白い。一人は田平教会の青年、もう一人は西木場教会の青年でした。私と知っていたわけではないでしょうが、「よお！」とあいさつしました。こんなこともあるのですね。

イエスがたとえで示したのは、「時間どおりに食べ物を分配させる」ということでした。ここで言われている「食べ物」を小教区で考えると、「秘跡の恵み」かも知れません。「時間どおり」とありますが、必要な時に、ということでしょうか。

洗礼を受けた人が必要な恵みは、おもに聖体と罪の赦しです。ミサを一年通して欠かさずできているかと言うと、これは不十分かも知れません。今週でも、土曜日の朝ミサは都合によりお休みを予定しています。さらにミサの中では聖体拝領だけでなく聖書朗読と説教があります。ミサはみことばの食卓と聖体の食卓とがあるわけです。みことばの食卓に私の説教は十分奉仕しているでしょうか。これも不十分かも知れません。「忠実で賢い管理人」となるために、これからも生涯努力し続ける必要があります。

洗礼を受けた人のもう一つ重要な恵みは赦しの恵みです。私は、ミサの前に告白場に座る時間が少ないと反省しています。どうしても聖堂に行くまでに時間がかかってしまい、赦しの秘跡を後回しにしていると思います。日曜日もそうですし、平日もそうです。

大きな祝い日の前にはまとまった時間を設けます。このまとまった時間は、まずは皆さんのためですが、同時に主任司祭のためでもあります。主任司祭はこの長い時間を使って、自分自身の糾明と痛悔の時間にもなっているからです。どうぞ、利用して欲しいと思います。

祝い日の前の赦しの秘跡に参加する人、また黙想会の赦しの秘跡に

参加する人は、神様が私たちを赦してくださることが恵み深いことだということをゆっくり考える機会にするとよいと思います。私たちは小さなことでもゆるせなかったりしますが、神は私たちを赦すためにご自分の御子さえも差し出したのです。

ですから神の恵みを確実に届ける「忠実で賢い管理人」は、何よりもまず神ご自身です。恵み深いことなのだと、ゆっくり思いを巡らしてみるとよいでしょう。

最後に、「忠実で賢い管理人」に約束された報いは何でしょうか。「確かに言っておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。」（12・44）財産とは何でしょうか。まさか小教区の会計とか、お賽銭とかではないでしょう。「全財産を管理させるに違いない。」全財産とは何でしょうか。

主任司祭には一つの答えがありますが、答えを言わずに終わろうと思います。説教は答えをすべて言うだけが説教ではありません。考えさせ、その人が答えにたどり着いたり、その人が道を切り開いたりするために聖書をひもとき話すのが説教です。

「主人は彼に全財産を管理させるに違いない。」非常に重みのある言葉です。説教の最初に触れたように、教区長が管理人として主任司祭を小教区に派遣しました。「忠実で賢い管理人」に全財産を管理させます。私も、全財産を責任を持って、誠実に管理したいと思っています。

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

主日の福音 2019/8/15(No.1017)

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

現代にあってもわたしは神をあがめる

暑さが頂点まで達するこの時期に、私たちは聖母の被昇天を祝います。「今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう」（1・48）。私たちも「マリアを幸いな者と言う」その人々の一人に加わりたいと思います。

「マリアの賛歌」と呼ばれるルカ 1 章 47 節から 55 節は、前半と後半に分かれると考えられています。前半 47 節から 50 節は、マリアの個人的な体験に基づいています。すなわち、「救い主である神」と「わたし」との関係を述べています。

最初に、どんな流れで「今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言う」のか、確かめておきましょう。「わたしの魂は主をあがめる」「わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」というのは「今」の出来事です。「今」あがめる、たたえるためには、過去に何かがあったはずです。

それが、主の「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださった」という出来事です。主が先に働きかけた、それにマリアが気づいて主をあがめ、たたえます。

「神が先に人に働きかけ、人が神の働きに気づいてたたえる」この昔から続いてきた偉大な出来事を忘れない人たちがいます。イエス・キリストによって救われた人たちです。イエスの時代にいた人々は、イエスを通して「神が先に働きかけ、人がそれをたたえる」そんな場面を目撃したのです。目撃した人たちは神の働きにあずかった人々を未来に向けて「幸いな者と言う」人々です。

未来に向けて「幸いな者と言う」人々は、イエスと同時代の人々だけではありません。「神が先に働きかけ、人がそれに気づいてたたえる」場面は、イエスの復活後も続いたからです。その大いなるわざは使徒たちによって受け継がれ、さらにのちの時代にも引き継がれていきました。

当然、神が先に働きかけ、人がそれに気づいてたたえる場面を目撃する人たちもそれぞれの時代に現れることになります。

1886 年、ラゲ神父様が黒島から三家族、ド・ロ神父様が出津から四家族を横立に移住を促しました。将来の見通しが明るかったから移住を勧めたわけではありません。困難も予想されましたが、田平の地に神様の働きが先にあった。宣教師の神父様たちはそれを感じて信徒に移住を促したのです。

先に移住した人々は、困難を乗り越えてこの地に根を張りました。目に見えない神の働きではあっても、信仰を確かに守り続けることのできる今を神に感謝し、たたえます。やがて神の民は増え広がり、神が先に働きかけて、神の働きに気づいた人々がいたことを後世に伝えるために、聖堂を建設するのです。神の働きにあずかった人々を未来に向けて「幸いな者」と言う子孫たちの歴史は百年受け継がれてきました。「今

から後、いつの世の人も先祖たちを幸いな者と言う」私たちに託された使命だと思います。

先に神の働きがマリアに現れました。マリアは神の働きに気づきました。そして神をあがめます。神の働きにあずかったマリアを幸いだと理解できる人は、自分の生活の中でも先に神が働きかけ、神をあがめるきっかけを与えてくださっていると気づくのです。

あとは、私たちが神の働きにどのように答えるかです。同時に神の働きに答えて神をあがめる素晴らしさを、どのように受け継がせるか考える必要があります。マリアの賛歌を、私はどのように神をあがめ、神の救いを喜びたたえたら良いだろうかと思い巡らしながら唱えましょう。今を生きる私たちが、神をあがめるマリアの生き方を写し取らなければ、信仰が次の世代に受け継がれることは難しくなります。

年間第 20 主日(ルカ 12:49-53)

年間第 20 主日（ルカ 12:49-53）

火を熱源として持つなら分裂も乗り越えられる

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」（12・49）今週は、イエスがこの地上に投げる「火」について、考えてみたいと思います。

イエスがもたらす「火」を考えるために、「火」についてすでに知っていることをつなぎ合わせたいと思います。まず、「火」は燃えている状態を指しているので、触れようとするものを燃やす力を持っています。海外では、山林で自然に発火し、火災が発生することがあります。

また、火を使って、物の形を変えることができます。鉄は、火によって熱せられ、ものすごい温度の溶けた状態から、いろんな形に変わっていきます。刀を作る鍛冶職人は、火を使って思い通りの刀を作り上げます。

また火は、熱も持っていますので、近くにいる人から遠くにいる人まで、熱を伝えます。適切な距離にいれば、熱の恩恵を受けますが、近すぎるとやけどします。その他にもあるかも知れませんが、おおまか、こうした特徴を火は持っているわけです。

今挙げたような特徴を当てはめて、イエスがもたらす「火」を考えてみましょう。イエスが投ずる「火」には、触れようとするものを燃やす意味合いはあるでしょうか。聖書の出来事を探ってみましょう。

まず思い出されるのは、聖霊降臨の出来事です。使徒言行録第 1 章で、聖霊が弟子たちに注がれた時、炎のような舌の形をして、弟子たちに聖霊が降ったとされています。

ここでは、ものを燃やす火ではありませんが、弟子たちの心を燃やして、宣教へと駆り立てる火として働いています。イエスの投ずる火は、人の心を燃やす働きがあります。

また、物の形を変える火の働きはどうでしょうか。ここでは、いくつかの秘跡を考えてみましょう。洗礼の秘跡は、人を神の子とする働きがあります。また堅信の秘跡は、洗礼の恵みを強め、聖霊の七つの賜物で大人のカトリック信者に強めます。さらに叙階の秘跡は、もう一人のキリストと言われるほど、叙階を受ける人をイエスの生き方、働き、恵みを人々に分け与える者に変えます。

ここまで考えると、イエスの投ずる火は、秘跡の恵みとなって人を今までとは違った存在に変える力を持っていることが分かります。他のどんな力も、人を神の子に変えることはできません。イエスが、「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」と仰ったことは、秘跡の中でとくに当てはまります。

火は、同時に熱も伝えることを考えました。イエスが投じる火に、同じ特徴は見られるでしょうか。イエスによって火が投じられ、その火によって変えられた人が、だれかにその熱を伝えることができます。近くにいる人はより大きな熱意を伝えますし、遠くにいる人にも、何が起

こっているのか知りたいと感じるような熱意を伝えることができます。イエスの投ずる火は、熱を伝えることにも当てはまっているのです。

ところで、イエスが投ずる火は、「分裂」をもたらすことにもなると仰います。この「分裂」は、熱を伝えるたとえを考えると少し分かりやすくなるかもしれません。もし、家族の中でイエスの火によって熱意を与えられ、イエスに変えてもらった生活に喜んで身を置く人と、そうでない人がいるとしたらどうでしょうか。

イエスの火を受け入れた人は、熱心にイエスの生き方を取り入れていきますが、同じ家族の人がイエスの火を耐えられない熱さだと嫌うなら、そこにはどうしても分裂が生じてしまうでしょう。

分裂は、イエスの火を喜んで受け入れるか嫌うかで生じます。イエスは、分裂が生じることを予見しています。イエスの火を嫌って、分裂した人々はどうなるのでしょうか。とくに家族の中で、分裂してしまった場合はどうなるのでしょうか。

わたしは、イエスの火を受け入れるために、長く時間を必要とする人もいると考えました。家族の中でさえ、今はイエスの火を受け入れられない人が現れて、分裂してしまいます。けれども、イエスの火はどんな人にも必要な火です。その人の中で熱源となって、その人を動かすからです。

私の知っている家族は、純心高校に通ったことでお嬢さんが先に一人だけ洗礼を受けました。その人はのちにシスターになりました。長い時間をかけて、父上が、母上が、最終的には弟さんが、洗礼を受けました。イエスの投じた火が、その人を長い長い時間かけて温めました。その間親子の関係は分裂に見えたかも知れませんが、最後は家族のすべてに必要な火だったと理解できたのです。

今は受け入れられない家族がいても、時間をかけて、イエスの投ずる火によって、変えられ、動かされることを願いたいと思います。「父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、対立して分かれる。」（12・53）とあります。分裂は辛い現実ですが、距離ができたことが、イエスの火を理解できるきっかけになるかもしれません。

わたしたちの心と体は、イエスの投ずる火によって神の望む形に変えられ、イエスの火が自分を動かす熱源となります。イエスの投ずる火によって生かされていることに感謝できる人でありたいと思います。そして、周りの人にイエスを感じさせる熱源となれるように、このミサの中で祈り求めましょう。

年間第 21 主日（ルカ 13:22-30）

私の召命どこへ行くにも「片道切符」でした

イエスは一同に言われた。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」（13・23-24）イエスはご自分に従おうとする人々に覚悟を求めます。「狭い戸口から入るように努めなさい」という呼びかけが覚悟を求めるものであるなら、各自が自分に当てはめやすいたとえで、覚悟を問うようにすると今日の福音もより深く理解できるはずです。

ごく最近を含め、生涯記憶に残る忘れ物事件が三度あります。いちばん近いものから始めます。8 月 21 日の田平町ナイターソフトで珍しく「ホームラン」と「二塁打」を打ちました。第一打席も出塁したので「ナイスバッティング」ならぬ「**ナイスバット**」だったわけです。本来ならこのまま鼻を高くして日曜日の説教の「小ネタ」にできるわけですが、その殊勲のバットを試合後にグランドに忘れてきてしまいました。

不安になり取りに帰ろうかと思ったのですが、すぐに戻れば「忘れ物」と気づかれます。それが嫌で、グランドに残っている人がいないか期待して、メンバーの一人に電話をかけました。この人もグランドをあとにしていましたが取りに行ってくれました。愉快な話が水の泡です。

二つ目は、先週のリュックサック事件ですね。侍者を連れて天草の教会巡礼旅行に出かけたときのことです。車三台に分乗して、島原の口之津からフェリーで車を運び、天草の鬼池港に渡し、上陸後一時間走った場所に崎津教会があります。渡辺主任神父様の貴重なお話を聞き、信徒会館をお借りして昼食を取り、教会を背景に集合写真を撮りました。

帰りながら、岬に立つ聖母を眺め、大江教会では純心聖母会のシスターに教会の説明をしてもらい、最後に大江教会のふもとにある「ロザリオ館」という資料館を訪ねて鬼池港に戻りました。順調にきた旅行日程でしたが、一人が「リュックサックが見つからない」と言い出すのです。目の前のフェリーに乗り込もうという時に忘れ物です。話の流れでお気づきかと思いますが、リュックを忘れたのは子供ではなく、**中田神父**であります。

ロザリオ館の職員に電話してみますが「見つからない」との返事。大江教会のシスターに連絡するも「ないですね～」と力ない返事。シスターは自分のことのように心配してくれて崎津教会にも電話連絡。「崎津にもありませんでした。」15 人の巡礼グループのうち 13 人はフェリーに乗せ、あきらめが付くまでと中田神父と同伴の典礼委員長で来た道を引き返しました。

そこへシスターから電話。「崎津では集合写真か何か撮りましたか？玄関先に無造作に置いてあったそうです。今は預かって、ロザリオ館の前でお渡しできます。」これからはシスター方と天草に足を向けて寝ることはできなくなりました。

最後は、大学生時代。慶応大学の通信の学生だったので、夏のスク

ーリングで神学校が提携している「トマス寮」に下宿していました。その年のスクーリングも無事に終了。大きな荷物は宅急便で先に五島に送って手ぶらで仲間の神学生と新宿駅に向かいました。何とそこで私が長崎までの特急券と乗車券がないと言いだしたのです。

隅から隅まで身体を探りましたがありません。結局、同僚にもお金を協力してもらい、再度購入する羽目に。実家に帰り、恐る恐る宅急便の箱を開けると、そこにＪＲの切符が入っていました。この片道切符は今も記念に残っています。

つねに私の旅行は「片道切符」でした。召命の道も、片道切符でした。前もって往復を用意していても、「復路」は何も分からない旅でした。忘れ物事件もそのことを痛いほど教えてくれています。「つねに片道切符だと思って目の前のことに集中しなさい。」そういう注意を与えてくれていました。

神学校時代、何度も五島から長崎行きの二等フェリー切符を買いました。片道切符でした。大神学校に行くとき、長崎博多間の片道切符を買いました。初めて赴任した浦上教会、その後転任していった教会、現在の田平教会。すべて、後戻りのできない「片道切符」で赴任しました。どんなに過去が懐かしくても振り返らず、片道切符を握りしめて、行った先で結果を出す。それが私の召命の道でした。

すべての人に召命の道があります。後戻りを考えてしまうと、召命は完成しません。つねに片道切符のつもりで、励む。これが、中田神父が考える「狭い戸口から入る」覚悟です。

あなたはイエスに従っていく覚悟を、どのようにたとえるでしょうか。人に話して聞かせることができるくらいに要領よくまとめると、それはあなたの宣教の道具になります。

年間第 22 主日(ルカ 14:1,7-14)

年間第 22 主日（ルカ 14:1,7-14）

お返しのできない人が近くにいるはずです

「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。」（14・12）人を呼ぶことが喜びという人もきっとおられると思います。誰をもてなすことが、イエスの歩いた道に叶うのか考えましょう。誰が私にとってもてなす人かが見えてくると、私が本当に使うべき時間やお金も見えてくると思います。

わずかの時間ですが、実家で夏休みを過ごしてきました。上五島で赴任していたとき、車で走って 30 分の距離でしたが、そんな赴任時代でも、実家に長期滞在することはありませんでした。上五島に赴任していたときは「泊まって帰れば？」としばしば言われましたが、晩ご飯を食べて帰ることが多く、なかなか泊まって帰りませんでした。

理由があります。赴任している教会で何事かが起これば、すぐに駆けつけなければなりません。それを考えると戻っていたほうが都合が良かったわけです。むしろ今のように、実家を離れたところに赴任しているときのほうが泊まって帰るので喜ばれます。それでも年に三回も四回もは顔を出せないのが実情です。

家族の誰かをおささげすると、現実的にはこのような体験を受け入れなければなりません。たまに実家に帰ってきて、泊まってくれるのは嬉しいわけですが、すぐトンボ返りしてしまいます。それなのに家族はつねに「向こうで頑張りなさい」と送り出してくれます。その思いを背負って、派遣された教会で、皆さんが家族と思って働いています。目に見える形では家族に孝行できませんので、派遣された教会の人々を家族と思って、司祭にできるお世話をしています。

今年最初の帰省でしたが、田平教会で元気にしているところを見せることができて良かったと思っています。司祭や修道者になると、家族は近くて遠いと実感します。置かれた場所で出会う人が家族です。病人を見舞いながら、年取っていく親のことを思い出して、親に接するように接してあげたいし、兄弟同士励まし合うことを思い出して、可能な限り人々を励まし続けます。五島の家族にできないことを、なるだけ赴任先でできたらなぁというのが私の思いです。

「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。」（14・12）イエスが招いた人々はお返しのできない人々でした。「むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」（14・13）

体が不自由でなければならないとか、そういうことではありません。お返しのできない人を、あなたたちはもてなしなさいと言っているわけです。たとえば命に関わる場面でお世話をすることは、お返しのできない人にもてなしをしたことになると思います。

人を神の子とする洗礼の秘跡、命の危険にさしかかっている人を強め励ます病者の塗油、決して誰にも打ち明けられない罪を赦す赦しの秘跡。これらの秘跡を執り行うことは、お返しのできない人をイエス・キリストの身分でもてなすことになります。司祭は秘跡を通して、お返しのできない人と向き合うことができます。

信徒はどうでしょうか。信徒も、お返しのできない人をもてなす方法を考えなければなりません。「放蕩息子のたとえ」が役に立つでしょう。「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」私たちの身の回りに、教会とのつながりがなくなって、生きているのに死んでいる状態の人、教会とのつながりを諦めてしまって「いなくなっている人」がいないでしょうか。彼らを教会との交わりに連れ戻すことが、信徒の皆さんにとってお返しのできない人をもてなすことになります。ほかにも、海外への支援も、お返しのできない人へのもてなしにつながります。

私たちは、イエスの呼びかけに柔軟に対処すべきです。「むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」そう言われて何も考えが及ばないというのは、柔軟さが欠けていると考えるべきです。イエスの言葉が今日も生きるために、私たちはイエスに遣わされた者として生きているのです。イエスの言葉を現代によみがえらせる。これが私たちにとっての「お返しのできない人をもてなすわざ」です。

年間第 23 主日(ルカ 14:25-33)

年間第 23 主日（ルカ 14:25-33）

持ち物を一切捨てるのはたやすいことではない

「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」（14・27）「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」（14・33）イエスの言葉が歳を重ねるごとに重みを増してきます。歳を重ねても身軽になり、イエスに付き従うことを最優先したいものです。

高校野球にちょっと興味のある方は、清峰高校の元監督が、現在山梨学院大附属高校の野球部の監督を務めていることはご存知でしょう。この監督がなぜ高校を移ったのか、事情は知りませんが、環境が大いに変わったことは間違いありません。かつては長崎県内のライバル校がどこで、相手の長所短所よく知っていたでしょう。県内の有望な中学生も把握していて、数年後のチーム構想を練るのも難しくなかったでしょう。

何より、今現在のチームの状態を把握するのにも、これまでの積み重ねで生徒の力を発揮させる方法も見えていたでしょう。それが学校を変わる、しかも他県に移ると、すべてを手放さなければならなくなります。ふつうなら、今まで育ててきた選手を置いて、新しい学校の選手を育ててみようというのは、冒険の域を超えて危険ですらあります。

例えとして、長崎県民によく知られた監督を使ってみましたが、今週の福音朗読の結びにある「だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」という招きは、先の監督が経験したくらいの環境の変化を言っているわけです。

自分の持ち物を一切捨てると言っても、例えば県内の別の高校の監督に就任するというのであれば、清峰高校の野球部選手も含め、自分の手の内にあるようなものです。けれども九州も離れ、他県に行く。これくらいの行動であれば、自分の持ち物を一切捨てる行動でしょう。同時にそれは、これまで背負っていた物が一切無くなるのですから、より確実に、「自分の十字架を背負ってついて来る」自分の十字架を背負ってイエス・キリストについて行くことも可能になるのだと思います。

「私と私の後継者に、尊敬と従順を約束しますか」「約束します」1992 年の 3 月 17 日、司祭叙階式の中で島本大司教様に返事をしました。この約束はこれから自分の十字架を背負いますという約束と言っても良いでしょう。この日から背負い始めた自分の十字架は、今は背負い始めたときよりもはるかに重く、責任あるものになりました。

最近特に思うのは、転勤しても「前任地の知識も含めて積み上げた財産があり、新任地で働くために役に立っている」ということです。田平教会は献堂百周年を去年迎えましたが、皆さんには初めて経験した百周年かも知れませんが、私は二度目でした。以前の経験が、ある場面では役に立ち、ある場面では足を引っ張ったかも知れません。

「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人とし

てわたしの弟子ではありえない。」私にとって、このイエスの言葉は歳を重ねるごとに難しくなっています。難しくても、いつかイエスの弟子となれるように、自分の持ち物を一切失ってもそれで自分がイエスに自由に従うようになれるのであれば構わない。そういう心境に達したいと思っています。

年間第 24 主日(ルカ 15:1-32△15:1-10)

年間第 24 主日（ルカ 15:1-32△15:1-10）

人間の常識を超える神の忍耐

今週の福音朗読は、長い朗読を選ぶと「放蕩息子のたとえ」までが含まれます。今回は、短い朗読を選んで朗読しました。ルカ 15 章の三つのたとえを通して、見失ったものを辛抱強く捜し回る神の姿、忍耐強く立ち返りを待つ神の姿が描かれています。

神の忍耐について考える前に、人間の忍耐について考えてみましょう。人間は、どこまで忍耐できるものなのでしょうか。どこまでだったら辛抱できるのでしょうか。一般的には、常識の範囲であれば忍耐するし、辛抱もすると考えます。

しかし限界を超えると忍耐できなくなります。私は未だに後悔する場面があって、大切なものが録音されている私のカセットテープを、四男の弟がカセットデッキで再生させていて、多分テープが機械に巻き付いたのだと思いますが、大切なカセットテープから茶色のテープを机に引き出して広げていたのを見たのです。

カセットテープから引き出されて机に広がるテープを見て、このテープは二度と使えなくなったと思った私に怒りがこみ上げ、私は四男の頭をこれでもかと殴ったのでした。何発も殴ったので、頭には何個もこぶができるほどでした。私はあとで親にひどく叱られましたが、四男の弟をどうしても許せなかったのです。もちろん今は和解しています。

これが、人間の忍耐とか辛抱の限界だと思います。限界を超えることがあると、もはや忍耐できない。常識の範囲でという制約や、限界があるのが人間の忍耐というものです。一方で、神の忍耐を教えるのが今週の朗読箇所であるルカ 15 章です。私の体験を踏まえて考えるなら、常識を超える忍耐を示す、限界を置かずに忍耐し待ち続ける。これが神の忍耐の姿だと分かります。

人間の常識で考えれば、九十九匹を置いていなくなった一匹を捜しに行くのは割に合わない行動です。銀貨を一枚見失っても、家を引っ越しでもしない限り、そのうちに見つかることもあるでしょう。家中を掃いて捜すのは労力の無駄のように思います。弟を無条件にゆるす父親に対して、人間の常識だったらこう反応するだろうと登場しているのが兄です。人間は、やはり人間の常識の範囲でしか行動しないものなのです。

けれども神の忍耐は人間の常識を超えます。なぜ人間の常識を超えて行動するのでしょうか。それは、人間が本来の輝きを取り戻すために行動するからです。途方もない罪を犯した人でも、人間本来の輝きを取り戻すなら、その人は生き返るはずです。けれども人間は常識にとらわれてしまい、途方もない罪を犯した人に猶予を与えることなどできないわけです。

私が、途方もない罪を犯したなら、相手に「輝きを取り戻すまで猶予をください」とはとても言えません。処分されるのは当然で、相当の罰を受けてしかるべきだと考えるからです。実際「放蕩息子のたとえ」

に登場する弟は、僕の一人になることすら覚悟していたのです。人間の常識の範囲で行動していたのでした。

人間の常識の範囲で救えない人がいます。常識を超えた行動でなければ、その人の本来の輝きを回復できない場面もあり得ます。けれども人間が常識を超えて行動することは難しいのです。常識を超えた行動を示す神が、先にお手本を示して、人間はようやく神のなさり方を知ることになるのです。

実はすべての人間が、常識を超える神のなさり方によって救われたと言って良いでしょう。ですから互いに、「こんなことはゆるされるはずがない」「こんな人が立ち帰りの努力をしても受け入れはできない」という常識を打ち破る覚悟を持ちたいのです。人間には不可能ですが、神は常識を打ち破る恵みを注いでくださいます。

年間第 25 主日(ルカ 16:1-13△16:10-13)

年間第 25 主日（ルカ 16:1-13△16:10-13）

イエスを得ようとして友を作ってきたか

「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。」（16・1）イエスのたとえ話の中に、神のあわれみをよく説明してくれるルカ福音書の中で「不正な人」が登場するのはここと「やもめと裁判官のたとえ」です。神のあわれみを説明するのに、不正な人をイエスが引き合いに出すということが、私には非常に興味深いです。

中村補佐司教様の叙階式、参加されたでしょうか？参列者があまりにも多くて、立錐の余地もないくらいでした。聖堂内に入ることができたとしても、通路や座席のさらに後ろで三時間立ちっぱなしでミサにあずかった人もいるそうです。それだけ期待されているということでしょうが、なかにはあっと驚くことをしてくれるのではないかと、半分怖いもの見たさでやって来た人もいるのではないかと思っています。

すべてを種明かしすることはできませんが、叙階式ミサが終わって場所を移動し、祝賀会の中で中村倫明補佐司教様の本性が現れました。17 年前に髙見大司教様が補佐司教として司教叙階された際に余興で中村倫明当時の神父様が使った小道具を、今度はご自分の叙階式の祝賀会に持ってきていました。

私は、教区の牧者である司教の連続性と言いますか、継続性をそこに見た感じがしました。懐かしい太田尾小教区の皆さんも含め、たくさんの人が司教叙階式と祝賀会を盛り上げてくださったと思います。

中村補佐司教様の感謝の言葉を最後に聞くことができました。聖書の「宴会を催す時には」という場面を引用したあいさつでした。ちょうど９月１日、年間第二十二主日の朗読箇所です。聖書の中では、「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい」（ルカ 14･13）とあるのですが、中村補佐司教様はこれにヒントを得て、「実は私が、お返しのできない者なのです。お返しのできない人を招いてくださったのは皆さんなので、皆さんこそ、幸いな人々なのです」と結ばれたのです。とても印象深いあいさつでした。

私は、中村補佐司教様の導き方が、あのあいさつの中に込められているのかなぁと思いました。教区で働く司祭、修道者、信徒が、誇りを持って働く。前を向いて働く。そのような気持ちにさせるために、補佐司教様は私たちを案内してくれるのだと思います。

さて今週の朗読に登場する不正な管理人は、素早い反応、主人をうならせるような行動を期待されています。「会計の報告を出しなさい。」（16・2）期間はどれほどでしょうか。小教区の予算決算書の提出書類が届くのはおよそ三ヶ月前です。実際に予算決算書を作成するまでには二ヶ月しかないと考えるべきです。

それからすると、このたとえ話に登場する管理人にも、二ヶ月程度しか時間の余裕はなかったかも知れません。この二ヶ月の間に、今後自

分が生きていけるような道を切り開かなければなりません。同時にそれは、これまで雇ってくれた主人をうならせるような画期的な方法である必要があります。主人をうならせるような方策でなければ、これまで主人にお世話になって生きている人のところに転がり込もうとしても、「主人に睨まれたら生きていけないので、あなたを迎え入れるわけにはいかない」とつれなくされることでしょう。

ここで管理人は抜け目のないやり方を考え、実行するわけですが、ここで私は中村補佐司教様のあいさつで触れた聖書の捉え方を思い出しました。宴会を催す時、お返しのできない人を招きなさいとイエスが言われ、そのお返しのできない人に、まったく思いつきもしない視点を紹介してくれました。お返しのできない人とは、今日司教叙階を受けた中村補佐司教様だという視点でした。

私も同じようなことを考えます。イエスは今週のたとえ話の中で次のように言いました。「そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」（16・9）

私たちを永遠の住まいに迎え入れてくれる「友」とは誰のことでしょうか。主人に油を納めている小作人でしょうか。小麦を納めている小作人でしょうか。むしろ、それらを通して何とも抜け目のない奴だと褒めた主人の心が、管理人が生きていくことを可能にする唯一の「友」なのではないでしょうか。どこに行っても主人の息がかかっています。その中で生きていける方策を、短期間で不正な管理人は考えたのです。

私たちも、いざという時、短期間で永遠の住まいに迎え入れてもらえる方策を考えなければなりません。それは同時に、父なる神をうならせるものでなければなりません。どんな方策が両方を満たすでしょうか。私は、「イエスを友とする方策」これ以外に答えはないと思うのです。

「不正にまみれた富で友達を作りなさい。」友達を作っても、この世界のどこにも父なる神の息のかかっていない場所はないのです。ですから自分が出会う人を友達とする中で、その都度イエスという「友」を作るようにしなければならないということです。あなたは多少なりとも「友」を作ってきたでしょう。その友との間に、イエスを手に入れてきたでしょうか。これが「不正にまみれた富で友達を作りなさい」という呼びかけの唯一の解答なのだと思います。

この世の出会いは変化し、移ろいやすいものです。長く続かない友人もいるかも知れない。仲良くなった時の何倍も憎み合って別れるかも知れない。けれども、いずれの友を得ようとした時でも、友を通してイエスを得ようとしてきたでしょうか。イエスを得ようとしてきた出会いであれば、この世ではまったく不毛だった友でも、天の国に迎えられる根拠に選ばれるかも知れないのです。

イエスを得ようとして出会った友が、私たちを永遠の住まいに迎えてくれるのであれば、この世でどんな結末を迎えようとも、感謝できる出会いに違いありません。

主日の福音 2019/9/29(No.1024)

年間第 26 主日（ルカ 16:19-31）

その生き方は父なる神の目に留まりますか

年間第 26 主日Ｃ年の福音朗読の頃は、決まって司祭団のソフトボール大会があっているようです。三年周期の主日の福音朗読を遡っていくと、大会直後は見事に金持ちとラザロの例えが朗読されています。まるでソフトボールの報告会をしなさいと言っているかのようです。

その司祭団ソフトボール大会ですが、４チームが出場しました。長崎からは、優勝を狙った選抜Ａチームと、「その他」の神父様で構成するＢチーム、上五島下五島合同チーム、佐世保平戸合同チームの４チームです。一回戦は第一試合が佐世保平戸チームと五島チーム、第二試合が長崎ＡチームとＢチームでした。ここで勝ったチーム同士で午後は決勝戦、負けたチーム同士で三位決定戦が組まれます。

第一試合に出た佐世保平戸合同チームは五島チームと対戦し、練習をたくさんしたのであっという間に５対０とリードしました。「楽勝か？」と思ったのがいけなかったですね。試合は６対６の引き分けになりました。午後のために優劣を付けなければなりませんが、何と大会本部が「全員、打順で並んで、相手とジャンケンしてください。勝った人の多いほうが午後の決勝戦に回ります」と言うのです。運悪く、ジャンケンに負けてしまい、私たちは三位決定戦に回りました。

第二試合は長崎同士の対戦でした。まぁ、優勝を狙っているＡ選抜チームが順当に勝ちました。午後は第三試合が佐世保平戸チームと長崎Ｂチームで三位決定戦、最後の第四試合が長崎Ａ選抜と五島チームで決勝戦となりました。三位決定戦で佐世保平戸チームは奮起し、「ヒットヒット、ホームラン」「ヒット、ホームラン」「満塁、ホームラン」みたいな感じで 21 対 7 で大勝しました。私も流れに乗ってホームランを打ちたかったのですが、２塁打止まりで、６打席３安打に終わりました。

最終結果はどうなったか？決勝戦に残ったチームが優勝と準優勝です。長崎Ａ選抜が２戦全勝で優勝は当然ですが、五島チームはジャンケンで勝ち上がって決勝戦負けたので、１敗１引き分けなんですよね。それからすると三位決定戦で大勝した私たちは１勝１引き分けで三位。これには何となく不満が残りました。

今回私は初めてのポジションを守りました。キャッチャーです。何をするかというと、「締まっていこう」「おー、ワンナウト」「セカンド行くぞ」など声を出すことと、得点に絡む場面でホームを守るということです。声出しは必死にやりましたが、ホームでランナーをアウトにはできませんでした。

キャッチャーを初めてやってみて、困ったことがありました。メガネをかけてキャッチャーマスクをかぶるのは相当難しかったです。帽子までも邪魔になって、マスクがうまくかぶれません。そのうち帽子が邪魔になって、帽子を脱いでマスクをかぶりました。すると、大会終了後に何人かの先輩や神学院の院長をしている同級生から言われたのです。

「お前、ちょっと頭見せてみ？あの暑い中、帽子かぶらずにマスクして、てっぺんに十字架の焼き印が付いてないか？」あれは心配して言ったのではなくて、きっと冷やかしで言っていたのだと思います。

ただ嬉しかったのは、必死に声を出してキャッチャーをしたことが、味方だけでなく相手チームや試合に関わっていない司祭たちの目にも留まっていたということです。正直に言いますと、私は今回どのポジションであっても「うるさい」と思われるくらいに声を出すつもりで乗り込んでいました。長崎市内の信徒の方が応援に来ていて、「あー、中田神父があそこにいるな」と意識させたかったのです。

観戦している人はどんなにか「うるさい」と思ったことでしょう。それでも、大声を出し続けました。私は応援の人を自分の意識から排除するために、大声を出していたのかも知れません。その甲斐あってか、最終打席はいちばん試合に集中できて、2塁打を打つことができました。

「この回押さえていこう！」私の叫び声はチームメートからも浮いていたかも知れません。それくらい大きな声を出して、できることを全力で果たしました。今年、ホームランは打てませんでしたが、やり切ったと思っています。

ここまで福音朗読にまったく触れなかったのですが、今回一点だけ触れたいと思っています。「その生き方は、父なる神の目に留まりますか？」ということです。金持ちで、毎日贅沢に遊び暮らした人は、父なる神の目に留まる生き方をしないで死にました。

一方、できものだらけのラザロは、金持ちの門前で野垂れ死にしましたが、日々、神の憐れみにすがって、神の憐れみが金持ちを通して与えられたらと願いながら最期を遂げました。いつも、片時も忘れずに神の憐れみをこい求めていたラザロは神の目に留まり、アブラハムの懐に迎えてもらったのです。

人それぞれ、置かれた環境で神の目に留まる生き方をどう実践するか、違いがあるでしょう。金持ちも、毎日贅沢するほど豊かであれば、お返しのできないラザロや同じような境遇の人に惜しみなく施すこともできたはずです。一度でも「私の生き方は、父なる神の目に留まる生き方だろうか」と考えたなら、事態は違っていたでしょう。

今回私はキャッチャーという初めてのポジションを言われて、応援の観客も、相手チームの雑音も、バッターボックスの打者も、すべて追い出すくらいに声を張り上げました。それでやっと、自分の務めを果たせたのです。人の目に留まるためではなくて、人の目も雑音もすべて追い出した時に、仕事ができたのでした。

私たちも考えましょう。今の生き方は、父なる神の目に留まる生き方でしょうか。その生き方を、どんな雑音を耳にしても曲げずに貫けるでしょうか。雑音を追い出せるでしょうか。あなたの生き方を見た誰かが見えない神を捉え、「神の目に留まる生き方をこの人は貫いている。私もその生き方を見倣いたい」と考えるでしょうか。どこに置かれても、神の目に留まる生き方を追い求める人でありたいのです。

年間第 27 主日（ルカ 17:5-10）

あなたにもいつか本物の信仰が必要になる

「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」（17・6）からし種にたとえられた信仰を、今週は掘り下げてみましょう。私たちにも、あっと驚く行動を起こさせる「からし種一粒ほどの信仰」があるでしょうか。むしろ「からし種一粒ほどの信仰」を見つけて帰ることが、今週の課題だと言えます。

古い話ですが、私の父が生きている頃、父は刺身を食べるのに、唐辛子を箸でこさいでしょう油に落として食べていました。小学生だった私に「試しにやってみるか？」と勧められて刺身を食べると、あまりの辛さに魚を口から出すほどでした。それを見て父が笑っていた、そんな記憶があります。

それから何年かして父は船で指を機械に巻かれ、障害が残ったので船を降りて牛を飼い始めました。牛は藁を食べると当然糞をします。その糞を乾かし、袋詰めにして販売します。この袋詰めを、中学生の頃から手伝わされていました。すべての糞を処理できるわけではなく、一部は場所を決めて捨てていたのです。

その、糞を捨てる場所のそばに、唐辛子が植えられていました。畑と山を開墾して作った牛の放牧場だったので、唐辛子を植えていた場所だったのでしょう。残り物の糞を捨てるそばにあった唐辛子は、いつの間にかピーマンのように育っていました。そして何を思ったか、私はそのピーマンの大きさの唐辛子をちぎって、食べてみたのです。

唐辛子が、ピーマンになれるはずがありません。食べたら火の出るような辛さでした。誰も見たことのない大きな唐辛子。唐辛子がピーマンのように育つことに、素直な驚きと発見を味わったのです。あっと驚く成長、誰も見たことのない巨大な実を、父が亡くなった今でも覚えています。

さて福音朗読、使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」（17・5）と願いました。私たちは腕を磨いたり技術を向上させたりという経験を皆持っていますが、使徒たちが考えていた「信仰を増してもらう」ということも、何か経験の積み上げやより大きな信仰に取り替えてもらうような感覚だったかも知れません。

しかしイエスの答えは、小さなからし種に示されると言います。完全にすりつぶした辛子のチューブではなく、ほんの少し種が残してある辛子のチューブをご存知でしょう。あの小さな種に、イエスの考える信仰は示されるというのです。

私たちはどうかすると、大きい力があれば大きいことが成し遂げられると思いがちです。けれども他方で、小さな力が、大きな事を成し遂げることも知っています。車のタイヤを破裂させるのは

タイヤを半分に切ったからではなくて釘一本が開ける小さな穴です。仰向けになっている人を押さえつけるのに大げさな道具は必要ありません。おでこを指一本で抑えるだけで、どんなに大男でも押さえつけることができるのです。「からし種一粒ほどの信仰」とはそういうことでしょう。

私はたまにピーマンを見ると、「これはひょっとしたら唐辛子なのではないか？」と思うことがあります。実際にはあり得ないことです。あり得ないことですが、私は幼い頃にそのあり得ないことを見たわけです。

イエスが言われる「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、」この「もし、あれば」と言っているのは、あなたたちの信仰が本物であればとか、あなたたちの信仰が本当に神から与えられたものであれば、そういう意味ではないでしょうか。

もし私たちに根付いた信仰が本物であれば、神から与えられたものであれば、闇の中でも光を見つけ出します。絶望の中でも希望を見つけ出します。暗闇の中で光を見つけ出す信仰は強力なライトではありません。真っ暗闇の中、手探りで生きている人生でも失うことのない小さな持ち物です。

絶望の中で希望を見つけ出す信仰は、絶望を打ち壊すショベルカーのような信仰ではありません。10年、20年と絶望を味わう中でもみずからに引っかかっていた髪の毛一筋ほどのよりどころなのです。そのような小さな持ち物が、闇に光を見いだし、絶望の中で希望を拾う「からし種一粒ほどの信仰」なのでしょう。

みなさんそれぞれ、信じていたものをたたき壊され、何も信じられなくなる時を味わったことがあるでしょう。何も信じられないのは確かですが、その時その人が死の淵から生きて戻ってくるのは、神が与えてくださる「からし種一粒ほどの信仰」なのです。「信仰は二の次で、まずはこの世の生活だ」そんな思い違いから抜け出た時、私たちは本物の信仰に出会うのだと思います。

年間第28主日(ルカ 17:11-19)

年間第 28 主日（ルカ 17:11-19）

この人のほかに神を賛美する人はいないのか

年間第 28 主日を迎えました。年間主日は第 33 主日、その後の「王であるキリスト」を迎えると待降節ですから、あと５週かそこらで年間の主日は終了です。この年間の季節の終盤に、これほど大きな台風が日本に接近、あるいは上陸して、話題にしたり心配したりするとは思ってもみませんでした。

さて今週与えられた福音朗読箇所「重い皮膚病を患っている十人の人をいやす」物語から、「神を賛美できる人になれて初めて、私たちは救われた人になれる」この結論にたどり着きたいと思います。ごく身近なことでも、私たちは神様の愛と憐れみの恩恵を受けていて、それを理解したなら、具体的に感謝すべきだ、ということです。

ごく身近なことから始めましょう。ミサに参加して、司祭が唱える奉献文に耳を傾けていると、今現在三人の牧者の名前を呼んでいます。一人は教皇フランシスコ、一人はヨセフ髙見三明大司教、一人はペトロ中村倫明補佐司教です。補佐司教様の名前をうっかり忘れて、言い直すこともありますが、今現在ほぼ毎日この三人の牧者の名前を呼んでいます。

ところで、この三人の牧者の名前を呼ぶことは、当然なこと、別に不思議でも何でもないことでしょうか。決してそうではありません。教皇様について言えば、前任者のベネディクト 16 世名誉教皇は２月 28 日に引退されました。次の教皇選挙が行われたのは３月 12 日、新しい教皇様が選ばれたのは翌 13 日でした。

およそ二週間、私たちは教皇様の名前を呼ぶことができなかったのです。二千年続く教会、266 代の歴代教皇によって引き継がれてきた教会ですが、教皇様がお亡くなりになるたび、また選挙のたびに、名前を呼ぶことができない時間を 200 回以上経験してきたのです。

司教様についてはどうでしょうか。司教様が与えられていない期間を司教座の空位期間と呼びますが、長崎教区は幸いに空位期間はそれほど長くは経験したことがありません。最近では島本大司教様がお亡くなりになったあと空位期間がしばらくあって、髙見司教様が教区長になられました。長崎はそうですが、すでにお隣の福岡教区は、四月の下旬から司教座は空位であり、５ヶ月以上が経過しています。つまり福岡教区は現在ミサ奉献文ではおそらく「私たちの教父フランシスコ、日本の司教団、すべての教役者をはじめ、全世界を愛の完成に導いてください」と唱えているわけです。５ヶ月もですよ。ほかにも、新潟教区も司教座は空位になっております。

これだけでも、教皇様、司教様が与えられるのは当然ではなくて、感謝すべきことだということが分かります。司祭はこれらの牧者の名前を毎日唱えますし、信者の皆さんも「今日は誰の名前が出るかな？」みたいな場面ではないので聞き流しているかも知れません。けれどもたと

えば教区長の名前を呼ばずに毎日毎日ミサをささげている教区、司祭方がおられることを考えれば、ミサのたった一箇所でありながら、ありがたいな、感謝すべきだなとあらためて理解できます。

さて福音朗読、重い皮膚病を患った十人の人がイエスに憐れみをこい求めました。「声を張り上げて、『イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください』と言った。」（17・13）そのうちの九人はユダヤ人、一人はサマリア人でした。もしかしたらこの時点から、心にある思いは違っていたのかも知れません。九人のユダヤ人は「私たちはあなた様と同じユダヤ人です」と考え、サマリア人は「外国人扱いの私ですが、もし憐れみを受けられるのであれば」そんな思いだったかも知れません。

彼ら十人は、祭司のもとに体を見せに行く時点ですでにいやしを体験していました。九人が「あなた様と同じユダヤ人です」と考えていたとしたら、いやしを体験しても次の行動には移らないでしょう。私たちが何気なく教皇様、司教様の名前を唱えてミサをしているような状態です。「これはあって当然のことではない。」そう思うなら、新たな行動を起こすに違いありません。感謝の祈りをささげ、この幸せが続くようにと願うでしょう。

サマリア人は、自分の身に起こったことを「こうなって当然だ」とは考えませんでした。すぐに次の行動を起こしたのです。サマリア人は礼拝の問題でユダヤ人からは救いを遠ざけられている人々と思われていました。そのサマリア人にも、イエスの愛と憐れみは届いたのです。必ず、神は救う。救いを求める人に必ず答えてくださるイエスに、祭司に体を見せに行く途中気づいて、「大声で神を賛美しながら戻って来た」（17・15）のです。

「大声で」神を賛美することがふだんの生活にあるでしょうか。私は神のなさり方、神の不思議な計らいに触れて、大声で思い出し笑いをしたことがあります。頭の中に消そうとしても消せないものがあり、思い悩んでいた時、テレビを見ていて思い悩んでいたものがこれで完全に払拭できる、そう感じた瞬間でした。「これが神様のなさり方だ。私はこうして前を向くことができるようにしていただいたのだ」そう感じた時、あまりのおかしさに大声で笑ったのです。

ミサに参加して、私たちは当たり前のように受けている恩恵を、あらためて見直してはいかがでしょうか。82 歳の教皇様が長崎に来てくださいます。当たり前では決してないと思います。この田平教会に昨年度 10 万人の人が訪ねてきました。そのうちの何人かは、貴重な献金をしてくださいました。当たり前に当てにしたり、何の感謝も感動もなく受け取ったりしているのではないでしょうか。

聖歌を歌う時、招きの祈りに答える時、「大声で」歌い、唱えてみてはいかがでしょう。歌っているのかつぶやいているのか分からないのでは、私たちはイエスから「ほかの九人はどこにいるのか」（17・17）と言われるに違いありません。

主日の福音 2019/10/20(No.1027)

年間第 29 主日（ルカ 18:1-8）

家族

「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。」（18・1）私たちも、イエスから、「気を落とさずに絶えず祈る心」を学び、持ち帰ることにしましょう。

19 日（土）、宝亀小教区中野教会の大神学生が教会奉仕者に選任されました。教会に与えられる恵みは、いつも私たちの祈りに神様が答えてくれるしるしだと思います。教会奉仕者に選任される神学生の努力ももちろん必要ですが、最終的には神の民の祈りに、神様が答えてくださって、恵みは与えられるのです。

中田神父には選任を受けた大神学生について語るだけの情報を持っていませんが、この日までに私が体験したことのない苦労を体験したと聞いております。たとえばそれは、休学した期間があったということです。休学すると、２年とか、３年とか、場合によってはそれ以上の時間を回り道することになります。

この間に本人が祈りを忘れたら、復学することはまず不可能です。休学したことで祈りの大切さを、休学したことのない私以上に学んでこの日を迎えたに違いありません。休学中に、「気を落とさずに絶えず祈る心」を鍛えたのです。

しばしば私たちは、体験をすることで、物事の良さを理解できるようになります。11 月、日本に再び教皇様がおいでくださいます。「気を落とさずに絶えず祈ること」これがいかに大切か、教皇様のために祈ってみて皆さんも良く理解できるようになっているでしょう。絶えず祈り続け、祈りを積み重ねたことで、私たちに教皇様来日という神様の恵みが与えられようとしています。

ひょっとしたら政治家も、バチカンの元首を招こうとずっと動いていたかも知れません。ただ政治家の行動だけでは、今回の教皇来日は実現しなかったのです。私たちを訪問して、日本の教会を守ってくださる。来日のテーマは「すべてのいのちを守るため」です。そこに日本の教会といういのちを守ることも、教皇様にとっての大切な来日の動機だと考えています。

さて今週福音朗読に選ばれた「やもめと裁判官のたとえ」は、一人のやもめの切なる願いに「神を畏れず人を人とも思わない裁判官」が応えるという物語でした。「相手を裁いて、わたしを守ってください」とやもめは言っています。名誉の挽回もあるかも知れませんが、私は、「いのちの危険」が彼女には迫っていたのではないかと思うのです。

当時の男性優位の社会では、社会的に弱い立場にある未亡人の女性は、不利な扱い、不当な扱いを受けても泣き寝入りすることがしばしばだったでしょう。しかし物語の彼女は泣き寝入りで終わらず、裁判官に保護を願いました。泣き寝入りで済む問題ではなかった、そう考えてみ

ました。いのちの危険すら感じていたので、裁判官にすがったのだと考えたのです。

いのちの危険を感じ、いのちを守ろうとする人は、どんなに困難な道でもやり抜きます。登場したやもめは、いのちを粗末に扱われ、いのちを守ってもらおうとしたのかも知れません。不正な裁判官の言い分によると、「うるさい」と思うほど、「ひっきりなしにやって来た」のでした。やもめにはどうしても守りたいものがあって、これほど裁判官に食い下がった。不思議ではありません。

私たちもきっとそうでしょう。いのちに関わることを守ろうとするなら、それが何年かかろうとも、守り抜くたたかいを続けるでしょう。守るものが裁判官に申し出る内容でなくても構いません。

もしその人が、いのちを大切にしてくれる人に出会えず、さまよってきたとしましょう。その人は祈るでしょう。「私のいのちを大切に守ってくれる人に出会わせてください」と。それが 10 年でも 20 年でもです。ひょっとするとその人は、25 年祈り続けて、自分の祈りに神様が応えてくれて、いのちを大切にしてくれる人と出会うかも知れません。

38 年前、日本に初めて教皇様がおいでになりました。260 年間一人の宣教師もなく、260 年後にプチジャン神父様が与えられた時と同じくらいの喜びで、私たちは教皇ヨハネ・パウロ二世をお迎えしました。再び日本の教会は、いのちの危険にさしかかっているのではないでしょうか。38 年前、神学生も溢れるほど与えられていましたが、現在長崎の神学院には学年ごとに２人とか、３人といった状況です。大神学院にしても状況は変わりません。これは、司祭を確保する瀕死の状態、いのちの危険にさしかかっている状況かも知れません。

洗礼を受ける人も、少なくなってきました。カトリック信者同士の結婚も、めったに受け付けることがなくなりました。これらの目に見える状況が、日本の教会がひょっとしたらいのちの危険にさしかかっていることを物語っているのではないでしょうか。そこへフランシスコ教皇様が、「すべてのいのちを守るため」においでになったのです。

もちろん、教皇様の来日テーマは、人間のいのち、自然界のいのちのことでしょう。けれども私たちが教皇様来日に向けて心一つにして祈る中で、昼も夜も祈る中で、神様は私たち日本の教会のいのちを守るためにも教皇様を送ってくださるのではないでしょうか。

「まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。」（18・7）「気を落とさずに絶えず祈る」この心が、聖霊を通して教皇様を動かしてくださったのだと考えました。

私たちの頭の中には、日本の教会の再生へのはっきりした道筋はないかも知れません。しかし「気を落とさずに絶えず祈る心」を失わないならば、教皇様の来日に刺激を受けて、何か突破口が示されると信じています。そのためには文字通り、日本の教会のために「気を落とさずに絶えず祈ること」が私たちに求められています。

年間第 30 主日（ルカ 18:9-14）

欠けたところを認めてから本当の付き合いが始まる

年間第 30 主日、年間の主日も押し迫ってきました。ご存知のように「王であるキリスト」の祭日が、年間の最後の主日です。この日、「王であるキリスト」の祭日に、私たちが教皇と呼び、マスコミが法王と呼ぶ教皇フランシスコが長崎においでになり、ミサをささげてくださいます。偶然とは思えない巡り合わせを感じました。

教皇様について、一つのエピソードを手に入れましたので紹介します。教皇フランシスコは、若いころ、日本に宣教師として渡り、日本で人々にキリストを宣べ伝えたいという夢を持っていました。しかし彼は肺結核を患って、片方の肺を摘出しなければならなくなり、健康に不安があったので日本に宣教に来ることができませんでした。一度は自らの意志で、自らのタイミングで願ったわけですが、祈りが叶えられたのは 80 歳を過ぎてから、神様の考えるタイミングでのことでした。

福音朗読に入りましょう。神殿で祈るファリサイ派の人と徴税人とは、まったく正反対の人物として描かれています。ファリサイ派の人は律法の規定をどんな些細なこともおろそかにせず、その上さらに他の人ができないあっと驚く犠牲、週に二度の断食や、全収入の十分の一の献げものを実行していました。

一方で徴税人は、自分には神に胸を張って披露するものがないので、不足や欠点を認め、憐れみをこい求めました。イエスが指摘したとおり、「言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない」（18・14）という結果になります。神様が徴税人を憐れむのは理解しますが、律法の厳しい規定を楽々とこなし、それ以上の献げものを実行するファリサイ派の人は、なぜ退けられたのでしょうか。

ここには神が何を喜びとされるかが問われているのです。神がもし、人間の努力で手に入れた正しさを喜ぶのであれば、ファリサイ派の人の祈りも受け入れられたでしょう。しかし神が喜ぶのは人間の努力で手に入れた正しさではないのです。徴税人が示したように、自分の欠点や不足を認め、神により頼む心をもとにして祈る姿を喜ぶのです。

中田神父の手元には 10 年目になる腕時計があります。浜串教会時代に、子供達が漁港で海水浴をする時に見張りの大人がどうしても必要で、日中頻繁に司祭館のチャイムを鳴らして見張りをせがまれました。ただ黙って見ているのもつまらないので、一緒に海に入るため、この機会にダイバーズウォッチを買ったのです。値は張りましたが、海水で錆びがこないか、そんな心配をしなくてよくなりました。

ところがどこでしくじったのか、ある時時計のガラス面をよく見ると、見逃せないひっかき傷が目に留まったのです。私は飽きっぽい人間なので、その傷を見た時にかなりテンションが下がりまして、腕にはめて見せびらかす気持ちが萎えてしまったことがあります。鍵束と一緒に

ポケットに入れたのが悪かったのでしょう。

けれども、興味を失ったはずの傷物の時計を、10年経った今も私は使い続けています。価値も下がり、質屋にも持ち込めない時計ですが、私はむしろ愛着が湧いてきたのです。見逃せないほどの傷が付いたけれども、私は誇りに思っている。そう思えるようになりました。時間が経ったことで、無視できない傷も含めて、受け入れ、包み込めるようになったわけです。

説教の冒頭、教皇様は肺結核で片肺を摘出し、当時抱いていた日本宣教の望みを断念しました。けれども教皇様になって、日本に来ることになりました。それは、日本への思いを、ご自身の健康上の不安もすべて受け止めて、神様のお望みを聞かせてくださいと祈ったから、叶えてもらったのではないでしょうか。ご自身の能力と努力で行く行かないを決められるはずだった時には神様はその望みを叶えてくれず、ご自身の能力努力に信頼を置くのをやめて、神により頼み、神の望みを聞こうとした時に、願いは叶ったわけです。

一時期よく「グリフィンの祈り」という聖歌が歌われていました。「大きなことを成し遂げるために神に力を願ったのに、謙遜を学ぶようにと弱くなってしまった。人々の称賛を得ようとして神に成功を願ったのに、得意にならないようにともくろみは失敗してしまった。願ったことは何一つ叶えられなかったけれども、希望するすべてのものを私は神から受けた。」こんな感じだったと思います。願ったものを神から受けるためには、神と人間との物々交換ではなくて、自分の欠点や不足を神に心を開き、すべてを委ねて神により頼む時、与えられるわけです。

ファリサイ派の人の祈りは神と物々交換の取引を持ちかける祈りでした。これだけの努力を差し出しましたから、わたしを正しい者と認めてください。この物々交換が果たして成り立つでしょうか。私たち人間に、神と取引できるものが何か一つでもあるのでしょうか。

「24時間断食してもミサの恵みを受けるのに値しない私ですが、今日もこうしてあなたのもとに集まりました。」そんな祈りを神は喜ぶのです。「全収入の十分の一をささげてもミサの恵みをいただくには十分ではありませんが、今日、この献金をおささげします。」そんな祈りを神は求めているのです。

あなたにとって、神により頼む心が湧いてくる理由は何ですか？胸を張ってキリスト者として生きていることですか。私が神のために費やした時間や労力を並べるよりも、こんな私でも今日を与えてくださった。こんな私にも、今週の説教を思い浮かばせてくださった。神に自分の不足を素直に認めるところから、神との深いお付き合いは始まるのだと思います。

自分の弱さや欠点を認めて、あなたは神に心を開きますか？それなら、私の目にもっと弱いと映る人のためにも神に祈ってあげてください。そうすることで、私もまた、神に義とされて家に帰ることができます。

年間第 31 主日（ルカ 19:1-10）

「捜す人」を「捜す方」が見つけてくださる

年間第 31 主日Ｃ年は「徴税人ザアカイ」の物語です。ザアカイは興味があってイエスを捜しましたが、イエスはザアカイに「どうしても会わなければならない」と考えていました。「捜す人」は実は「捜されている人」であったというのが、この物語に隠された鍵だと思います。

物語の中で、ザアカイは「イエスがどんな人か見ようとした」（19・3）とあります。この時点では「品定め」のような気持ちだったかも知れません。どんなタイプの人だとか、どんな話題を取り上げる人だとか、それを品定めするために行ったのかも知れません。こちらがイエスを捜す側であり、気に入ったら付き合ってあげよう。そういう構えをしていたのでしょう。

ところで、イエスを捜しに行ったザアカイの行く手には、いくつかの障壁がありました。一つは「背が低い」ということです。私は野球観戦に行って、前の座席にいる人が立ち上がって応援するものだから「見えないなぁ」と感じた経験があります。見ようとして妨げがあると、何か工夫をしなければ見たいものも見ることができません。

もう一つの障壁は、意外に思われるかも知れませんが、彼が「徴税人の頭で、金持ちであった」ということです。人から良くは思われていなかったでしょうが、地位を築き、名誉も手に入れていたのです。そうなるとイエスを見たくても、周りの視線を気にして木に登ったりできなくなります。これら二つの障壁がザアカイの前にありましたが、ザアカイはそれを「乗り越えるべき壁」ととらえました。「なんのこれしき」と考えたのです。

イエスを捜すザアカイは、「品定めしてやろう」その程度で行動を起こしたかも知れませんが、障壁を乗り越えるうちに、「何としても見てみたい」そういう気持ちに変化していったことがうかがえます。けれども、「見てみたい」というだけでは、せっかくの出会いもイエスを見ただけで終わったかも知れません。記憶に残らず、人生に影響も与えないでしょう。ザアカイにとってイエスが記憶に残る人、人生に影響を与える人になるためには、イエスから先にザアカイが捜されていたと気づく必要があったのです。

「捜す人」はどれだけ時間がかかるにせよ、「捜している人」を見つけます。自分と同じ趣味の人、同じ目的のために協力できる人、価値観を共有できる人、ほかにも同じ欠点を持っている人を捜し当てるかも知れません。自分では認めようとしなくても、「捜す人」が出会った人は同じく「捜す人」だったということが多いはずです。

もちろん、「捜す人」が出会った相手が完全に同じものを捜しているとは限りません。一人一人に求めている度合いがあるし、求めているものが同じでもお互いの性格や気質まで同じとは限りません。ですから「捜す人」が「確かに出会った。これは偶然ではない」と思っても、３

ヶ月、６ヶ月と経つとすれ違いを感じるかも知れません。「捜す人」が捜しているものを正直に打ち明けた時、「お互い探しているものが少し違うね」となることもあるでしょう。そうなると本当に捜しているものを共有できるように、お互い何かを決断しなければならないかも知れません。

さてザカリアは、自分を捜し求めてくれる人を捜していました。表面上は、イエスの見物に来たのですが、イエスにかけられた声で気づいたのです。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」（19・5）イエスが先に、ザアカイを捜し求めていたのです。今日、救いが訪れる人を捜していたのです。

ザアカイはすぐに気づきました。自分が、イエスに捜し求められていたこと。心の中で、「徴税人の頭、金持ち」としてではなく、ありのままの自分を受け入れてくれる誰かを、捜し求めていたことにです。徴税人の私にも、救いが訪れることを宣言してくれたイエスに、自分が握りしめていたものを手放し、自分を委ねて生きることにしました。

「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」（19・10）イエスが物語の最後に語ったこの言葉は、ザアカイのためだけではありません。「捜す人」を、イエスは捜し続けているのです。人を捜す中で、「この人が私の捜している人だ」と思ったけれどもすれ違ってしまい、傷つき、人を信じられなくなる。それでも本当に自分が捜している人に会いたくて捜す。こうした辛い体験を何回か味わうでしょう。そんな「捜す人」を、イエスは先に捜しておられます。最終的に、「捜す人」が「捜している人」に出会うのは、「先に捜しておられたイエス」に出会った時なのです。

「捜す人」が「捜している人」に出会った。それが本物の出会いかどうかは、「先に捜しておられたイエス」に、お互い感謝できるかどうかで分かります。もし本物の「捜す人」と「捜していた人」との出会いであれば､お互い神に感謝をささげ､感謝のしるしをささげるでしょう。そして誰もがそのような出会いを必要としています。

ザアカイが、イエスの前で「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」（19・8）と宣言できたのは、本物の出会いをしたからです。

誰もが「捜す人」です。長い人生の中で何度か近づいたり離れたり、何としてもこの人が捜している人と思い込みたいこともあるでしょう。本物に導いてくれるのはあくまでも先に捜しておられるイエスです。「捜している人」が本物であるなら次のことができるはずです。その人のために、神に感謝をささげているでしょうか。神に何か感謝のしるしをささげているでしょうか。

「捜す人」であり続けるなら「捜している人」にいつか出会います。それは、先にイエスが「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」忠実にこのことばの通りに働き続けておられるからです。

主日の福音 2019/11/10(No.1030)

年間第 32 主日（ルカ 20:27-38）

神の喜びにあずかる生き方を私たちは選ぶ

年間第 32 主日Ｃ年の福音朗読は、復活を否定するサドカイ派の人々との問答です。わたしたちキリスト者にとって復活の信仰はなくてはならないものですが、当時のユダヤ人にとっては、復活を信じる決定的な出来事を持ち合わせていませんでした。復活したイエスをよりどころとするわたしたちとは違っていたわけです。

今週の説教、なかなか切り口が見つかりませんで、以前の説教を過去 15 年分合計５つ読みました。その中でも出色の出来だったのは田平に赴任してすぐのものでした。上五島に出張することも頭にちらついてうまくまとまりませんでしたので、今年は三年前のをそっくり使いたいと思います。

田平に赴任したその年の文化の日に、福岡の大神学院で行われた神学院祭に子どもたちを８人連れて行きました。広島教区の新しい司教様、白浜司教様が、召命の実りのために神学院のグランドで野外ミサを司式してくださいました。司教様は説教の中で自分が神学校に入るきっかけとなった出来事をお話しくださいましたが、その時の説教は今も鮮やかに思い浮かぶほど心を揺さぶられる説教でした。

白浜司教様は中学２年から長崎の小神学校に編入しました。町村合併前の新魚目町の小学校を卒業した時、神学校への憧れはあったものの神学校に行かないかと勧めてくれる人は誰もいなかったそうです。中学校は地元の中学校に進み、バレー部で部活動をしていましたが、同級生の中にただ一人、部活動を断った友達がいたそうです。

中学校に入ったら部活動で汗を流すのが当たり前と考えていた白浜少年は、なぜ彼が部活に入らないのか知りたくて、部活が休みだった学校帰りに、彼の家を訪ねました。すると彼は、学校から帰るとすぐに家で飼っていた山羊を放牧から連れ帰り、薪で風呂を沸かし、炊飯器でご飯を炊いて共働きの両親の帰りを待っていました。しかもその作業を一日も欠かさず、毎日続けていると言うのです。

ところが同級生は、高熱にうなされる病気になってしまいました。上五島では治療できる病院がなかったので、本土に運ばれましたが、懸命の看病も報われず、13 歳でこの世を去ってしまいました。白浜少年はいのちのはかなさに衝撃を受け、同級生の分も生きるため、そして後悔しない生き方をするため、中学２年生から神学校に編入したそうです。

白浜司教様は説教中何度も声を詰まらせていました。その様子にわたしは思わずもらい泣きしたのです。わたしは白浜司教様の中学１年生の時の同級生のことを思うのです。彼はどうなるのだろうか。もし本日朗読された福音書のサドカイ派の人々が考えるように、復活などないと言うのなら、彼が黙々と果たした両親を助ける奉仕は誰が報いてくれるのでしょうか。

わたしは、13 歳で亡くなった白浜司教様の同級生も含め、善人も悪

人もいっしょくたになってどこかに置かれているとはとても思えません。神が十分に報いてくださり、復活して、喜びの宴でいつまでも神とともに住む。そういう姿を信じたいです。白浜司教様は、自分が道をそれないために、あの同級生は天国からいつもわたしを見守っていてくれると信じている。そう言いました。きっとそうなのだと思います。

もちろん、当時のユダヤ人の疑問にはきちんと答えなければなりません。サドカイ派の人々が持ち出した難問は、復活後の人間の姿を、今の姿を物差しにして考えたために誤解していたのです。

この世にあって人が自分の名を残していくためには、子孫が与えられなければなりません。そのため、子孫を残さず家系を絶やしてしまうことは決して認められなかった。そこで今回のような問題が起こってしまいました。

「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」（20・34-36）次の世では、家系を土台にした人間関係ではなくなり、神とわたしの関係が何より大切にされる状態に移されるのです。

このことを決定的に明らかになさったのはイエス・キリストです。復活についての問題は、人類に先だって最初に復活されたイエス・キリストの啓示を待つほかはなく、イエス・キリストに耳を傾ける以外に答えを見つけることはできないのです。アブラハム、イサク、ヤコブやモーセも、復活されたイエス・キリストが生かしてくださるのです。

わたしたちの復活の信仰を持っています。この信仰を人に自信をもって語るために、わたしたちにはよりどころがあるでしょうか。身近な司祭・修道者は復活の信仰を人に語るよりどころになると思います。

司祭・修道者はこの世に名を残しません。それでいいのか？と問われるなら、「次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない」と答えることができます。今この世にあってすでに、復活にあずかる者として生きている人なのです。司祭・修道者は復活を信じて生きる信仰者のよりどころだと思います。

もしわたしたちキリスト者の復活が夢物語だとしたら、名を残さない司祭・修道者はこの世でいちばんみじめな生き方です。しかし事実は違います。復活はイエスが約束してくださった、わたしたちの希望のみなもとです。この世に死んで、神のいのちに生きるキリスト者の生き方は、必ず報われる生き方となりました。わたしたちはもっと力強く、証しする必要があると思います。

復活を信じるわたしたちは、本当の意味で生きている生き方を選びました。この選びは自分のためだけではありません。「滅びるいのちに生きるのではなく、復活して永遠に神の喜びにあずかる生き方を選んでみませんか。」今週わたしたちが持ち帰り、伝えるべき言葉です。

主日の福音 2019/11/17(No.1031)

年間第 33 主日（ルカ 21:5-19）

対抗も反論もできない言葉と知恵を胸に

「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」（21・15）「わたしがあなたがたに授ける」とイエスは言われたのですから、「あなたがた」とは誰なのかを考えてみたいと思います。「わたしがあなたがたに授ける」という言葉は、最終的に私たちにも繋がってくるでしょうか。

先週、頭ヶ島教会献堂百周年の記念ミサと式典のために上五島に渡りました。直接関連はしませんが、二つの知らせが耳に入りました。一つは、歴代の主任神父様の中で、岩村神父様が見えてなかったのですが、ちょうど同じ日にペースメーカーを埋め込む手術の日と重なったので欠席だったそうです。お祈りしたいと思います。

もう一つは、数日前から容態を悪くしていたお告げのマリアの藤澤ハルエシスターが亡くなって、百周年記念の日の晩に太田尾教会で通夜、翌 12 日に葬儀ミサを行うという知らせでした。私は日曜日に五島に入って、火曜日に帰りの船を予約していましたが、急遽百周年のミサの日は実家に泊まらず太田尾修道院にシスターの顔を見に行くことにしました。

ただ、どんなに頑張っても通夜の時間に間に合いませんし、次の日の葬儀ミサの時間帯は長崎に留まって定例会に参加する予定でしたので、通夜の晩に、遅い時間でしたが顔だけでも見て帰ろうと思ったのです。今考えると、定例会を欠席することも選択肢だったかも知れません。

とにかく、太田尾修道院のチャペルに横たわっているシスターは、本当にすべてを果たし終えた顔をして眠っていました。紐差からでしょうか、太田尾修道院の立ち上げのために呼ばれていった三人の姉妹たちの一人だったと聞きました。私はこのシスターに太田尾小教区赴任中 6 年間まるまる賄いさんをしてもらったわけですが、本当にたくさんのことを教えてもらいました。「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」今週のイエスの言葉は、藤澤シスターにきっと当てはまると思いました。

太田尾小教区は、私が生まれて初めて主任司祭になった小教区です。着任して荷物を運び入れてもらいながら、現実にすぐ直面しました。荷物を搬入するお父さんの一人が、「こんなにたくさん本が必要なのですか？」と言ったのです。それは質問ではなくて、「必要ないでしょうに」という響きでした。そんな人にも、働きで納得してもらうしかないと思ったのを覚えています。

賄いの藤澤シスターは、私に何かを指摘したり忠告したりはしませんでした。それは 6 年間同じ姿勢でした。ただ自分が見てきた司祭、自分がお世話になった司祭との思い出を語ってくれて、その中で「あーシスターはこういうことを伝えたいのかな、こうあって欲しいと願っているのかな」そういったことはよく伝わりました。

特別なシスターではありません。高尚な話をするわけでもありませ

ん。けれどもシスターが経験から語る言葉は、「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵」を備えていたのです。きっとそれは、シスターに言葉を授けたイエスが、シスターを通して語っておられたのだと思います。しばしばシスターの体験談は、私に慎重な判断とか、迷っていた決断に最終決断を下す貴重な手助けになりました。

イエスは他の箇所でこう言いました。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。」（ルカ 10・21）

私は藤澤シスターの最期の姿を見ながら思ったのです。「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵」は、下手に知識や学問に頼ろうとする人にではなく、素直で神のほかに頼る者を知らない人に授けられるのではないでしょうか。「わたしがあなたがたに授ける」と言った「あなたがた」とは、イエスのほかに頼る者を知らない人々のことだと思ったのです。

本来、司祭修道者は、「イエスのほかに頼る者を知らない人々」のはずです。ところが中田神父は、まだその境地に達していないのです。自分に頼ろうとするし、最新技術や成功体験に頼ろうとするのです。本来の「イエスのほかに頼るものがない姿」を取り戻せば、飾らなくても人の心を打つことができるでしょう。人に、イエス・キリストを届けることができるでしょう。

２年くらい前に田平教会で開催されたお告げのマリア佐世保地区平戸地区の修養会「四季の静修」が藤澤シスターと会った最後でした。その時シスターから「まぁこんなに立派な神父様になって～」と言われたのが最後の会話でした。けれども立派になっていたのはむしろシスターのほうだったと思います。太田尾を出た時よりも小さな体になっていましたが、私が頭が上がらないほど大きな存在になっていました。シスターを乗り越えることは、とうとう最後まで叶いませんでした。

難しい理屈や説明に、神が宿るのではありません。「反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵」は、イエスしか頼るものがない人の素朴な言葉に宿るのです。思い返せば私の祖母もそうでした。父方の祖母は鯛ノ浦キリシタン六人斬りの事件を記憶する生存者の家系です。この世のものは何一つ相続しませんでしたが、永遠の命を保つ信仰と日々の祈りを、祖母から受けたのです。

この世の言葉と知恵は、過ぎ去っていきます。「メガ」という単位が「ギガ」になったのもつかの間、今は「テラ」という単位が身近なものになりました。何一つ、永遠に続くものはありません。これとは違って、イエスが授ける言葉と知恵は、反対者を恥じ入らせ、その言葉は 50 年後、100 年後に人々の口に上るようになるのです。

私は、どんなものを頼りにして生きているのでしょうか。88 歳で天国に召されたシスターは、88 年間、神様しか頼るもののない生活をして旅立っていきました。

王であるキリスト（ルカ 23:35-43）

遠巻きにではなく、イエスと向き合って

王であるキリストの祭日、年間の最後の週を迎えました。私たちは日本に来られた教皇様と一緒に祝う祭日となりました。教皇様を迎えることは、王であるキリストの代理を迎えることでもあると思いますので、少し関連付けて話そうと思います。

今週の説教は、聖週間の聖木曜日、聖金曜日くらいの短い説教となりますことをお許しください。教皇様のミサに参加するために、長い説教をしてはいられないという事情があります。よりコンパクトに、伝えたいことを伝えるように努力します。

福音朗読は、よく考えられています。「議員たちも、あざ笑って言った。」（23・35）最初に侮辱するのは、民衆と共に遠くで十字架のイエスを見つめている議員たちです。次に侮辱するのは兵士たちです。彼らは槍でイエスを突ける近い場所にいます。そして最後にイエスを侮辱するのは、一緒に十字架にかけられていた犯罪人の一人でした。

この描き方はよく考えられています。遠くから侮辱する人、近くで侮辱する人、目の前で侮辱する人です。距離だけで描き分けているのではありません。遠くの議員たちは指導的立場にある人、近くにいた兵士たちは一般人、目の前にいるのは犯罪人です。近くなるほど侮辱は甚だしく、近づくほど罪深いとされた人がいるという描き方です。

ところが最も近くにいて、まったく正反対の態度を示した人がいました。もう一人の犯罪人です。彼もまた、罪深いとされた人でしたが、イエスに誰よりも近づいたことで、罪深さを認め、運命をイエスに委ねる回心に導かれたのです。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」（23・42）。王であるキリストの前に自分をさらけ出した時、誰よりも早く回心の道が開けたのです。

さて私たちは、長崎で教皇様のミサに参加します。私たちが陣取るのは指定された場所です。恐らくそこから動くことはできず、教皇様に近づきたくても無理なのです。けれども福音の学びから、いちばん近い場所に行き、王であるイエスの代理者である教皇フランシスコに照らしと導きをいただき、神へと心を開いてもらうことは可能なのです。

十字架のイエスに最も近くいたのは、罪人とされた人でした。実際に、最も激しくののしった人でした。私たちが教皇フランシスコの熱意に比べればどれだけ生ぬるい信者であるかは明らかです。これまでの宣教への熱意の無さや、信仰を燃え立たせる努力の不足を嘆き、神に心を開いてへりくだるなら、指定の場所にいながら、心は教皇フランシスコの目の前に行くことができると思うのです。その時私たちは、新しい熱意を頂いて、新しい宣教に向かう力を得るのではないでしょうか。

もはや時間は残されていません。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」（23・39）と教皇様に言いますか？「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言いますか。これから数時間のうちに、自分で決めてください。

主日の福音 2019/12/1(No.1033)

待降節第１主日（マタイ 24:37-44）

今を大事に生きることが来臨の日の備えになる

待降節第一主日、三年周期のＡ年に典礼が変わりました。直前に待っているのは主の降誕ですが、「救い主を待つ」という大きなくくりで考えると「キリストの再臨を待つ」という意味合いもあります。「主を待つ人」の姿を福音朗読から探し求め、私たちの準備に当てはめることにしましょう。

待つことの素晴らしさを、今回ほど味わった年はないでしょう。私たちは教皇フランシスコの来日が正式に発表されてから二ヶ月間、どれだけ楽しみにして待ったでしょうか。教皇様のために祈り、折り鶴を用意し、聖ヨハネ・パウロ二世教皇の訪日の様子を思い出し、一日千秋の思いで待ちました。

そして待ち望んだ当日は、最も心配していた雨でした。台風のなごりである温帯低気圧がいたずらして、朝方はほとんどの人が天気を恨んだはずです。仕方ないという気持ちで県営野球場に入ったはずですが、最後の待ち時間に奇跡が起こりました。待ち望んでいた、もしかすると諦めていた絶好の日和になったのです。

私たちは聖ヨハネ・パウロ二世教皇を「大雪をもたらした教皇様」と記憶していると思います。今回の教皇フランシスコはどのように記憶されるでしょうか。私は県営野球場でのミサが始まるまでは、「お目にかかるまでに本当に苦労させられた教皇様」として記憶に残ると考えていました。

ところが、実際は私の予想をはるかに超えて記憶に残る教皇様となったのでした。誰もが諦めかけていた悪天候を吹き飛ばし、天を恨んだ私たちの思いをくつがえし、感動を与えてくださったのです。

もし雨降りの中で教皇様が県営野球場に現れていたら、「やっと来たか」で終わったかも知れません。ですが実際はどうでしょうか。それまで雨に打たれて寒い思いをしたこともすっかり忘れ、疲れて座り込んでいたのも忘れて、立ち上がって遠くからでいいからお姿を見たい、私が手を振っている姿を届けたい。そんな気持ちになったのです。一瞬で、すべてが塗り替えられたわけです。

司祭団にもどよめきが上がりました。教皇様がミサをささげる祭壇の左右に司祭団席が設けられていましたが、祭壇右側はすでに強い日差しに照りつけられ、汗が出ていました。「暑いなぁ」「まだかなぁ」と思って待っておりました。それでもおいでになった瞬間、立ち上がってお姿を見つけようと人々の視線の先を追いかけたのです。「持ってる人は違う！」そんな印象を持ちました。これほど、「待った甲斐があった」と感じた瞬間を、私は思い出すことができません。

県営野球場にいる参加者はすべて、「今日ここに、教皇フランシスコがおいでになる」とはっきり理解しているわけです。それでも、雨が降り、やきもきして、すっかり天気になり、教皇様のお姿を見た瞬間、

今日集まっている喜びを噛みしめたのです。当然お目にかかれる方ですらこの通りです。私たちが待降節を通して待つ救い主は、どれだけ待っても待ちすぎるということはないのです。今年のクリスマスのために、教皇フランシスコは「待つ喜び」「待つことの価値」を、はっきり教えてくださったのではないでしょうか。

「だから、あなたがたも用意していなさい。」（24・44）福音朗読は用意していなさい、準備を怠ってはならないと呼びかけています。二つの用意を考えました。一つは、おいでになる方の力と権威を全面的に認めることです。幼子としておいでになるお方は、命を狙われても命を落とすことなく、死を前にして絶望する人に希望をお与えになる方です。私たちのもとにおいでになる時、待ち望んだことを必ず与えてくださる。その力と権威を率直に認めましょう。これが一つ目の用意です。

もう一つは、救い主を待つ日々は、一日も無駄にしてはいけないということです。あと一日無意味に過ごして、それから救い主の準備に取りかかろう。ノアの洪水の時にどうなりましたか？人々は準備を怠り、一人残らずさらわれたと書かれています。あなたは「今日不注意なことをしても、明日仕事を取り上げられることはないだろう」と言うのですか。どこにもそんな保証はありません。「人の子は思いがけない時に来る」（24・44）のです。

救い主を待つ待降節を迎えました。今日一日無駄に過ごして明日から待降節に入るとか、神を試すようなことは一切考えないことです。すべての始まりと終わりをつかさどる方がおいでになります。「あなたは今日で終わり」と言われても、何も反論できない方を迎えます。その方のために一日も無駄にすることなく、「目覚め、わきまえ、用意して」救い主を待ち続けましょう。

待降節第 2 主日(マタイ 3:1-12)

待降節第 2 主日（マタイ 3:1-12）

主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ

「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。」（3・3）私たちも洗礼者ヨハネからこの言葉を聞いて、待降節の準備を急ぎたいと思います。洗礼者ヨハネの呼びかけから、救い主イエスを迎える準備がどれほど大切なものか、もう一度考える機会としましょう。

皆さん公園デビューという言葉をご存知でしょうか。知っているという前提で、中田神父はこの前「アリーナデビュー」をしました。何を買ったかなぁ。そうでした。「卵 1 パック・しゃぶしゃぶの豚肉 2 パック・豆腐 2 丁・エノキ 1 パック」を買ってきました。ただ残念ながら、だし昆布を買うのを忘れてがっかりしました。

皆さんもう一つ、キャッシュレス支払いというのをご存知ですか？現金以外の支払い方法です。キャッシュレス支払いだと 5％の還元を受けることができます。そこで店員さんに「Suica での支払いは可能ですか？」と聞いたら「大丈夫ですよ」と笑顔で応対してくれました。

こう言っては失礼ですが、あの「アリーナ」でさえも、現金払いとキャッシュレス支払いが可能なんです。今回は 1021 円の買い物を Suica で支払いを済ませましたが、51 円の還元を受けて 970 円で済みました。私の理解ですが、スイカで払えるなら、ミカンでもリンゴでも支払い可能だと思います。今度試してみたいと思います。

さて、福音朗読に移りましょう。洗礼者ヨハネが教えを宣べる場面です。洗礼者ヨハネの語りは預言者の語り方そのものです。群衆の耳に心地よいこと場を語るのではなく、多くの場合群衆の耳に痛い言葉をまっすぐに語りかけます。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。」（3・7-8）

なぜ耳に痛い言葉を、遠回しにではなくまっすぐに語るのでしょうか。それはおいでになる救い主を迎える準備を怠らないためです。どんな言い逃れもできないような厳しい口調で、ここにいるすべての人が、おいでになる救い主が歩かれるまっすぐな道、整えられた道を今すぐに用意せよ。それが洗礼者ヨハネの伝えたいことです。どんな言い訳も通らない、はっきりした主張です。

ところが私たちは、仕方が無いと自分を納得させるような理由を並べて、イエスのために整えられた、まっすぐな道をなかなか用意しません。たとえば、どうしてもしなければならないことがあったので、晩の祈りを後回しにします。後回しにしただけではなく、どうしても時間が取れなかったので、晩の祈りをしないで寝たりするのです。

それはもちろん他人事ではありません。11 月半ば、年内にご主人を亡くされた私の同級生から、新年のあいさつを失礼しますという案内が届きました。私のためにも連絡をしてくれた同級生だから、すぐに手紙を書いて力づける必要がありました。しかし、いろんな仕事を抱えて、明日に回そう、明後日にしよう、年内なら大丈夫、と言い訳をして数日

が過ぎ、それでも返事をしなければとこの前手紙を書きました。

しばらく、返事は来ませんでした。「返事は来ないんだなぁ」諦めかけていたその時に電話がかかってきました。感謝の電話でした。それまで離れて住んでいるお子さんが父親の死に大変ショックを受け、立ち直れるようにそばにいたため、私への連絡が遅くなったということでした。自宅に戻ってすぐに、電話をかけてくれたのでした。

私はすぐ思ったのです。「『主の道を整えよ。主の道をまっすぐにせよ。』この通りに振る舞うことが、人生に必要なことを果たす近道なのだ」と。おいでになる救い主に大きく心を開き、何を優先することが救い主の喜びになるだろうか、何に心を向け、心を寄せることを救い主は喜ぶだろうか。このことに特別な注意を払うなら、私たちは人生に必要なことを最短距離で果たせる。そう思ったのです。

お悔やみの手紙を書いて長く返事を待ったのでした。同級生はお子さんを力づけたあと、すぐに返事をくれました。人間的には長く待ったかも知れませんが、神の前にはすぐに返事をくれたのと同じことです。私が「どのように振る舞うことが、救い主をいちばん喜ばせるだろうか」その考えに正直に振る舞った時に、答えが返ってきたということです。人生に必要なことを最大限果たせる生き方は、「主の道を整えよ。主の道をまっすぐにせよ。」という生き方だと、改めて悟ったのです。

私たちは待降節を過ごしながら、救い主の到来を準備しています。確かに準備していますが、年末年始の用事の合間に、救い主を待っているのでしょうか。洗礼者ヨハネの呼びかけは、「何よりもまず、救い主のために道を整え、その道をまっすぐにせよ」です。私たちはそれでも、「いや、洗礼者ヨハネの呼びかけは二の次だ」と言うのでしょうか。私は今回の体験ではっきりと悟りました。「主の道を整えることに力を注げば、人生に必要なことはすべて整えてもらえる」と。

私は、自分が体験し、確信したことを語り続けます。たとえそれが今の時代にそぐわない、今の時代の人々の耳に煩わしい響きであったとしても、私は語り続けたいと思います。洗礼者ヨハネが告げる「救い主のために道を整えよ。その道をまっすぐに保て。」そこにキリスト者としての新しい道が開けます。私はそれを叫び続けて、クリスマスのその日を迎えたいと思います。

待降節第 3 主日(マタイ 11:2-11)

待降節第 3 主日（マタイ 11:2-11）

あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。」（11・7）イエスが洗礼者ヨハネを紹介する時に群衆に呼びかけた言葉です。私たちが見ようとしているものを超えて、真実を指し示してくださるイエスにさらに心を向けることにしましょう。私たちが見ようとしているものを超えて、おいでになる救い主は私たちに必要なものを見せてくださいます。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。」私にとってこのイエスの言葉は呼びかけであり、振り返りでもあります。先に呼びかけとして考えると、私たちは長崎で教皇様のミサに参加しました。「何を見に行ったのか」と問われるなら、教皇様を見に行った、ということになるでしょう。ただ、見たのは教皇様ですが、イエス様から見せていただいたのは、これまでとはまったく違う、「刷新をもたらす教皇様」だったのです。

恥ずかしながら、教皇様のミサに参加してから、教皇様の人柄を知るための本をいくつか買いました。その中で「これがいいかな」と思った本を現在読み続けておりますが、教皇フランシスコはこれまでの教皇様とは明らかに違う面を持ち合わせていて、それが現代の教会に必要だったので選挙で選ばれ、第 266 代の教皇フランシスコとして神様が私たちに与えてくださった方でした。

明らかに違う点は、フランシスコ教皇がヨーロッパからの教皇様ではなく、南米からの教皇様だということです。このあたりは、３月の黙想会で詳しく話したいと思っていますが、今や地域の教会が、全世界のカトリック信者を導く教皇様を生み出す時代になったということです。すべてのことはローマからやって来て、ローマに忠実に従っていればよい。

その伝統と歴史に新しい時代が来たと、教皇フランシスコをお選びになったイエスが示しておられるわけです。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。」新しい教皇様、地域の教会が育て、送り出してくださった新しい教皇様を、私たちは見たのです。

イエスの問いかけを振り返りとして考えるなら、それは私が中学生のときにさかのぼります。神学生は毎年２月５日に西坂まで歩いて行き、26 聖人のミサに参加していました。この日も寒い夜で、手をこすり合わせながらミサの説教を聞いたのでした。その年に説教された神父様は、誰だったのか当時は分かりませんでしたが、生涯心に残る説教をしてくださいました。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。」「風にそよぐ葦か。しなやかな服を着た人か。預言者か。そうだ。言っておく。預言者以上の者である。」（11・7-9 参照）ここには殉教者がおられて、私たちに期待しているもの以上のものを見聞きさせてくれるのだ。そういう説教でした。

感銘深いその説教を、私はずっと心に暖めて神学校生活を続けました。ただその説教をしてくれた神父様が誰だったのか確かめる方法を持たず、いつかお目にかかりたいものだと思いながら、ついに大神学校も卒業して司祭となり、浦上教会の助任として赴任したのでした。主任神父様は川添神父様でした。

クリスマス夜半のミサ後だったか復活徹夜祭のミサ後だったか、司祭全員が食堂に残っていろんな話に花が咲いていた時に、主任司祭の川添神父様がおもむろにこう言ったのです。「あなたたちが司祭になるまで大切に暖め続けていたものがあったら話してみなさい。」

年配の助任司祭からそれぞれ話してくれて、いちばん年下の私に順番が回り、「26 聖人ミサの説教で『あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。』という説教を聞いて、ぜひこんな説教をする神父様になりたいと思って、それを暖め続けて司祭になりました。」と答えました。

すると川添神父様が一呼吸おいて、「その説教をしたのは私だ。よく司祭になってくれた。よく浦上教会の助任に来てくれた。」と喜んでくださったのです。少年だったあのとき、私が見に行ったものは寒さの中で燃えるような説教をしてくれた神父様でしたが、二度と会うことはないと思っていた神父様を、イエス様はすぐそばで見せてくださり、その神父様に五年間手取り足取り教えていただいたのでした。私たちが何気なく見ているものは、しばしばそれ以上の素晴らしさがあります。イエスが見せてくださっているものは、私が見ている理解をはるかに超える意味と価値があるのです。

私たち自身に当てはめてみましょう。私たちは待降節を通じて馬小屋を準備します。馬小屋には確実にマリア様とヨセフ様、御子イエス様が飾られます。それは毎年のことです。けれどもこの毎年の出来事の中に、私たちが見ているものを超えた意味と価値を、イエス様は示してくださるのです。私たちはそれを楽しみにして、ご降誕のその日を待ちたいと思います。

教皇フランシスコの人柄を紹介する本を読み進めるごとに、私たちが今頂いている教皇様が特別な恵みなのだと理解できます。どこまで紹介できるかは分かりませんが、３月下旬に予定している黙想会で、教皇様に親しみを持つことを黙想会のテーマとして、私たちが誰とでも、どこででも教皇フランシスコについて語れる人になりたいと思います。

聖書の分かち合いはまだできないという人でも、教皇フランシスコの話題はぜひ私も分かち合いたい。そういう人になれるよう、３月の黙想会では実りを願いましょう。これらの力を勇気を与えてくださるのは、まもなくおいでになる救い主イエス・キリストです。私たちにイエスを信じる喜びを確かなものとしていただけるよう、今週もミサの中で恵みを願いましょう。

待降節第 4 主日(マタイ 1:18-24)

主日の福音 2019/12/22(No.1036)

待降節第 4 主日（マタイ 1:18-24）

我々と共におられる救い主を両手で受ける

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」イザヤ書を引用して、マリア様が身ごもっている方の未来を天使ガブリエルがヨセフに示した言葉です。「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ（た）」（1・24）とあるようにヨセフは人間としてのためらいを横に置いて行動します。ご降誕ももうすぐそこまで来ていますから、私たちもためらうことなく行動を起こしましょう。

先週の説教に少し触れたいと思います。日本においでになったフランシスコ教皇が、刷新のために選ばれた方、今の時代に必要な方として選ばれたということはお話ししました。教皇様は特に社会の手を必要としている人、さらに社会から必要な支援を受けられない人にまで近く寄り添ってくださる方として知られています。

一つ例を挙げると、教皇様は「焼き場に立つ少年」を示してくださいました。原子爆弾の犠牲となった兄弟をおぶって、火葬してもらう順番を待つ少年です。日本で起こった出来事ですから日本人の私たちのほうが知っていて良さそうな話です。しかしあの写真の少年を知ったのは、教皇様を通してでした。教皇様は、最も助けを必要としている人に寄り添う姿を、私たちに示してくださったのです。

それだけでも日本全体が驚きましたが、教皇様はさらに、私たちのそば近くに来て、寄り添う姿勢を見せてくれたのです。82 歳で、足もとが少し不安そうに見えました。けれども教皇様はご自身の心配を横に置いて、日本のカトリック信徒に、日本の教会に、日本の社会に、最も助けを必要としている人に目を向けて寄り添ってあげなさいと模範を示しに来たのです。

ところで、皆さんも少しは聞いたことがあるかも知れませんが、教皇様は 80 歳以下の枢機卿様による選挙によって選ばれます。2013 年当時、世界の枢機卿様は 151 名いまして、そのうち 80 歳以下の、選挙権を持つ枢機卿様が 115 人いました。この 115 人が選挙して、フランシスコ教皇を選んだのでした。実は教皇ベネディクト 16 世が選ばれた時、二番目に票を集めたのがベルゴリオ枢機卿、のちのフランシスコ教皇だったそうです。

枢機卿団は、高齢で選ばれたベネディクト 16 世の後継者は、もっと若い、60 代後半から 70 代前半の人が選ばれるべきだと考えていたそうです。もう一つ、推薦の票が次点だった人が次の選挙で教皇様に選ばれたことは過去に一度も無かったそうです。そうなると、ベルゴリオ枢機卿は候補から漏れていたはずですが、神様は次の教皇様として、「最も助けを必要とする人のそば近くにいてくれる指導者」を必要としていて、選挙の行方を導いていたのだと思いました。

ですから、今、カトリック教会に必要な指導者は、「最も助けを必

要とする人のそば近くにいてくれる指導者」ということです。この必要な指導者の姿を完全な姿で示してくださるのは、言うまでもなくイエス・キリストです。今年のクリスマス説教のテーマも、「最も近くに来てくださった救い主」という形で示そうと思っています。来日したフランシスコ教皇様は、このイエス・キリストを見える形で、私たちに示してくださったわけです。私はその意味で、教皇フランシスコは今年最大の、神様からのプレゼントだったと考えています。

「『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」救い主の誕生は、「神は我々と共におられる」ということの証です。私たちが受け取るのは、人となって幼子の姿で現れた神様というだけでなく、「我々と共におられる」神様を受け取るのです。

幼子の姿に、すでに示されているものがあります。幼子は、腕に抱きかかえなければ、その場から動くこともできません。私たちと共にいるために、最も近くいるために示された姿が幼子という姿だったのです。すると、私たちが幼子イエスを迎えるために必要な準備があります。一つは、私たちは両手を空にして、幼子の誕生を待つ必要があります。もう一つは、「神は我々と共におられる」というメッセージを受け入れ、繰り返し思い起こしながら生きる覚悟です。

ヨセフはマリアと一緒になるために、思い悩みを捨てる勇気が必要でした。「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」（1・19）人間の思いを両手一杯抱えていましたが、身ごもっているマリアを受け入れるために、両手を空にする勇気が必要でした。人間にはできないことですが、夢に現れた天使の言葉をよく考え、神の助けに信頼し、まもなくお生まれになるイエスを、両手で受け取ることにしたのです。

マリアと、幼子イエスを受け入れたヨセフには、これからいくつもの困難が待ち受けています。けれどもヨセフが両手で受け取ったイエスは、「神は我々と共におられる」このメッセージの見えるしるしでした。たとえヘロデに命を狙われても、たとえエジプトでの生活が見通せなくても、「神は我々と共におられる」このしるしであるイエスを抱いて、毎日を過ごします。ヨセフの中にすでに、私たちに必要な準備のお手本があります。

さらに私たちは、教皇フランシスコを通して「神は我々と共におられる」この証しに生きるお手本を頂きました。まもなく迎えるご降誕は、「インマヌエル」「神は我々と共におられる」を受け取る日であり、「神は我々と共におられる」と証しする日の始まりでもあります。最も助けを必要とする人のそば近くにいてくれる指導者を私たちは見ました。私たちも証の生活をしながら、私たちの支えを必要としている人に寛大に心を開く。両手を空にして、残る日々の準備を急ぎたいと思います。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

救い主はあなたのそば近くに

主の降誕おめでとうございます。今年のご降誕を「人間にいちばん近い場所まで来てくださったイエス」とまとめたいと思います。私たちのためにいちばん近い場所まで来てくださった幼子イエスを受けとめ、人々に告げ知らせましょう。

今年、私たちは生涯忘れられない体験をしました。それは教皇様をこの目で見たということです。身体の調子その他で長崎での式典、あるいはミサに参加できなかった人もいるでしょう。そんな人も教皇フランシスコがいる場所は、少なからず見覚えある場所だったでしょう。

原爆落下中心碑、西坂公園、県営野球場。どれかは私たちがその足で立ったことのある場所のはずです。そこに教皇様が同じく留まってくださったことは、田平でテレビで観ていたとしても、それは教皇様をそば近くで見たのと同じです。離れていると言うなら、ミサの会場にいた人でさえも、目の前で見た人と 100ｍ離れていた人がいました。それでも教皇様をそば近くで感じたのです。

私たちがあと 10 年生きたとしても、これだけ近くに教皇様を感じることはできないと思います。教皇様を身近に感じたことで、ご降誕の神秘を通して、神が人間のそば近くまで来てくださったことを想像しやすくなりました。どんなに願っても、神が私たちのそばに来てくださることを私たちは要求できないのです。神が私たちのことを深く憐れんでくださったので、この神秘に触れることができました。

神は私たちの所まで来ました。どれくらい近づいてくださったのでしょうか。それは神が人間となられるところまでです。肉体を受け取るところまでです。弱さ、欠点だらけの肉体を受け取るところまで近づいてくださいました。今年のご降誕はこの点に特に注目したいのです。

私たちは肉体の弱さを嫌と言うほど思い知らされています。年齢を重ねてくると、ものを落としたり、手が震えたり、覚えていたことを忘れたり、本当に嫌になります。介護の時、良好な関係を保っている時は良いけれども、辛くなると当たったりします。そんな人間の弱さ、肉体の弱さを、神の独り子は受け入れられたのです。神が弱さを受け入れられたのに、私たちが現実を拒むことが許されるでしょうか？

神の独り子は私たちの弱い肉体、欠点だらけの肉体を取られました。私たちは人間の弱さを感じたり目にしたりします。その時こそ、私たちが人となられた神の神秘を告げ知らせる時です。神は御子イエスを通して、人間の弱さをとことん受け取られました。私たちは関わる人すべてに、神の子が人間のいちばん近くまで来られた。弱さにまで近づかれたことを感謝して告げ知らせましょう。幼子イエスがそば近くにいるうちに、神の不思議な救いの計画を人々に知らせに行くことにしましょう。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

「ことば」こそ、人間にいちばん近くあるもの

あらためて、主のご降誕おめでとうございます。ご降誕日中のミサでヨハネ福音書の冒頭部分が読まれます。この部分、今年は夜半のミサとうまくつながりをもって説教ができそうです。

夜半のミサの説教で、「いちばん近くに来られた救い主」について話しました。この日中のミサでは、「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（1・14）と証言しています。この宣言は、何がいちばん近くにあるものかを考えさせます。人間にとって、いちばん近くにある道具は何でしょうか。それは「ことば」ではないでしょうか。

私たちには目や口、手足といった見える部分がありますが、それ以上に近くにあるものがあるとしたら、それはことばではないでしょうか。この世に生を受けて、私たちは、最初は手足を動かす力もありません。ですが生まれたその時から「声」を発しています。頭も座っていない、寝返りも打てない時から、自分の存在を知らせるために「声」を発しているのです。これは、人間にとって最も近い道具が「ことば」だと感じさせる出来事ではないでしょうか。

また物心つくと私たちはことばで自分の意思を伝えます。ことばで思いを表現します。ことばを空虚なものにしないために、手足を使ってそれを証明しようとします。思いを伝えるため、多くの場面でことばが先にあるのではないでしょうか。ことばが先にあるのは、すなわちことばが私たちのいちばん近くにあるからだと思うのです。

イエスは「言（ことば）」です。「言（ことば）が肉となった。」ことばが肉体と一つに結ばれました。いつか、発せられたことばは肉を離れますが、これから発せられようとしていることばはその人の最も近くにいます。神は人間の最も近くにおられるために、「言（ことば）」としておいでになったのです。

ことばはいつか外に向かいます。ことばは相手を必要とするからです。私たちを離れて、誰かの元に届いていきます。ここで私たちは、外に向かおうとしていることばに十分注意を払うべきです。私たちと同じ肉体に、ことばが宿りました。ことばが肉となった姿をこのご降誕で見たのですから、私たちはこれから語ることばに十分注意を払うのです。

私の語ることばに、御子イエスがおられるでしょうか。私たちが他の人に向けて放つことばに、喜びの知らせが込められているでしょうか。私たちのことばにとげがないでしょうか。誰かを悪く言って自分を守ろうとする企みがないでしょうか。

神の言（ことば）が肉となった今、そのようなつまらない策を練っている場合ではありません。まっすぐに、口から溢れることばが救い主の喜びを告げることばとなるように、幼子の前に跪き、語るべきことばを受け取ることにしましょう。

主日の福音 2019/12/29(No.1039)

聖家族（マタイ 2:13-15,19-23）

エジプトからイエスが両親を渡らせた

聖家族の祝日です。イエスを迎え入れたヨセフとマリアが聖家族の姿です。私たちも家族の中にイエスを迎え入れることで、聖家族に近づくことができます。

鯛ノ浦から、「かんころ餅」が届きました。結構な本数でした。どんな品物でも、ある程度の本数で届くと風邪を引くようです。鯛ノ浦から届いた「かんころ餅」も、「ゴホンゴホン」と言っておりました。

今日は日曜日でありながら「祝日」です。一般に日曜日は「主日」と呼ばれますが、実際の典礼は理屈よりもっと面白く、理屈っぽくありません。ついでですが、神の母聖マリアのあとに祝われる「主の公現」は、日曜日に祝われていながら「祭日」であります。大勢の皆さんには気にするほどのことでもありませんが、気にする人もいるようなので並べてみました。

さて29日9時のミサで、亡くなっている田平教会歴代主任司祭、田平教会出身司祭、修道者、教会建設で命を落とした功労者のために祈っておりますが、教会新聞「瀬戸山の風」でクイズを出しておきました。百周年記念誌をよく見てみると、田平教会出身の亡くなった神父様の一人は、百周年記念誌の通りであれば私より一年あとに司祭に叙階されたことになります。

もちろん間違いを見落としているのですが、間違いに気づいた記念誌作成に携わっていない一般の方がおられましたら、主任司祭に声かけしてください。商品券をお渡しします。一応、20枚用意していますので、気づいた人は早めにお知らせください。記念誌編集にたずさわった人や、百周年の実行委員会メンバーは、見つけても商品券はあげることができませんのでご遠慮ください。

さて、亡くなられた諸先輩を思い浮かべる時、諸先輩方が肌身離さず持っていたものは何かと考えました。亡くなるにあたってはさまざまなものを手放さなければなりませんが、神様は幸いに両手をお与えくださって、両手で何か一つくらいは肌身離さず持って神様のもとへ行けるようにしてくださいました。何を最後まで握りしめていたのでしょうか。

それは、イエス・キリストだったのではないかと思います。どんな人でも人生の最後にあれもこれも持って旅立つことができないことは分かっていますが、それなのに持っていっても仕方のないものや、持っていくべきでないものにすがりつくこともあるわけです。そんな中で、ミサの意向に加えた諸先輩方は、イエス・キリストだけを、肌身離さず持って、旅立っていったわけです。

イエス・キリストを抱いて旅立つ人は、きっと生きている間もイエス・キリストがより頼むのに値するお方だと理解して生きていたことでしょう。イエス・キリストと縁遠い生活をしている人が最後だけイエス・キリストを抱きしめるとはとても思えないからです。どんな思いでイ

エス・キリストに自分を委ねて生きたのか、本人にしか分かりませんが、今日の福音朗読は、私たちの先輩方の思いを理解させる鍵になると思います。

本日の朗読箇所は、ヨセフを通して明らかにされた神の計画を紹介しています。主の天使が夢でヨセフに現れ、「エジプトへの避難」と、「エジプトからの帰国」に聖家族を駆り立てます。ヨセフには時間が与えられませんでした。何も持たずに、行動したのです。二度とも「起きて、子供とその母親を連れて・・・」と命じられていますから、あえて言えばイエスを抱きかかえてエジプトに逃れ、イエスを抱きかかえてエジプトから帰国したのでした。

エジプトでの生活がまったく見通せなかったにもかかわらず、イエスを抱きかかえていた聖家族は困難な生活を乗り越えました。エジプトから帰国する時、ヘロデの子アルケラオが引き続き命を狙う可能性があったのに、イエスと一緒であった聖家族はナザレで生活し始めます。何も見通せなくても、危険のさなかにあっても、イエスを受け入れた家族は常に守られ、導かれていくのです。

私たちが聖家族に近づくために必要なことがこれで見えてきました。聖家族はイエスを腕に抱く家族です。聖家族はイエスを家庭に受け入れた家族です。イエスを腕に抱いたまま、自分優先の生活はできません。イエスが家族の中にいて初めて自分の家族は成り立っている。そう理解できるようになった時、私たちの家族は聖家族に近づいていきます。

先が見通せない時、腕に抱きかかえたイエスを地面に置いて、両手を使って自力で道を開こうとしますか？イエスと共にいない未来を切り開いて何になるでしょうか。危険のさなかで、イエスを脇に置いて自力で安全を確保しますか？イエスに守ってもらえない安全に、何か意味があるでしょうか。聖家族に近づけば近づくほど、私たち神の家族はこのように考えるはずなのです。

もう一度、聖家族の前に家族で身を置きましょう。私たちは聖家族を遠ざけて生活を確立できるかどうかを。答えをはっきり示してもらったなら、正直にその答えに沿って歩きましょう。一人ひとりの人生、家族の未来、教会家族の未来も、聖家族に近づこうとするかどうかに、最初の一歩がかかっているのです。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)